

大津市歴史博物館調査報告書 4

膳所藩士羽太家諸事控

令和五年（二〇二三）三月

大津市歴史博物館

はしがき

大津市は、明治時代末年の『大津市志』の発行以来、数十年に一度、時代の要請に応じて市史を編纂してきました。その度に多くの古文書・歴史資料が調査され、その歴史情報が蓄積されてきました。

現在、市史編纂事業を引き継ぐ大津市歴史博物館では、館蔵、個人蔵を問わず、貴重な文化財の調査を通じて情報を発信しています。その中で、以前より有志の市民の方々のご協力のもと、古文書・歴史資料の調査・解読を進めてきましたが、令和三年（二〇二一）度よりその成果報告書を順次発行する取り組みをはじめました。

この報告書では、琵琶湖の南端、瀬田川河口部の膳所の地を拠点とする膳所藩において、地方役や奥向方などを勤めた藩士羽太家の古記録をまとめました。膳所藩に関する史料は、明治時代初年の廃藩時に散逸したといわれ、市中に残る膳所藩関係資料の調査、整理、保存は喫緊の課題の一つに位置付けられます。本史料は、江戸時代後半の限定的な期間の記録史料ですが、膳所藩や城下町、藩領地域の歴史や文化に関する情報が多くみられます。地域史の重要な史料の一つとして活用いただければ幸いです。

なお、最後になりましたが、本書の発行にあたり、解読、校正において大津古文書研究会の皆様には多大なる御協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。

令和五年三月

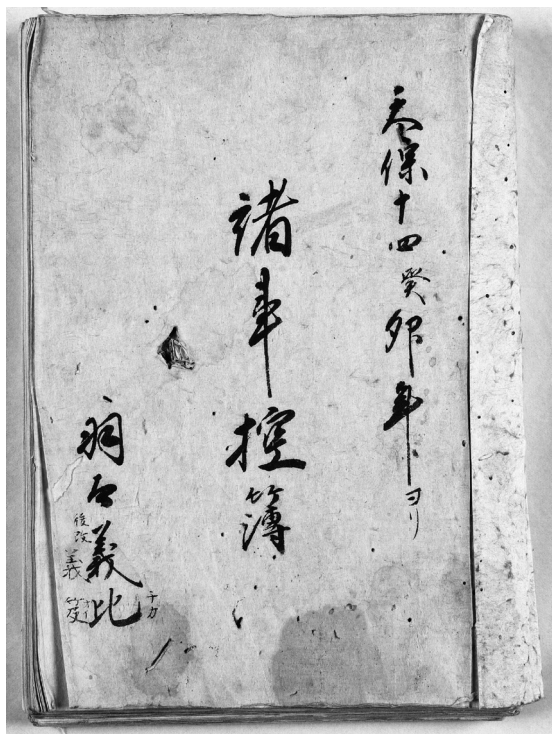
大津市歴史博物館

〔目次〕

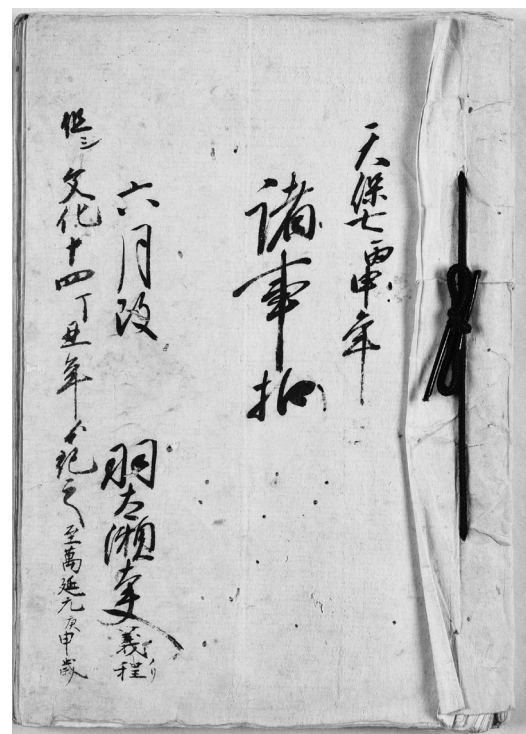
はしがき	1
目次・凡例	2
膳所藩士羽太家と「諸事控」 (解題にかえて)	4
一、諸事控(一冊目) 文化一四年〜万延元年	10
二、諸事控(二冊目) 天保一四年〜明治三九年	39

〔凡例〕

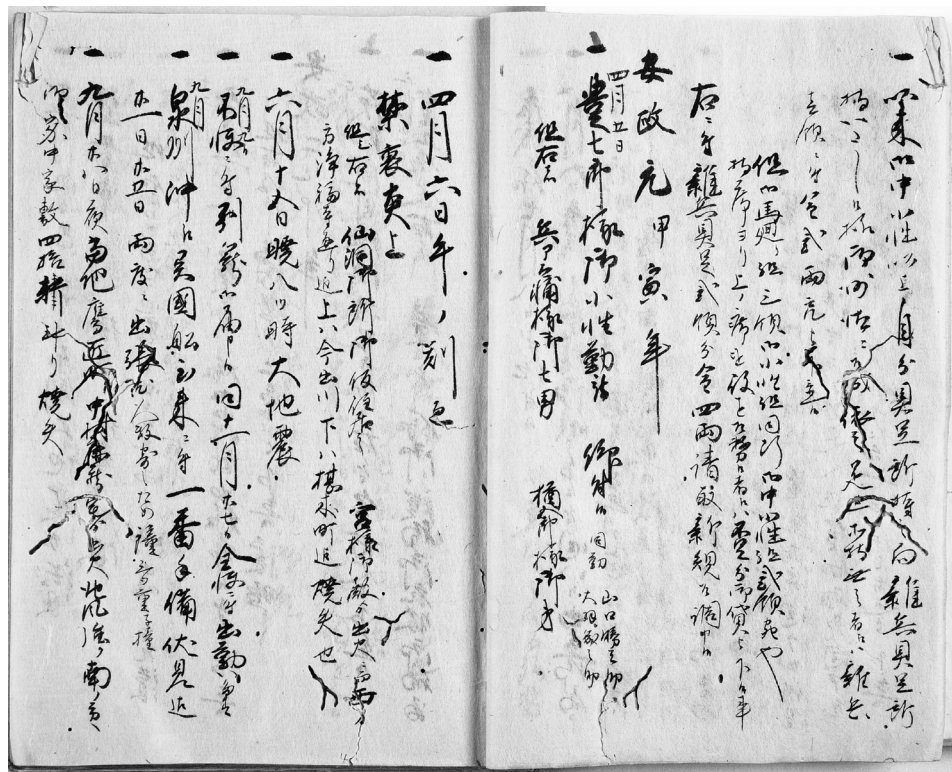
- 一、本史料集は、大津市歴史博物館が所蔵する膳所藩士羽太家の古記録「諸事控」を翻刻したものである。
- 一、解説にあたっては、大津古文書研究会の各氏の協力を得て、大津市歴史博物館の五十嵐正也、高橋大樹と、樋爪修(元本館館長)が原本照合を含めた校正をおこなった。なお、編集は高橋が担当した。
- 一、翻刻にあたっては、原本の体裁を尊重しながら、組版上の事情により、追込み形式とした。また、平出や台頭、欠字については省略した。
- 一、翻刻した文字について、変体仮名は現行の仮名に改めたが、江、而、与、者、茂などはそのままとした。また、*ㇿ*(より)以外の合字は仮名に改めた。さらに、旧字体、異体字については、固有名詞を除き、常用漢字に改めた。
- 一、虫損・欠損等による判読不能の文字については、その字数分を□で示し、字数不明の場合は「 」として表記した。
- 一、翻刻にあたり、適宜、読点を付した。また、傍注については、原本に()が使用されているためそれらと区別するために、右側に「」で括弧して示した。その際、誤字と思われるものは正字を付し、原本どおりの場合は「ママ」などと示した。さらに、墨消し(ミセケチ)の場合は、その文字に網掛けを施してある。
- 一、「諸事記」二冊目については、一つ書に朱筆による合点を付した箇所がある。それらは、「一、」に傍線を引いて示した。
- 一、本書利用者の参照の便のため、年次を「」で括り、ゴチック体で示した。
- 一、原本上で図示されている図面については、トレース図を掲載した。トレース図は、大津市歴史博物館職員の大村紀子が作成した。
- 一、史料には、賤称・蔑称などの差別用語とされる言葉が使用されている場合があるが、当時の社会情勢を正しく認識するためそのまま表示したものであり、差別を容認するものではない。読者においてはその点をよく理解され利用されたい。



膳所藩士羽太家「諸事控」(2冊目)表紙



膳所藩士羽太家「諸事控」(1冊目)表紙



膳所藩士羽太家「諸事控」(2冊目)(部分)

膳所藩士羽太家と「諸事控」(解題にかえて)

はじめに

本史料集で紹介する膳所藩士羽太家「諸事控」(二冊)は、同家第七代よしのり義程(一冊目)とその息子で第八代よしちか目義比(二冊目)が編年体でまとめた古記録である。後に述べるように、同家が膳所藩地方役や奥向役などを勤めていたことから、それにかかわる情報が随所に散見され、膳所藩の動静のみならず、城下や藩領のようすを知る貴重な史料ともいえる。まずは「諸事控」の内容を紹介する前に、これら二冊を含む羽太家資料が当館に収蔵されることになった経緯を述べておきたい。

令和元年(二〇一九)夏、「諸事控」を含む羽太家資料所蔵者が逝去され、その遺品整理をされていたご親族から一報が入った。遠方より来津されていること、そして整理の時間が限られていることもあり、急ぎ確認の上、歴史的な史料があれば寄贈したいとお申し出を受けたのである。ただちに高橋大樹(当館学芸員)と和田光生(現・大津市文化財保護課)が同家に赴いたところ、すでに宅内に分散されていた資料は一カ所に集められ、いくつかの紙箱に収められていた。また、資料を確認すると、数点紙札が付され、名称と簡単な内容が記されていた。それらは、過去にどこかで公開(展示)されたと思しき形跡と見受けられた。

なお、資料群は「表1」に示したとおり、文書(二二点)と器物(九点)から成る。資料群は、総じて「諸事控」と充行状、家移りに関する指図、それに家譜としての「由緒書」、そして旗印や兜などである。その中で、羽太家「諸事控」の記述と関わると思われる「由緒書」から羽太家の来歴についてまずは確認しておきたい。

一、由緒書にみる羽太家の来歴

羽太家資料に含まれる二点の「由緒書扣」は、同家の家譜として歴代当主の経歴が列挙されている。一点は享和二年(一八〇二)十一月、同家第六代目羽太幸蔵が作成したもので、同人と父(第五代目、義都)の二名分の情報が記載される(文書3)。

もう一点は、慶応三年(一八六七)三月、同家第八代目の羽太新司がまとめたもので、第四代〜第八代の五人分の情報が列記されている(ただし羽太新司分は同年の情報まで。文書4)。また、二冊目の冒頭には、羽太家が三河西尾時代より藩主本多家に随従し、慶長年中から御持組に召し抱えられたことが記されているが、寛政四年八月の類焼によって旧記が湮滅し、詳細(初代〜三代)は不明ともある。

ところで、この由緒書の作成契機は、同じく二冊目末尾の朱筆により明らかとなる。すなわち、慶応元年に「御家中由緒書御取調」が通達され、提出期限は同二年五月とされた。しかし、膳所藩内の「諸手繁務」により同二年一〇月まで延期され、改めて同三年三月に提出するように通達されたようだ(この点は、「諸事控」にも記されている)。膳所藩士の各家文書には、慶応三年の由緒書が残されていることが多く、その作成は以上のような経緯によるのだろう。

さて、改めて由緒書より羽太家の来歴を簡単にみておくと、「表2」とも重複するが次の通りとなる。

【四代目 瀬大夫義榮】

享保年中に御持組となり、元文五年九月七日に死去。

【五代目 瀬大夫義都】

元文五年十一月、父義榮の死去の二ヶ月後に家督を相続する。以降、天明八年二月に逝去するまで、御持組、勝手方御用、中小姓役などに昇進している。この間、長男五郎次郎が誕生し、膳所藩士として取り立てらるが、安永六年二月に死去している。これにともなう、同年八月に二男善次郎を嫡子としている。

【六代目 新左衛門義貌】

父義都の二男として安永七年九月に御勘定所見習いとなって以降、天明

二年六月に幸藏に改名。続けて父の死去にともない、天明八年四月に家督を相続している。以降、諸職を歴任し、一時、寛政八年に役前不行き届きにて減給・配置換えがあったものの、二年後には帰役している。文化一〇年二月には新左衛門に改名し、晩年は遵義堂手習世話役、奥向役などを勤め、天保三年九月に亡くなる。

【七代目 瀬大夫義程】

一冊目の「諸事控」の記主である義程は、文化一四年の御目見以降、地方役や石部・草津宿助郷取締り、国絵図取調べ掛り、さらに奥向役、殿様御部屋住などを歴任し、嘉永二年には寿明君下向にかかる役方も務める。万延元年に死去。

【八代目 新司義比】

二冊目の「諸事控」の記主。天保一四年に本多家御部屋住となり、弘化二年には御中小姓組に属する。安政元年には家老本多豊七郎付御小姓を勤め、同四年に新司に改名した。その後、文久元年には家督を相続して御馬廻組となり、和宮御下向の用掛も務めた。同三年の禁門の変時には藩主とともに京都にのぼり、慶応元年には大戸川筋通船取調掛、御纏奉行などを歴任する。

(以上、高橋大樹)

二、記主羽太義程・羽太義比の縁戚関係について

「諸事控」の記事の中には、記主である羽太義程や羽太義比の親族に関するものが散見される。そこで、羽太義程・義比についての親族関係について整理しておきたい。なお、特に断りがない限りは、「親族之覚書」(文書5)を参照した。

羽太義程、義比の親族で最も多いのは、当然のことであるが、羽太家と同じ膳所藩士の家である。義程の母は中嶋家出身であり、義程の子である秀之丞(のち郡次、緑と改名)は中嶋家に養子に入り、家を継いでいる。同じく義程の子政之丞(のち亀五郎と改名)は鈴木家を継いだ。義程の娘

延栄(のちひさと改名)は神谷保太郎に嫁いだ。中嶋郡次と鈴木亀五郎は、明治二年(一八六九)頃の状況を記したものとされる『膳所藩名簿』(竹内将人編、一九七四年)に拠れば、共に高六〇石で七番組に編成されている。神谷保太郎は羽太義比と同じ三番組であり、共に高六〇石である。また、羽太義比が晩年に養嗣子とした千葉精三郎は神谷保太郎の従弟であるという(「諸事控」明治三五年条)。羽太・中嶋・鈴木・神谷の四家は膳所藩の中でもほぼ同格だったとみてよい。この三家以外にも、羽太家は杉浦家や中村家、中野家とも親戚関係にあった。

次に多いのは、大津や栗太郡など、近隣の他領主の家である。義程の娘春栄(のちふさと改名)は、栗太郡澁村(領主は旗本渡辺氏)の西田家に嫁いでいる。羽太義比の最初の妻は、野洲郡野洲村(領主は旗本斎藤氏)の竹内次右衛門の娘であった。義比の後妻である仲は、大津代官小野氏配下の川嶋氏出身である。これらは、距離的な近さもあって縁戚関係を結んだものと思われる。

公家や京の寺社関係者とも縁戚関係が結ばれている。義程の娘多美(のちとしと改名)は「禁裏御内」である藤林左馬少允に嫁いだ。羽太義比は嗣子がなく、明治一六年二月に養子を迎えることになった。養子となったのは、随心院門跡に仕えていた岡本義房の三男金三郎であった(明治二六年に離縁)。金三郎の祖母は義比の弟政之丞が跡を継いだ鈴木家の出身であり、もともと岡本家と羽太家は遠戚にあたる関係であった。距離的に京と膳所は近く、膳所藩は京の火消を担うなど京と膳所の関係は密接であった。この密接な関係が、他藩士にはあまりみられない、公家や京の寺社との縁戚関係という形であらわれているのではなからうか。

なかでも、公家飛鳥井家との関係は特筆される。羽太義比の後妻仲は先述した通り、川嶋氏であるが、飛鳥井家家臣安田宮内の養女として嫁いでいる。この安田宮内の祖母は義比の祖母の妹であり、ともに膳所藩士中嶋氏の出身である。

飛鳥井家は膳所藩主本多家と縁戚関係にあった。「本多家譜」(東京大学史料編纂所蔵写本)によると、宝暦〜天明期に膳所藩主本多康伴の養女が

飛鳥井雅威に嫁いでいる。また、「諸事控」(二冊目)によると、文久元年(一八六一)四月本多康禎娘松姫が飛鳥井雅望と縁組し、同年五月に入興する予定だったが、松姫が程なく病死してしまったという。このように膳所藩本多家と飛鳥井家は遠戚関係を結んでいたが、それぞれの家来どうしも縁戚関係を結んでいたことが明らかになった。このことは、家中を含んだ広義の意味での家どうしの縁戚関係を探るうえでも興味深い事例といえる。

(以上、五十嵐正也)

三、羽太家「諸事控」について

本書で紹介する羽太家「諸事控」二冊は、先にも述べたように、膳所藩の動向、城下町のような読み解く上で貴重な情報を有する。また、羽太義程や義比それぞれの来歴も詳細である。おそらく先にみた「由緒書」はこの「諸事控」の記述を参照して作成されたと考えられる。これを裏付けるものとして、二冊目の「諸事控」(義比筆)には、一つ書の中で朱点が付された箇所がある。それらはいずれも「由緒書」にも示された新司の経歴に関する記述であり、「由緒書」は「諸事控」に記された来歴を抄出したものであることがあきらかであろう。

さて、以下では「諸事控」の内容について、羽太家各人の経歴を除き紹介しておきたい。

【諸事控(一冊目)】文化一四年(一八一七)〜万延元年(一八六〇)

まず文政一二年三月二日、江戸表屋敷(御殿・長屋)が類焼し、再建の御用金が藩領内に掛けられ、五年間の儉約令も通達された。この類焼は延享三年(一七四六)以来のことであるとも注記される。また、天保五年二月一〇日にも類焼し、領内に二〇〇〇両上納が命令された。

この後、天保六年には「諸国御国絵図御調」が水口藩とともに膳所藩に命じられ、同八年六月には天保国絵図にかかる御用として羽太義程が江戸

に赴いている。また、さかのぼる同年二月には大塩平八郎の乱が発生し、その動静を記すとともに、膳所藩にも加勢の人数を差し出すように達しがあつたという。同年末には、藩主本多康禎が従四位下に昇叙され、弘化四年四月の康融、安政三年の康稔への家督相続など、藩主家に関する情報も折にふれて記載されている。また、この間の嘉永年間には、異国船到来にともない羽太が江戸に派遣され、混乱する世上の様子も記している。

なお、「諸事控」は災害関係の記述も詳細であることが注目される。例えば、天保七年八月上旬の集中豪雨による湖水位の上昇のみならず、城内二ノ丸玄関前まで浸水したことなど、水害情報を詳細に記している。この時、膳所以外の情報として、大津石場・小舟入あたりでは膝あたりまでの増水が確認されたという。また同じく水害として万延元年五月の大雨による水害被害も詳細に見聞を伝えている。さらに、さかのぼる嘉永七年六月一四日に伊賀で発生した地震(安政伊賀地震)による被害についても詳細で、城郭だけでなく、城下町の被災状況なども記している。このように羽太義程が実際に見聞した災害の様子が記されている点に特徴があるろう。

【諸事控(二冊目)】天保一四年(一八四三)〜明治三九年(一九〇六)

二冊目の諸事控は、一冊目と十数年の時期の重なりがある。その時期については、およそ「由緒書」の内容と重複することも多く、ここでは一冊目の次年にあたる文久元年以降の内容をみておきたい。文久年間、將軍徳川家茂の上洛があり、それにともなつて膳所藩が御用掛りとなったこと、またその道中の動向が簡略ながら記されている。以後、幕末の動向として、禁門の変の経緯を詳細に記すとともに、慶応元年には、膳所十一烈士事件についても触れている。以降、羽太家に到来したであろう政局の情報を列記していく。

また、明治時代に入ると、藩治職制の設定、膳所藩制度の改革ともに、士族卒族帰農に関する一連の動向が詳細に記述される。廃藩置県以降、羽太は一時滋賀県に出仕するも、わずか一年で辞職する。明治一五年には滋賀郡第七小学区務委員などを勤めていることがわかるが、以降の職歴は不

明な点が多い。明治時代中期以降は、新聞等の情報もあつてか、社会情勢だけでなく、西南戦争や琵琶湖疏水の着工、大日本帝国憲法発布、大津事件、日清戦争などが記される。

おわりに

以上、簡略ながら、羽太家資料の概要と各当主の略歴、そして「諸事控」の内容を紹介してきた。これら二冊の「諸事控」は、日記とは異なり、後々に備忘録としてまとめられた箇所もあつて限定的な情報であることは否めない。しかし、膳所藩関係の記録類は、明治初年に廃棄されたとされており、同藩の動向を知るための史料はわずかである（『懐郷坐談』）。ただし、各藩士家には、先にも触れた「由緒書」や充行状など、わずかながら古文書・古記録が伝来していることがある。

当館では今回紹介した羽太家資料をはじめ、いくつかの膳所藩士家資料を収蔵している。また館外でも、膳所藩歴史資料室保管の中神家資料・山中家資料、さらに本多神社（膳所藩資料館）や藩主菩提所縁心寺にもいくつかの藩士資料が残されている。これら伝来の経緯は不明ながら、後者の寺社に寄せられた藩士家資料は、各家の廃絶などを契機に寄贈されたものが多いようである。いづれにせよ、こうした藩士資料は、史料の残存状況が乏しい膳所藩の藩政史を紐解くことができる可能性があり、今後も調査、整理の上、その内容を明らかにしていく必要がある。

（以上、高橋大樹）

[表1] 羽太家資料目録（番号は仮）

(文書類)		(器物類)	
1	諸事扣（文化14年～万延元年）	1	本多康讓写真（明治23年4月）
2	諸事控簿（天保14年～明治39年）	2	羽太新司写真（明治31年10月）
3	由緒書扣	3	硝子写真
4	由緒書扣	4	布旗印（羽太瀬太夫、中島秀之丞、羽太新司）
5	親族之覚書	5	立葵印
6	記（葬式帳）	6	羽太家家紋風呂敷
7	宛行状 （元治元年10月30日 羽太新司宛 本多康穰）	7	羽太家内敷
8	宛行状 （安政3年9月27日 羽太瀬太夫宛 本多康穰）	8	羽太家家紋（断簡）
9	書状断簡	9	陣笠
10	羽太家建家指図（明治26年3月24日）		
11	羽太家建家指図（寛政5年5月6日家移）		
12	屋敷地并畑地図面式分ノ積（明治8年）		
13	寂蓮法師・定家・西行法師和歌懐紙		
14	藪地替地絵図（明治5年4月12日）		
15	藪地替地絵図（明治5年4月23日）		
16	羽太家所有地覚書		
17	旗印（下書きカ）		
18	滋賀郡膳所村大字膳所第三百八拾壹番地建物（屋敷図）		
19	屋敷地指図（子6月29日）		
20	屋敷地指図		
21	屋敷并畑地租図（明治10年）		
22	屋敷地指図（明治5年5月）		

〔表2〕「由緒書」にみる羽太家歴代

4代目 羽太瀬太夫 義榮

享保年中	(1716～)		御持組。
元文5年	(1740)	9月 7日	死去。

5代目 羽太瀬太夫 義都 (儀平次、実父中村儀右衛門二男)

元文5年	(1740)	11月	養父瀬太夫より跡目相続。御持組。
宝暦2年	(1752)	2月	御勝手方御用 (大坂天満御屋敷詰)。
宝暦4年	(1754)	5月	(御勝手方) 御用を終え、膳所に戻り御勝手方物書。
宝暦7年	(1757)	12月 23日	切米6石5斗、2人扶持。御役料高嶋米4俵。一代切古組。御勝手方物書。
宝暦12年	(1762)	5月 13日	1石加増。都合7石5斗。
明和元年	(1764)	6月 17日	御役前出精につき永代古組。
明和2年	(1765)	7月 4日	年来実体に御勘定人格。
明和4年	(1767)	8月 5日	永代御勘定人証文方。御役料2俵加増。都合6俵。
明和7年	(1770)	6月 14日	御役料6俵のところ、2人扶持に御直。
安永3年	(1774)	12月 28日	一代切御中小性。
安永5年	(1776)	4月 23日	永代御中小性。
		12月 28日	1石加増。都合8石5斗。
安永6年	(1777)	8月 15日	二男善次郎嫡子願い聞き届け。
安永8年	(1779)	2月 29日	1石加増。1人扶持増。都合9石5斗、3人扶持。証文方御免。御本丸番。
		6月	御弓櫓預り。
天明8年	(1788)	2月 19日	死去。

羽太五郎次安房 (初名 林次)

明和4年	(1767)	3月 15日	御勘定所見習。
明和6年	(1769)	9月 25日	銀2枚、2人扶持。御徒士組。
明和7年	(1770)	3月 26日	7石5斗。当年江戸立帰御供。
安永元年	(1772)	3月	当年江戸御供詰。
安永2年	(1773)	12月	1石加増。都合8石5斗。
安永6年	(1777)	2月 7日	死去。

6代目 羽太新左衛門義貌 (初名 善次郎、幸蔵)

安永7年	(1778)	9月 27日	御勘定所見習。
安永8年	(1779)	9月 27日	銀2枚、2人扶持。本役。
天明2年	(1782)	6月 25日	幸蔵に改名願い。聞き届け。
		12月 18日	切米6石。
天明4年	(1784)	8月 7日	南水所小検見見習。
天明7年	(1787)	4月 5日	御城米御廻米御用掛。
天明8年	(1788)	4月 11日	親瀬太夫跡目相続。切米9石5斗、2人扶持。御中小性組。
寛政8年	(1794)	12月 23日	1石加増。都合10石5斗。
寛政8年	(1796)	11月 4日	類役・役前不行届により切米1石取上。御賄支配御台所番。
寛政10年	(1798)	12月 25日	御中小性組。御勘定所帰役。
寛政11年	(1799)	4月	井伊掃部頭様御鷹場御巡見にて地方役助。
寛政12年	(1800)	正月 11日	1石加増。都合10石5斗。
文化元年	(1804)	6月 9日	御勘定所吟味役肝煎兼帯。
文化2年	(1805)	6月 4日	土代官町方支配下役兼帯。
		6月 28日	往還支配下役兼帯。
		10月	以前の通り地方役名目替。
		11月 1日	御役料御蔵米5俵。
文化3年	(1806)	12月 21日	1石加増。都合11石5斗。
文化4年	(1807)	7月	異船渡来、若狭・越前両国筋内御用。
文化5年	(1808)	12月 18日	御小性格。
文化7年	(1810)	11月 5日	測量術皆伝にて御小性組。
文化10年	(1813)	2月 21日	新左衛門に改名願い聞き届け。
		閏11月19日	郡方御目付兼帯。
文化12年	(1815)	12月 19日	御役料2人扶持。
文化13年	(1816)	12月 22日	2石加増。都合13石5斗。御馬廻組。
文政元年	(1818)	11月 16日	御蔵目付役。御役料高嶋米5俵。
文政6年	(1823)	8月 25日	御米蔵賊一件にて御役儀御免。
文政7年	(1824)	2月 9日	算術取立世話。
文政8年	(1825)	8月 27日	遵義堂手習世話。
天保3年	(1832)	5月 5日	奥役。良鑑院様御用向・奥向御取締兼。御役料高嶋米2俵。
		9月 2日	死去。

7代目 羽太瀬大夫義程（初名 金吾、辰弥）

文化14年	(1817)	6月	3日	御目見。
文政2年	(1819)	2月	5日	地方役見習御雇。御手当御蔵米5俵。
文政3年	(1820)	11月	23日	辰弥改名願い聞き届け。
文政6年	(1823)	正月	15日	御蔵米9俵半。御中小性。
文政10年	(1827)	12月	21日	御蔵米15俵に御直。
文政11年	(1828)	12月		御充行本俵に御直。
天保2年	(1831)	12月	23日	地方本役。御役料2人扶持。
天保3年	(1832)	正月	23日	草津宿貫目改、石部・草津両宿助郷取締兼帯。
		10月	23日	親新左衛門跡目相続。12石5斗、2人扶持。表御小性格。
天保5年	(1834)	12月	19日	御講御用掛。
天保6年	(1835)	5月	11日	瀬大夫改名願い聞き届け。
天保7年	(1836)	6月	13日	御国絵図取調御用掛。
天保8年	(1837)	4月	9日	御旧領御戻願い。麻御上下一巻、金1000疋、別段200疋。
		6月	18日	御国絵図御用立帰出府。
天保9年	(1838)	3月	4日	御国絵図取調、出府御用向格別金300疋、別段150疋。
		4月	15日	詰中出精金300疋。膳所表へ御暇。
		12月		曾木村・小田原村・禪定寺村山論一件数年来格別出精取暖・事済、金500疋。
弘化元年	(1844)	3月	24日	御役前御免。
弘化3年	(1846)	3月	21日	奥役。殿様御部屋住・豊七郎様御用向兼帯。御役料高島米2俵。
		5月	8日	殿様御部屋住御別宅御附。御役料高島米3俵。
弘化4年	(1847)	7月	1日	奥役帰役。豊七郎様・映松院様御在世御用向兼帯。御役料高島米2俵。
嘉永元年	(1848)	正月	11日	御馬廻組。
		正月	15日	具足差出、御褒美金500疋。
		5月	4日	神戸様御用向河州表罷越、翌年4月交代。御勝手吟味役交代、相詰。
嘉永2年	(1849)	4月	19日	当秋、寿明君様御下向往還筋修復奉行。
		12月	17日	寿明君様御下向役方行届、公辺御賞美。
		12月	17日	寿明君様御下向役出精、麻御上下一具、金300疋。
嘉永3年	(1850)	正月	13日	豊七郎様御用向兼帯御免。金100疋。
嘉永4年	(1851)	3月		立帰出府女中附添。金200疋。
嘉永5年	(1852)	7月	3日	地方帰役。御役料2人扶持。
		9月		郷中御講御用掛。
		12月	21日	具足差出、当春仲同様具差出、御賞美麻御上下一巻、金1000疋。
嘉永6年	(1853)	3月	4日	遊行上人秋勝部村最明寺へ御出御用掛。
安政元年	(1854)	正月	13日	新知60石。
		8月	12日	谷様御用向、丹波山家へ罷越。
安政2年	(1855)	10月	30日	谷様御用向御免。
安政3年	(1856)	3月	7日	谷様御勝手向御取締御用出精、麻御上下一巻、金100疋。
万延元年	(1860)	12月	9日	死去。

8代目 羽太新司義比（初名 武次郎、巖）

天保14年	(1843)	6月	9日	殿様御部屋住御相手。
		7月	15日	御中奥御目見。
弘化2年	(1845)	8月	1日	米9俵。御中小性組。
弘化3年	(1846)	6月	1日	隆徳院様御在世御相手助役。
嘉永3年	(1850)	7月	7日	巖に改名願い、聞き届け。
		7月	8日	御軍事大筒方。
		8月	2日	隆徳院様御相手助御免。金100疋。
		12月	14日	直心影流目録伝授御褒美金300疋。
嘉永4年	(1851)	12月	23日	米15俵に御直。
嘉永5年	(1852)	正月	19日	種田流目録伝授御褒美金300疋。
嘉永6年	(1853)	3月	22日	当年江戸立帰御供。金300疋。
安政元年	(1854)	4月	5日	豊七郎様御小姓勤。
安政2年	(1855)	正月		萩野流目録伝授御褒美金100疋。
安政4年	(1857)	7月		真野流目録伝授御褒美金100疋。
		12月	9日	新司に改名願い、聞き届け。
安政5年	(1858)	12月	23日	豊七郎様御附、御役料高島米3俵。
文久元年	(1861)	2月	3日	親瀬大夫家督相続、50石。御馬廻組。
		9月	27日	和宮様御下向御用掛。
		12月	18日	御同所様御下向御用掛格別出精、麻御上下一具、金1000疋。
文久2年	(1862)	正月	13日	和宮様御下向御役方・御道中筋御道固行届にて公辺御賞美。
		10月	3日	来春御上洛御用掛。
文久3年	(1863)	3月		御上洛中京都へ度々詰、6月12日御目見上御意。
		8月	18日	京都異変殿様御上京中登京、御参内中にて御所詰。出張中格別思召金500疋。天賜金拝戴。同10月思召金250拾。同11月御意。
		4月	28日	豊七郎様御附御免。金300疋。
		6月	12日	御上洛中京都度々詰。
		10月	25日	当年御上洛御用掛、京都仕出方上締格別出精にて白鞆御脇差一腰、金5両、金200疋。
元治元年	(1864)	6月	28日	長州人一挙にて殿様御出京御供。太秦詰。御手当金1両。同7月19日御所擾乱、御築地内詰。
		12月	29日	10石加増。都合60石。
		12月	1日	野洲辺脱走賊徒一条、鳥居川村出張、同26日御供。
慶応元年	(1865)	正月	19日	萩野流免許御褒美麻御上下一巻、金300疋。
		閏5月	2日	御進発御泊城御用掛。
		6月	7日	大戸川筋通船取調御用掛。
		12月	9日	御家中拝借金御用掛。
慶応2年	(1866)	4月	27日	御繼奉行。
		7月	18日	城州橋本へ御警衛詰、8月17日詰中御目付役。同11月4日滞りなく金200疋。
		12月	27日	御家中拝借金御用掛出精金200疋。

一、諸事控〔一冊目〕

文化一四年〔万延元年〕

〔表紙〕

天保七丙申年

諸事扣

六月改

羽太瀬大夫 義程

但シ文化十四丁丑年ノ記之、至万延元庚申歳

〔本文〕

羽太瀬大夫

義程〔花押〕迎

長男

同 新司

義比〔花押〕宜

后改

義笈〔花押〕

脛

〔文化一四年〕〔文政一四年〕

一、文化十四丁丑年六月三日、御目見被仰付候、

一、文政二己卯年二月五日、御蔵米五俵被下置、地方役見習被仰付候、

但年々為御褒美御蔵米式俵ツ、被下置候、

一、同三庚辰年十一月廿三日、金吾事辰弥与改名之事、

一、同六癸未年正月十五日、御蔵米九俵半被下置、御中小性組被召出、

勤方者是迄之通被仰付候、

一、同十丁亥年十二月廿一日、御蔵米拾五俵ニ御直し被下置候、

一、文政十一戊子年十二月、部屋住料一統本俵ニ御直し被下置候段御達し有之、

一、同十三庚寅年八月五日、地方役無人ニ付、勤方本役同様ニ相心得候様御頭中ノ御達し有之、

一、同十二丑年三月廿一日夕、江戸表御屋敷御殿、御長家向不残御類焼二付、五ヶ年之間歳敷御儉約被仰出、年限中御家中御借米被仰付御領分中江御用金六千兩被仰付、内三千兩八当丑年上納、残り三千兩八寅、卯兩年ニ上納之事、
但延享三年以来之御類焼、

〔天保元年〕

天保元庚寅年十一月十九日

一、お琴義、京都平野社司伊藤山和守悴河内守妻ニ相行付、京都親類安

田宮内七話、

〔天保二年〕

同二卯二月廿三日、江戸表ニ而御達し、

一、大江、大萱、矢橋、御倉村御用ニ付、御上知被仰付候、尤大萱村之内枝郷、新浜村、大萱新田共、

同年十二月御達し

一、湖水縁村々地先新開被仰付候、御取調掛石原清左衛門様、多羅尾鞆負様、

同年十二月廿三日

一、地方役被仰付、為御役料式人扶持被下置候、

〔天保三年〕

同三壬辰年正月廿三日

一、草津宿貫目改懸并石部、草津助郷取締兼帯被仰付候、

但同役江も同様被仰付候、尤大津宿助郷取締之義無之候得共、是ハ勿論掛り之事也、

同年六月七日

一、役前誓詞被仰付候、

同年十月廿三日

一、跡目左之通被仰付候、但壹石減少ニ相成候、

拾式石五斗 貳人扶持

右親新左衛門為跡目被下置、御小性格被仰付、勤方は迄之通被仰付候、

〔天保四年〕

同四巳年

一、六月十日方同八月三日、河州表御屋敷江相詰候、

一、同巳年冬、米壹俵二付五拾匁余之直段也、

〔天保五年〕

同五午年

一、二月十日、亦候江戸表御屋敷御建物不殘御類焼二付、三ヶ年之間嚴敷御檢約、御家中御借米被仰付候、御領分中へ御用金式千兩当年上納被仰付候、

但御屋敷御普請之義、先年者大分建物等入御念候処、毎々之義二付、此度ハ御省略之由、

同年春

一、江戸表江御城米之内七千五百俵御廻米被仰付、此度者大坂廻船方へ御渡切ニ相成候付、上乘方二者及不申候、二月方大坂江米御下しニ

相成、右之御用掛り別段夫々江被仰付候事、

但右米御下し之節、先年ハ御廻米掛り大津問屋へ何日頃る廻米差下し候、右二付上之番無口錢ニ而差下し候義も有之、旁案内いたし候与申模様ニ而手紙差遣し候而処、右之趣致承知候段返書参り候、先格二候、然ル処此度者地法之義ニ付稼人足方口錢取之候趣申聞候、依之、無抛石原様手代三好順之助江内談前格通相成候様引合之義、此方参り候様御元々中申聞ニ付罷越、種々引合内談候処、何分先年ハ扱置、当時地法之義且彦根様も同様口錢申請候由ニ而、甚六ヶ敷申成し候得共、段々及引合候処、尚後勘弁いたし候趣申聞候、然ル処、御出入大津表貝屋七兵衛江右同人方仲人噺申付候由ニ而御勝手方へ参り申談有之、相調之候、其趣意者此度も先格通手紙計ハ取遣りいたし、扱持夫江者貝七方口錢札相渡し、表向ハ口錢差出し候様二いたし、内実者口錢なし空札ニ而相濟候也、尤此方ハ掛りニ而者無之候事、

右引合いたし候付、左之通被下置候、

金貳朱

羽太辰弥

右御廻米二付、大津表江為引合毎々罷越候付被下置候、

五月廿五日

同五午年五月十七日

一、吉五郎殿揚り屋拔出候節、鈴木長次、宇治熊吉当番不念二付、永之御暇ニ被相成候、右二付隠居猪助義御憐愍を以四人扶持被下置、勤方は迄之通被仰付、御叱之上差扣、此方ハ從弟二付御用外慎被仰付候、但猪助義隠居ながら米三俵敷被下、是迄御中小姓席ニ而御番方被仰付相勤居候事、

天保
同五午年七月十八日

一、中嶋小三郎当時郡次卜改名家督被仰付候、十石減少ニ而五拾五石敷、

御馬廻り、

同五午年春頃

一、此度御講御用掛被仰付候、但同役二而掛り鈴木覚右衛門、宇治弥兵衛、此方都合三人、

同五午十二月十九日、講名天五与申候、

一、新御講御取結御用出精二付金二百疋被下置候、

〔天保六年〕

同六乙未三月朔日

一、石部宿取締御用掛被仰付候、鈴木覚右衛門、宇治弥兵衛申談、月二両三度宛罷越見廻り可申段被仰付候、

同年五月

一、此度由緒書御調二付差出入、扣別紙二有之、

同年五月十一日

一、辰弥事瀬大夫与改名、願之通御聞濟之事、但御在城二付当日御聞濟、

〔天保七年〕

同七丙申年六月十三日

一、此度諸国御国絵図御調二付、当国者此方様、水口様へ御調被仰付候、左之通被仰付候、

此度国絵図取調被仰出候付、御用掛被仰付候、

但元禄年中御調之節二、彦根様、此方様江被仰付候処、此度ハ彦根様御大老二付御役柄故歟、右之通二被仰付候、元禄以来之御調也、尤此方様御用掛り先年者別段夫々江被仰付候由之処、今度ハ郡方

江奉行、地方役一統江被仰付候、

天保七丙申六月朔日、江戸御発駕十四日御着、四ツ時頃

一、此度殿様之為御名代若殿隼人正様御登被遊候、御年廿五才、御初入

与申御廉二無之、諸向上ケ物等一切無之候、殿様与御同様、乍然御着城御出迎者御家中之面々麻上下着用御出迎申上候様被仰聞候、

但勢多の麻御上下御乗馬二而御着城被遊候、尤御家督之上、初而

之御登り者御入部二候得共、若殿様之義二付、此度者御初入二候得共、御檢約候之義故歟、右之御廉二無之、為御名代御登り之事、

同年六月廿七日方出張、両宿二而五、六日相懸り之事、

一、宿々役人并助郷村々庄屋、年寄、定使、都合老ケ村二三人ツ、不法不取計等之義致間敷之誓詞、血判被仰付候、為見届地頭役人両宿へ出張之上為致候、尤関東御代替り之廉也、天明七年方以来相止ミ有之候処、尚又此度被仰出候、此方様二而見届方者先格之通、大御目付、郡奉行、大御目付之書役老人、郡方先年ハ書役有之候処、當時無之二付、御勘定所之内御勘定人取之□□候事、出役名前大目付箕浦猪左衛門、郡奉行森喜右衛門、大目付書役浅野両右衛門、御勘定人杉浦義八、都合四人、其外供召連之事、尤血判之上写を公辺江差出し候事、

天保七申八月上旬□□

一、当年ハ水年二而、抑春以来る土用中前後共雨天統、六月七日、八日頃別而強く降、湖水高水二相成、九日方八丁繩手惣水込上、惣御門先森河川之石橋辺迄旅人舟渡相成候、往還手重二取扱之事二候得共、心得之ため記シ置、舟ハ両方二式艘ツ、都合四艘橋本村へ申付昼夜為出候、尤通之多少二而舟増方取計可有事、御大名様方御通行之先触来り候得ハ、御上るひらだ舟御差出し有之候、但舟渡場之間夕之掃除ハ、丁場持之村々所役人日々罷出セ話いたし候、勿論御徒士目付セ話いたし候事、

一、御太切之御通行等有之節ハ、鳥居川村方西手北大路道江案内いたし、

夫の浦町を通り宮町通り之西行当り、近藤見友之横へ出ル、往還道筋案内いたし候由、

一、当町筋水漬ハ靈照院前少々有之、響忍寺前ハ泉水寺榭形迄西ノ庄宮之前五十間計、大津二而ハ石場七、八十間計浜町通り小舟入五十間計、何レも膝之当り迄水漬候由、

一、御城内二ノ丸御玄關前、御台所前、大書院御庭等七、八寸計水漬候事、
一、右繩手舟渡し九日ハ廿三日迄、夫ハ□ミ之所江砂持有之候、橋本舟多分為出、大江川先大□□之砂取役人ハ村役人江為引合候上、右之砂取らせ候由、

一、木下村響忍寺横手ハ西庄口へ出、大竹藪南手を通り、藪ハツレ西庄村瓦屋之横往来江出ル道、仮道二相成建札有之候、

一、右高水二付舟渡し仮道等之義京都江御届二相成、定而江戸表江も御届有之哉、

一、右舟渡し橋本村ハ為出候人足、都合三百人余之由、是者浦水主定役之村々江分合割を以夫々^{被仰付候}申付候事、人足壹人二米五合ツ、御上ハ被下候、過役二相成候ハ、壹升ツ、被下候、

一、右之通雨湿年二而七月、八月二至米壹俵直段六十匁、或ハ金壹兩位いたし候、但当年ハ四月ハ八月迄月々朔日壬癸統キ有之候年ハ大雨一時二降、大荒有之候歟、又ハ其月々中ハ降通し候歟、何レ水年之内也、既ニ文化四卯年正月ハ六月迄壬癸統キ有之、高水二而当年ハ三、四寸計も高ク候由、後之心得之為記し置、当年ハ一時二不降日々雨天勝二而、八月上旬も同様二而稲作甚不立、冷氣早々催し候、
天保七丙申年八月十三日

一、十一日ハ亦々雨降り十三日暮六ツ時頃ハ五ツ時頃迄大風二而往還並木等所々大分吹倒シ候、翌十四日ハ晴天、尤先達而湖水高水之処、其後矢張雨天統二而湖水干落兼候得共、漸々此頃迄二式尺計引候処、

又々右十三日夜ハ八、九寸計相増候事、

但夏以来暑氣薄ク、八月二入袷等着用いたし候程之冷氣勝二而、甚順氣不立候年柄也、

一、右之通次第二而諸国一統稀成違作、北国筋皆無之場所も有之候由、米直段秋ハ冬江懸ケ大体四斗俵二付八拾匁前後いたし、世上不穩、既ニ旧冬甲州辺者百姓共徒党いたし余程人数相集騒動いたし候由、

一、天保八酉年三、四月頃二而者、米直段壹俵二付上之向者九拾匁もいたし、四月中旬頃ハ少し相下り候事、六、七月頃四斗入百五匁程、京都二而ハ百廿匁もいたし候由也、

二月十九日朝ハ廿日夜四ツ時頃迄焼失、

一、同年二月十九日、大坂御町奉行手与力大塩平八郎并忰父子格之助其外一味之者共余程有之謀叛を起し、天満屋敷ハ出火二而大火二相成、其内二鴻池宅へ鉄砲打掛ケ大坂表之騒動不容易候、大塩父子其外共何方江参り候哉、以来不相知候由之処、廿二日夜京都御所司代并御町奉行ハ^{被仰付候}被仰達候者、大塩初其外共丹州奥山江建籠り候趣依之町御奉行楳野土佐守様山崎辺迄御出張有之^{○今之左右次第早々}加勢之人数差出し候様御達し有之二付、曾而壹番手之御人数半通リ被差出候間、其用意候様被仰出候、此方一番手二付早速用意いたし、然ル処、奥山へ籠り候義者風聞而已二而為差事も無之由二而、三月四日、五日頃最早不及用意段御達し有之趣二而被仰出候、其後四月大塩大坂町家二父子かくまい置候者有之段相聞へ候由二而、御手当有之候処、居宅へ火ヲ付相果候、早速御召捕二相成候得共、面体不相分候由也、右かくまい候者大坂ウツホ油かけ町三芳屋五郎兵衛之由也、三月廿七日朝御召捕二相成、

但廿日、廿一日頃大坂御城代江御見舞使者被遣候、足輕廿人計召連候御使者也、且^{○前文之通}弥御人数差出し之節者当地ハ京都路中之間ハ

火事羽織二陣笠着いたし、夫方甲冑着用勝手次第之段、京都御所
司代方御達之由、

一、御上知向地村々并地先新田共御旧領御戻し二相成候段、旧冬廿六日
江戸表二而被仰出候事、尤地先新田高之向者高替を以御差戻し相成
候義二付、太田村、川嶋村、海老江村三ヶ村二而高三百石余御上知
相成候、

〔天保八年〕

一、天保八酉年四月九日被仰出候、

麻御上下一卷

金千疋

羽太瀬大夫

別段金貳百疋

右御旧領御戻御願之儀二付御用向出精相勤候付被下置候、

一、右同日御家中一同江御肴御酒被下置候、尤御役人以上八御料理被下
候、郡方一同者懸り之義二付同様御料理被下置候、其外一同ハ御酒
御肴被下候、御料理之間二而何も麻上下着用二而頂戴之事、尤小頭
以上被下置候事、

酉六月十八日

一、御国絵図御用二付立歸出府被仰付候、

差紙二而御書付、羽太瀬大夫、右立歸出府被仰付候、支度次第罷下
可申候、六月

酉二月中

一、瓦ふき四畳半相建候事、大工東村治兵衛

但入用凡八両計相掛り候、

酉七月上旬

一、井戸両側へ石入叩土□こい入候事、

酉八月五日

一、此度御国絵図取調二付調方出来、依之、立歸出府被仰付、酉八月五
日出立、道中十一泊、十二日経十六日着府積り之処、横田川出水二
而石部宿二一夜逗留、十二日九十九日迄大井川支二付金谷二而滞留
いたし、都合道中廿一日経二而廿五日昼九ツ時過江戸表着いたし候、
尤内々二而江之嶋、鎌倉江相廻り候、

但杉浦義八茂同様出府被仰付同道罷下り候、是者兼而分間絵図相
心得候様被仰付申達しも有之、此度下絵図調方被仰付有之二付、
於江戸表も変地模様替り分調替候義も難計二付義八も出府被仰付
候事、

一、道中乗駕籠吉挺致持参道具為持候事、

但若党吉人、草り取鎗持兼帯吉人

一、御相調水口様加藤能登守様二而掛り役御代官植野瀬兵衛出府被申付
罷下り候事、尤当方者四、五日後出立有之、別々二下り候事、

一、公边御絵図掛り者御勘定所之者二付、御同所同心根立長兵衛与申
者其筋掛り之者故、当御屋敷、水口様御屋敷江長兵衛毎々水口様与
互二相招キ、御調之模様問合之上兼而元禄度之御写絵図兼而公義
御渡し有之、右之絵図江今度取調変地模様相替り候分掛紙二いたし、
御留守居石川陣左衛門、水口様御留守居上田満両人^{十月廿五日}○差出し二相
成候処、御勘定市野茂三郎殿御受取有之候、
酉十一月廿三日

一、右御絵図公边御調向不残相済候段御勘定所御沙汰有之候事、

但此度之御調者前条之通御下ヶ二相成候御写図へ変地之向掛紙い
たし御差出二相成候計二而、本紙御絵図御認メ者公義二而出来候
由也、

戌三月四日

一、右御絵図無滞相濟候付、左之通被下置候、

金三百疋

別段

羽太瀬大夫

同百五拾疋

右御国絵図取調、且致出府御用向格別骨折無滞相濟候付被下置候、

三月

酉年十二月廿九日

一、御絵図無滞相濟候付、水口様を金三百疋、別段式百疋被下置頂戴いたし候事、

酉十一月四日

一、右之通御絵図御調濟相濟二相成候処、尚又品中村新開場御願筋御用相濟候迄話候様、并御頭中を飯田清助殿を御達し有之候、但右御用向者先年御上知一件二付、神谷玉誠、西原武右衛門御用向相勤、御上知一条者相濟候得共、品中村之分未相濟不申、右兩人相掛り被居候、然ル処、武右衛門病氣二付依願帰国御暇被下、其代り交代相勤候様被仰付候義也、尤殿様御位階御昇進御内用も其砌相勤候、

同日

一、此度御朱印御改御掛り被仰付候二付、御手当之ため郷中間式拾人御差下しも候処、先日□着府いたし候、右之支配話中いたし候様御達し有之候、

但小頭者^(庄九)藤友八江被仰付候、

一、辻村田中忠兵衛出店常州江戸崎表店相続方六ヶ敷相成、主法之義願出候二付、為取調罷越候様御達し有之、御勝手方稲田新左衛門同道、酉十一月七日御屋敷出立、罷越、同月十五日引取候、取調之次第御勝手御元々初一同江申聞、都而相談いたし候処、何分大家之義難捨置、早速主法被仰付候、

一、西原武右衛門出立有之候付、酉十二月八日を神谷玉誠部屋江引移り相部屋いたし相勤候事、

〔天保九年〕

戊四月十五日

一、江戸表二而被仰付候御用向大体相濟候付、神谷玉誠、此方兩人共御用濟之段御届ケ申上、帰国御暇之義相願候処同十九日国元江之御暇被下置候、

但少々相残り候御用向之分ハ此度御朱印御改二付、付添罷下り候加藤三右衛門、榊原帯蔵へ引渡置候、

同日

金三百疋

羽太瀬大夫

右話中出精相勤候付被下置候、

但是者神谷玉誠御内用相勤被居候付、御本丸并西御丸□奥向江御内用都而掛合向申談、文通其外□相勤候付同人を申立有之被下候趣二相聞へ候、

一、右二付四月廿二日御屋敷出立、神谷玉誠同道、東海道罷登り、無滞

日積り通り帰着いたし候、閏四月三日着、

但し道中下り之節之通、若党吉人、鎗持吉人召連候、尤乗駕籠吉人挺持登り候事、

一、登り下り共御絵図諸帳面類自分荷物二いたし候様御達し有之候、尤軽尻壺足代之御用荷代御渡切、下り壺両三朱、錢三百七拾六文受取、登り壺両三朱、五百六拾六文受取候事、

酉八月晦日

一、殿様御儀、此度御朱印御改御用御掛り被為蒙仰候、戊六月御登り二可被成年二候得共、御朱印御改御用相濟候迄御封府被蒙仰、右二付

京都御番者永井様へ御助番被仰付候、

御老中

脇坂淡路守様

御寺社

井上河内守様

御奏者

此方様

同九月二日

一、將軍宣下御義式御当日之事、

一、殿様日光御名代被為蒙仰候付、九月七日御発駕事、同十四日夕御歸府、尤七日の十二日迄雨天統十三日の漸快晴二相成、道中筋誠二悪敷道之由也、

日光御名代御名前

松平下総守様 青山播磨守様
此方様 板倉内膳正様

一、西十月十九日曉七ツ時過の出火二而江戸吉原不残焼失之事、

西十二月十六日

一、殿様御義、四品被為蒙仰候御事、右二付御家中一同江二ノ御丸二而御酒、御肴被下置候、

戊三月十日

一、曉六ツ時前の出火二而西御丸内御殿向不残焼失之事、

同四月十七日昼

一、午ノ刻頃の江戸橋、日本橋之間マヤ小田原町の出火、南東風余程有之、同夜七ツ時頃迄焼失いたし、キジ橋前松平紀伊守様御屋敷迄焼拔候大火也、

戊五月廿五日

一、鈴木猪助跡之義、当時御憐愍を以猪助江四人扶持被下、御番相勤候

得共、睨与家名相立有之与申義二而も無之二付、御頭高橋保助殿江

段々相歎キ候処、格別親心切二取計被呉候、然ル処願書差出し候様御

内達有之二付、親類親之建願書御小姓頭、月番後藤太郎右衛門殿江

左之通同席更井并太左衛門を以差出し候処、御請留二相成候段御沙汰有之、但殿様者御在府也、

鈴木金也跡養子長次義不調法有之、先年永之御暇被下置奉恐入

候、猪助儀者御憐愍を以御扶持方被下置、冥加至極難有仕合奉存候、

然ル処、同人儀追々及老年候二付、何卒此上格別之御慈悲を以家

名御立被成下、如何様共被仰付被下置候様奉願候、此段御家老中

迄宜御執成被仰上可被下候様奉願存候、以上、

五月廿五日

羽太瀬大夫 印書判

後藤太郎右衛門殿

本多八大夫殿

重根矢柄殿

上包半紙半へラ

別紙白半切二而認差出ス、類例書 類例書

類例書

高橋重次郎儀、御憐愍を以是迄御扶持方被下置難有仕合奉存候、然ル処此度相果候二付、何卒此上格別之御慈悲を以相応之者貴重次郎養子二仕、家名御立被成下、如何様共被召仕被下候様奉願候、此段御家老中迄宜御執成被仰上可被下候様奉願存候、以上、

八月七日

高橋彦大夫

本多八大夫殿

寛政五丑年八月七日、願書差出、

同九月七日、御聞濟、

右之通願書差出し置候処、七月朔日御用所の呼二参り候二付罷出候

処、月番八太夫方親類金也跡願之義格別之御憐愍を以、相応之養子

見立申出候様被仰付候趣申達し有之、

一、御願見当国之御名前、木下内記様、石尾織部様、寛新太郎様

御休泊

戌四月八日水口御泊

九日 休 牧村 泊 多羅尾

十日 休 野路村 泊 里村

十一日 休 橋本村 泊 大津宿

十二日 休 上坂本村 泊 本堅田村

十三日 休 木戸村 泊 大溝

十四日 休 今津 泊 海津

十五日 再休 今津 泊 市場村

右之御休泊方北国江御越し、夫方菅浦、大浦辺江御越し有之候事、

但御料御願見御勘定所方別段二御料取計御願見有之候、

一、天保九戊戌年十二月廿一日、左之通被下置候、

金百五拾疋

羽太瀬大夫

右先年来村々起帰、新田場等入組之所取調方格別出精二付被下置候

但し右者仁保川、野洲、草津川、三川筋新開場所^{昨冬}春願人与兵衛召

連御勘定廣木重右衛門様并御普請役衆見分有之二付、川添村々之地

先新田地広之所取調方品々心配有之候、然ル処此方者昨年方昨秋方

当夏迄江戸詰中二候得共、先年方川々見分有之様之噂もいたし候付、

先年来余程取調いたし候付被下置候、尤昨冬御見分之義二付相掛り

候同役者三百疋、別段百疋ツ、被下置候、

一、同月廿三日、左之通被下置候

金五百疋

羽太瀬大夫

右品中村葭江之義二付御用向出精相勤候、此度御替地御戻二付、右

之通被下置候、

但右者江戸詰中神谷玉誠同様御替地御用向掛り候様被仰付候処、

御願之通浅井郡海老江村高六拾一石余、先年御上知相成候分不残

此度品中村葭江高式拾壹石余之為替地御戻し二相成候、神谷氏も

同様五百疋被下置候事、

〔天保一〇年〕

亥二月

一、鈴木金也跡養子相談相調候付、左之通願書二者二月九日御頭中内

見二入候処、存寄無之勝手二差出し候様申達二付、同十一日差出

又、但し同席更井太左衛門を以差出又、同十五日御聞濟之段被仰出

候、鈴木金也跡家名相続之義奉願候処、願之通被仰付難有仕合奉存候、

然ル処、親類之内相応之者茂無御座候付、奥田三蔵二男準之助与申者、

当亥式拾歳罷成候、此者多田李兵衛媒を以養子二貫、家名相続為仕

追而猪助妾腹之娘与一緒二仕度奉存候、何卒此上格別之御憐愍を以

如何様共被仰付被下置候様奉願候、此段御家老中迄宜御執成被仰上可

被下置候奉願存候、以上、

二月十一日

羽太瀬大夫 印 書判

重根矢柄殿

高橋條助殿

〔上部に斜書き〕「美濃紙認同紙上包、」

類例書

牧野家家名之義奉願候処、願之通被仰付難有仕合奉存候、然ル処私

二男捨吉与申者当未十三歳二罷成候、此者幼年之義二御座候得共重

縁二茂御座候付、媒井口為右衛門を以養子二差遣、家名相続為仕度

奉存候、何卒此上御憐愍を以此者へ如何様共被仰付被下置候様奉願候、

此段御家老中迄宜御執成被仰上可被下候、奉頼存候、已上、

月日

杉中藤藏

〔上部に斜書き〕「白半切認半紙半へら上包、類例書卜認、」

保田雄之丞殿

天保六未年二月

右二付亥二月廿一日朝養子引取、娘与孟為致候、

同日朝四ツ時迄二月番重根宅へ本人同道いたし出会之上引取届為相

濟候、

一、同月廿三日四ツ時御用所を呼二参り候付罷出候処、左之通御書付重

根氏を御渡し有之、口達二而勤方者御勘定所相勤候様被仰出候、尤

本人麻上下着用、只今同道罷出候様申達有之、直様引取同道罷出候処、

御勘定頭江引渡有之候、但御勘定所勤之義者前以重根宅二おゐて内

願いたし極難渋者二付格別之御憐愍を以御取成二預り度、得与歎願

いたし置候、

六石式人扶持

鈴木準之助

右二付御家老、御中老、御用人、大御目付夫々并御勘定人一統江廻

勤いたし候、尤同席伊与田広助相頼差図を請、同道二而廻勤之事、

且又亡金也親忌引之義、広助より頭江相伺候上、定式之忌服書付を

以相届、翌廿四日を相請候事、

二月廿三日

一、同日鈴木猪助義も左之通被仰付候、但猪助儀者御中小性勤之義二付、

御中小性頭加藤左太夫宅へ出、極難者之義二付何卒先年之通勤方被

仰付被下置候様、親類を内願いたし置候、

亥三月

一、左之通願書差出、極内二而九日出立伊勢参宮いたし候、同道鈴木伊

三郎也、五日泊り、六日経同月十四日夕引取、十五日相届候、

私義勢州桑名表二罷在候親類共江無抛直談仕度用事御座候付、明後
九日九宿之御暇奉願候、以上、

三月七日

羽太瀬大夫

重根矢柄殿

高橋條助殿

私義勢州桑名表二罷在候親類共江無抛直談仕度用事御座候付、明後

九日九宿之御暇奉願候通、神以偽無御座候、已上、

三月七日

羽太瀬大夫

重根——殿

高橋——殿

天保十亥年三月廿六日

一、御用池端川筋切石之走り皆出来二付、御家老中初夫々掛り一同御見

分之事、凡御入用拾式貫目余被下置候、

亥三月

一、京都之町人共如何之訳二候哉、亥三月中旬頃を只何となく色々之風

体二而おとり候事、尤装束者羅紗、猩々ひ、其外織物之類、且ハ黒

ひろふで、黒じゆす、ひちり緬、板を杯着用致、大勢幾立二茂いたし、

京中おとり廻り候由、初之程者御制度も無之候得共、四月上旬二至

御差留二相成候由、但昼夜共おとり候事、但大閣様時代二も同様之

義有之候由也、

亥四月十三日御触、左之通、

一、御家中隠居引退之面々剃髪、并惣髪二而名茂相改候者者、是迄之通

十徳着用可致、惣髪二而茂通名相名乗候向者、俗体同様礼服用可

致事、

亥四月中記之、

一、田端山王之御社、先年御改政之砌を中庄宮社内江引移有之候処、昨

戌年春御旧地江御引移二相成候、

七月廿五日前例御発足定日

一、聖護院宮様大峯人二付諸国之山伏数百人上京いたし、惣御供人数六千人余有之趣二候、此度者薩州之山伏ハ三千兩ト敷上金いたし、上京御供御断二相成候由、夫故人数も先年トハ余程減少之由也、尤伏見海道東福寺前二而多分御供落シ二相成、夫ノ宇治二而三、四日御逗留、是二而も御供落シ、夫ノ少御数二而大峯入之御供極候由、且又先例之通聖護院并大津三井寺江、御供馬都合拾貳疋御上ノ御借馬二相成、翌日引取二相成候由、

但七月廿五日朝五ツ過頃御殿御立、寺町御門ノ御参内、四時過丸太町御門御通り、丸太町通り寺町江御通り、夫ノ寺町通りヲ五条橋御通り也、尤朝七ツ時頃当地出立、直様御殿与川原与之間畑ケ之所江押而参り候処、畑中へ上敷いたし敷物代少し申請、拜見之場所拵へ有之候、是二而拜見いたし候、御参内後二相成候得ハ時刻も移り混雜二而、思わ敷拜見之場も無之候様子也、寺町通りハ手スリヲ拵へ有之二付、夫々伝テ無之候半而者、這入かたく様子二被存候、折悪敷廿五日早朝ノ御出立頃大雨二而大混雜二而有之候、傘も差なから下二而拜見いたし候、傘ハ其時之取計也、

〔天保一二年〕

天保十一子四月中旬

一、井戸屋形建替瓦葺二いたし候、工隣家益次

一、京都三月朔日ノ五十日清水観音、并高台寺中ノ初、大津三井寺三別所観音、石山三月十日ノ三十日日延都合五十日、大黒天、摂州中山観音、西ノ宮戎、何レ茂三月ノ開帳有之候事、

但米穀下直二而世上人氣相直り諸国ノ参宮等二而海道殊之外賑ひ

候、米直段廿四、五匁位、且風説子年之廻り年二者湖水春水高ク候由之処、既二当年春大分高水二而麦菜種等余程水下二相成、

子八月

一、金貳百疋

羽太瀬大夫

右西丸御普請二付、御上金調達方出精相勤候付、右之通被下置候、

一、子八月廿二日延栄出産、昼七ツ時前、

子十一月十九日

一、仙洞様御崩御、奉称光格天皇、御葬送、悴同道二而茂内々上京拜見

〔天保二年〕

天保十二丑年二月

文恭院様御事 閏正月晦日也

一、大御所様薨御、御停止五十日之間、当城下橋本せた三ヶ村両宿矢橋村自身番、尤家業之殺生八十五、六日二而御免、家業之鳴物者五十日目ノ御免、

同十二月

金貳百五拾疋

羽太瀬大夫

右郷中御講御用出精相勤、此度及満講候付、右之通被下置候、

但此御講ハ中年ノ御講掛り被仰付候而被下候、初年ノ相掛り候者ハ五百疋被下候、

同十二月

一、曾束、小田原、禪定寺三ヶ村山論、文化年中ノ相起り、京出訴いたし、地頭下ケ二相成有之候処、此度和談濟二付而ハ仲人高岡市郎左衛門、郡奉行森喜右衛門并此方同道毎々村方江罷越、堀杭打立候迄三村へ段々及利解候処、納得之場二至、杭打入迄差図いたし、直様喜右衛門同道兩人京都へ上り、御奉行和濟届等小堀様手代衆ノ打合等之上□向万端十二月十七日二相濟候付、左之通被下置候、尤此方

ハ先年の山論ニ相掛り居候、

金五百疋

羽太瀬大夫

右曾束村、小田原村、禪定寺村山論一件、数年来格別出精取喫、此度品能及事濟候付、右之通被下置候、

十二月

但森喜右衛門、高岡市郎左衛門も七百疋、御上下一具ツ、頂戴有之、

〔天保三年〕

同十三寅正月

一、江州湖水縁村々地先并仁保川、野洲川、草津川、知内川、安曇川、百瀬川、右川添村々地先付寄洲并川境内付寄洲堤外空地等新開可相成場所、為見分御勘定市野茂三郎殿、御普請役見習藤井鉄五郎、同代大坪本左衛門被登候、尤京町奉行所の前以村々不残呼出シ之上申渡し有之候、見分出立正月十一日の初仁保川筋野村始也、人数市野御普請殿兩人、且又京同心東西耆人ツ、大津石原手代兩人、信楽手代兩人、京中庄耆人、都合上下廿四、五人計、尤此度ハ村々番人を内々目付ニいたし、村々心得違等無之哉極内見廻り夫々注進いたし候様子也、

右仁保川筋無滞見分相濟、野洲川筋見分之廻文出、三上村ニ逗留中
天保十三寅十月十四日の暁の同日九ツ時頃迄ニ甲賀郡谷筋村々百姓共一揆致、石部宿ヲ通り三上村へ押寄、少々乱妨ニ及候処、十萬日之日延印付之書付貴、同日夕方一同引取相治り候事、

同十三寅正月晦日

一、鈴木猪助病死、隱居ながら御中小性頭支配ニ而御本丸番相勤候付、同席の口上ニ而御厚恩之御礼申上、死去之届いたし候、尤葬式も御中小性席之取計ニ而駕籠乗物ニ而鎗を持候、但道具箱を持候義ハ御

馬廻り以上ハ勿論、御小性ニ而も不苦候哉之事、法名專道専河原へ葬ル、

私ヒデヒ曾祖父猪助義今ヒデヒ暁死去仕候付、定式之忌服、左之通相請申候、此段御届申上候、以上、

正月晦日

鈴木準之助

忌 廿日 正月晦日の二月十九日迄

服 九十日 正月晦日の四月晦日迄

私ヒデヒ従弟鈴木猪助義今ヒデヒ暁死去仕候付、定式之忌服左之通り御届申上候、以上、

正月晦日

羽太瀬大夫

忌 三日 正月晦日の二月二日迄

服 七日 同日の二月六日迄

五月廿二日

右鈴木家五月迄ニ猪助、準之助并猪助之娘都合三人死去、尤元来難渋之所右之仕合ニ付、親類奥田新平同道支配頭沢普四郎宅へ参、必至難渋之趣相歎宜敷執成預り度段申込候処、同日同人の沙汰有之罷出候、然ルに格別之御憐愍を以御席御同抛の極内々ニ而被下置候趣、封シ込ニ而金五百疋被下候、尤他言一切不相成旨を以申達し有之候、且又廻勤二者不及由ニ付、沢氏計へ挨拶ニ参り、右金子相渡し候印御席へ差出候間、請取書差出し候様申聞ニ而、左之通、

覚

一、金五百疋

右者鈴木鉄太郎方当春の引続不幸有之、必至難渋ニ付御歎奉申上候処、御執成被下格別之御憐愍を以、被下候極内分ニ而被下置難有頂戴仕候、

同寅十一月、御在府中也、

一、甲賀谷村々百姓共騒立候節、早速石部宿へ罷越候二付、御意被仰出候、尤出役之者一統同様事、

一、同寅秋頃方郡方銀貸付方勘定帳等御吟味有之候処、惣有銀高之惣々二八年々相違者無之候得共、近年之御用多故少々書損、又ハ付落等有之、無念之義二而、同十二月十九日左之通本役一統同様被仰付候、但奉行も戸田氏計右役二付同様被仰付候、

廿五日御免被仰出候、廻勤

御家老、御月番頭中計

羽太瀬大夫

其方義郡方銀郷中へ貸付出入之節、其度々帳面江相起、且算当等埒明可申候処、等閑二差置候段相聞不行届之至二被思召候、依之、御叱被仰出候、以来急度相心得可申候、

十二月

但見習衆も相同有之候由候処、不及其義候由之事、

右二付差扣之分相伺候処、伺之通被仰付候、中嶋郡次義従弟二付相伺候処、御用外慎被仰付候、

寅十二月

一、甲賀郡村々騒立候付、為御吟味評定所御当役兩人十二月中頃大津表へ着有之、同所二而御糺有之候、尤兼而江戸表方御達し有之候、右糺方二付又々百姓共騒立候節ハ、兩人方懸合次第人数差出し候様被仰出も有之、旁御使者田河藤五郎相勤候処、人数差出し方之談有之候事、

一、寅十二月諸色直下ケ御制度有之候得共、兎角相下り不申候、米ハ当冬廿七匁前後、大豆三拾匁計、餅廿六匁位直段也、

一、寅秋頃方西国沖ニイギリス之大舟相見へ候由専風聞有之候、尤イギリス之者共追々増長いたし、異国ヲ追々戦取候由之風聞も専有之候、然ル処、十二月上旬頃岸野和田沖二大舟相見へ候由二而、淀様方も

岸野和田浜辺へ御人数出張有之候由二相聞へ候、右者定而御城代方歟御差函有之義与被存候、実説不分候、

寅十二月廿五日

〔天保一四年〕

一、金貳百疋

羽太瀬大夫

右起歸田并新田畑取調格別出精相勤候付被下置候、

卯六月九日

羽太武次郎 十四才

右猶五郎様御相手罷出候様被仰付候、

但御相手青木貞二郎、金子格之助、戸田弁之助三人之内青木、金子兩人表御番二被仰付候跡へ、堀池惣次郎十一才武次郎兩人江被仰付候、

右之節、猶五郎様御附頭取高橋條助殿方親呼ニ参り候付罷出候処、御書付被相渡、尚本人之義ハ麻上下着用明日五ツ半時方奥役所迄召連罷出候様、初而御目見申上二相成候事候旨申達し有之候、

親廻礼 □ □ 同日

御用番村松猪右衛門殿、高橋條助

同日

武次郎廻勤

一、村松

一、高橋

一、戸田弁三郎

一、村田勇次郎、齋藤大三郎、久保郡左衛門、田先光之丞、重根

謙造

奥役

奥村小左衛門、寺西五大夫、飯嶋謙吉、同助三宅又市、村田喜

兵衛

但奥役衆并御相手之向へハ親も廻礼頼二可参事、

右同日昼後方袴二而御相手二罷出、二日計見習二日勤之事、尤御頭

当番江二ノ御丸二而案内相頼置可申事、若当日番引有之候ハ、翌

日之当番へ案内之事、

天保十四癸卯年四月

一、公方様日光御参詣二付、殿様御儀外山家慶公台御固メ御勤番被為

蒙仰候、御発駕左二記ス、

殿様御発駕 四月十日

公方様御発輿 四月十三日

同還御 同廿一日

殿様 同廿二日夕御帰府

右御勤番中天气も宜敷、凡而御取扱御手厚二付、不自由且難義等之

義一切無之由、郷帯刀人并郷中間等一同相歡、珍敷所拜見いたし難

有段申聞居候事、

同十月中御上知之義者御沙汰止二相成候事、

一、此度為御取締江戸、大坂御城最寄一巴御料所二被仰出、夫々御上知

二相成、此方様河州御領分廿八ヶ村、市村新田共二而廿九ヶ村御上

知二相成、天保十四卯閏九月十日頃大坂御代官築山茂左衛門殿、竹

垣三右衛門殿江御引渡二相成可申之処、俄二御止二相成、是迄之通

被仰出候事、

天保十四癸卯十月廿日

金貳百足

羽太瀬大夫

右御上知一件二付河州表江茂罷越、御用向格別出情相勤候付被下置候、

十月廿日

卯十一月廿九日

一、京都東御役所伊奈遠江守様御呼出し候二付一同罷出候処、両御奉
行御立会之上御口達二而被仰渡候通之請書左之通、

戸田半大夫名前不揃略之、太田彦五郎義江州村々新開場御見分有之

候を百姓共難渋二存、右御見分御猶予願可致ト徒党を結、三上村御

勘定方御旅宿へ押寄、村々之宿共騒立候節、武右衛門、瀬大夫ハ為

取鎮、主人領分石部宿へ致出役、其砌新兵衛も外用向二而同宿二致

止宿居候ハ、中村式右衛門供々割をも可致所手余り候迎、其俣差置

瀬右衛門其外之宿共者、右場所出張以前徒党之者共三上村へ押寄

候付、武右衛門外三人一同為割同村へ可相越与菩提寺村地内迄相越

候砌、願之趣御聞濟相成候由を以、徒党之者共石部宿之方江散乱い

たし候を見請、^高当引返シ手配いたし候内、一時二宿内江立入候ハ、

嚴重二可取計所利解而已申聞、殊二御勘定方等御渡有之候御見分

御猶予之書付者徒党之者共、扱而申請候義ト乍存、針村文五郎外

人方問屋場へ差出、写之義相願候由を以、同宿茂兵衛方取計方相伺

候節^節半大夫ハ御金荷物継立方等之差障二可相成哉ト人氣取鎮之為一

村吉人ツ、相残、右書付写遣し候方可然旨遮而申聞候二瀬右衛門其

外之者共相泥ミ宿役人共二写為致、村々之者共江相渡させ候段、一

体手弱成いたし方半大夫者別而之義、右始末一同不埒二付半大夫者

役儀御取放し之上、瀬左衛門外拾三人一同押込被仰付候、

右被仰渡之趣一同奉承知候、依而御請書如件、

本多家来

郡奉行

十一月廿九日

戸田半太夫印

用人

市元瀬左衛門印

者頭

山田善太夫印

馬廻り目付

山口藏助印

山奉行

富増新兵衛印

地方役

西原民右衛門印

羽太瀨大夫印

沢田啓助印

徒士目付

林貫一印

岸野品藏印

郡方手代

杉浦八十次印

下目付

杉山鉄次郎印

杉浦鉄太郎印

足輕小頭

川村佐助印

右田彦五郎印

御評定所

此一件始末別紙ニ手扣有之、尤水口様衆遠藤様衆信樂手代等も一同同様押込被仰付候事、

右二付廿九日京都方引取、同夜方慎ミ罷在候、尤慎中髪、月代者勿論髭迄も剃候儀不相成候趣之事、

右二付武次郎義者隣家方通路いたし、御用外慎之義御上方被仰出候事、

卯十二月

金三百疋

羽太武次郎

右猶五郎様御相手罷出候間被下置候、

右之外猶五郎様方金貳朱ト銀一兩

此銀一兩ハ御瘡瘡中日々罷出候付被下置候、

但^{盆前}年ハ被仰付候而方暫之義二付、貳朱被下置候、

〔天保一五年・弘化元年〕

辰年三月廿四日

羽太瀨大夫

其方義御役前ニ於て心得違之義有之趣相聞不埒之事ニ候、依之、御役前 御免急度御叱被仰出候、伺之上差扣七日目ニ御免、

三月 廿四日也

但地方ハ不殘同文言ニ而同様之内、西原、此方兩人ハ御役御免之事此故八年数古キ故之義ト被察候、別ニ相替り候訳無之ト存候、内意御咎之訳者少々、音信物申請候義ヲ武村調出し、徒目付方内当り有之候事も有之候故、定而是等之訳ト恐察いたし候、

同四月朔日

一、右二付差扣御免之節、勤方之義ニノ丸ニ而相伺候處、御広間御番相勤候様、尤諸勤等相勤候廉ニ而者無之御番計、[■]乍併御番二付候当番翌日之御供者相勤候様御達候事、

一、右二付御番頭中^方四番組江組入之義御達し有之候、

同四月四日

一、曾束、小田原、禪定寺三ヶ村山論濟口一条二付而之御用向者、是迄通相勤候様御頭中^方口達之事、

弘化元年 天保拾五甲辰年

八月三日

森喜右衛門相願、左之通

ヨシチカ
義比花押宜字

羽太武次郎

字曰無莫

〔花押〕

同辰十二月廿一日認ル、

一、先年向地村者御上知二相成候処、江戸表二而段々御歎願二よつて御戻相成候一件帳、其儘二相成有之二付、早々相片付候様当夏掛り西原民右衛門江御達有之候処、此方ニも取調二相掛り候様御頭中^方御達し有之、下帳大体出来二付御内証^方左之通武右衛門へ御渡し二而、此方へ被下置候、依之、受取書同人江相渡し御中老衆へ差出し二相成候、武右衛門義八元^方掛り之義二付、此度別段二不被下候、

金貳百疋

右者御内用一件帳取調御用相勤候付、御内々被下置難有仕合奉存頂戴仕候、以上、

辰十二月廿一日

羽太瀨大夫印

但し白半切認、半紙半へら上包

上包認方 請取書 羽太瀨大夫

〔弘化二年〕

一、弘化二巳年七月晦日御頭中^方左之通申来ル、

切封二而

羽太瀨大夫殿 後藤太郎右衛門

其許御用之義有之候間、明朝日四ツ時平服二而二丸江御出可有之候、尤悴在宿為致可被申候、以上、

七月晦日

但尾州様御停止中二付、御礼流二成候付、平服二而免、

右二付而直様御請之返事、切封二而左之通相渡ス、

御剪纸拜見仕候、然者御用之義御座候間、明朝日四ツ時平服二而二御丸江罷出候様、尤悴義在宿為致可申旨被仰下候趣奉畏候、右之段御請申上候、以上、

七月晦日

一、右二付尚又御頭宅江御請二罷出候、尤申置候事、

一、夫々江案内風聴いたし候事、

一、朔日四ツ時罷出、御用所へ案内いたし扣居候処、罷出候様沙汰有之出候処左之通御書付御用所前二而御頭中^方御渡有之、難有段御礼申上候処、悴義前髪之俣麻上下着用二而、只今同道罷出候様御達し二付直様引取、麻上下二而罷出候処、御用所前二而御小性頭、御中小性頭列座之上、今日武次郎ケ様二被仰付候、以来御支配之義二付御引渡申候旨、御中小性頭江^方挨拶有之、依之親并本人^方も結構二被仰付、難有段御礼申上、尚以来御支配二付委細相頼候、夫^方御用所入口^方少々這入、御一統江御礼申上候、夫^方御頭同道御席江出、御礼可申上候之処、御引渡二相成候付、尚明日四ツ時麻上下二而前髪取本人計罷出候様御達し二付、夫^方夫々江案内いたし候、

御書付

米九俵

羽太武次郎

右之通被下置、御中小性組被召出候、

八月

一、右之通御書付二付、勤方之義相伺候処、猶五郎様御相手御免、御中小性勤之旨御口達有之、

一、御中小性番所江案内いたし、万端相尋候処、ケ様之節二者引廻し口有之、其者方へ参り委細相尋頼、差図を請候様与之義二付、引廻し口此度ハ上村善五太夫二付、罷出相頼候承知二而、直様同道二而都而廻動いたし候旨申聞有之、尤初而之者二付同道廻勤之由二付、

悴義ハ御奥ニ而御目見も相濟有之、是迄相勤居候得共、同道入可申哉相尋候処、尚相談之上取計候旨申聞有之候処、矢張老入廻勤之方ニ相成候付、大御目付以上廻勤、御頭中ハ宅ニ而面会之上、礼并以來之義相頼候事、尤御中小姓之内当日出会之上相頼候分并漸々ニ外勤之向、漸々ニ参り申置等ニ而相頼候分、夫々名前書上村方いたし被呉候、

一、親者大目付以上廻礼之事、付リ、御中小性、筆頭月番并肝煎江頼参り候、

一、二日初番ニ成候付、早朝前髪取、麻上下ニ而朝五ツ時前ハ麻上下ハ風呂敷包ニいたし持参、善五太夫方へ本人参り候処、同道ニ而番所江参り、得与様子本人江申含メ候上、善五太夫被帰候、且扱四ツ時ニ相成候へハ麻上下着用、相番へ頼置、御用所へ罷出案内いたし扣居候処、無程頭中同道御席へ出、御家老中江之御礼無滞相濟、夫亦袴ニ而御番相勤、九ツ時頃交代ニ付引取、且又初番当日之朝夕共御番人本人之外三人并引廻し老入、都合四人同日夕御番引次第宅ニ而一献差出し候、尤夕方参られ候様申通し之義ハ引廻し人方夫々江申伝へ有之候、且又翌朝右四人之衆江挨拶ニ参り候様与之義ニ付、翌早朝参り候、

一、当分不案内之義ニ付諸勤暫断之義、引廻し人方も漸々ニ諸勤之向江挨拶いたし置可申候得共、尚本人方も序々ニ諸勤之向江断置候方可然由、

一、泊番等有之節者重詰ニいたし、弁当之振ニ而御番所ニ而差出し候由之所、当時宿番無之ゆへ、宅ニ而差出し候由、尤鹿末之三種之肴飯之菜ニしたし、鳥度煮^渡しめ様之品有之候方、酒のまさる者之為ニよる敷趣ニ付、左之通之品差出し候、但肴類一向払底之節也、

三ツ鉢 たこ、板なし、うなぎ 吸物 板豆腐、松竹

御身鯉

但し御身止メ小鯛敷、ふりごか相当之品有之候ハ、そふめむニ而も入、沢山ニ大鉢ニ而差出し候積り之所、一向何も無之故、無扱[■]年鯉位を相用ひ候、酒中半ニ小付飯之振合ニ、小キあじのやき物、するめ、小さいも、ふき豆腐一鉢、さゝぎしたし一鉢、めしの菜として差出し候、

右者は迄承り合セ候処、酒肴数者同様ニ候得共、品物ハいろく有之様子也、尤蜆汁ニ大こん、棒たら様之品ニ而相濟候向も有之候趣ニ候得共、是者後ニ而彼是悪口有之由ニ候ニ付見計、右之通取計候、尤引廻し人方も心添も有之候事、

一、弘化二乙巳年八月三日、左之通被下置候、

金三百疋 羽太瀬大夫

右御上知一件帳面取調、且認等出精ニ付、右之通被下置候

八月 但西原武右衛門江も同様被下候

〔弘化三年〕

弘化三丙午二月廿六日

一、武次郎御中小性組諸勤相勤候段御届申上候事、

弘化三丙午三月廿一日

右奥役被仰付候 羽太瀬大夫

後康繼公 猶五郎様、豊七郎様御用向兼相勤可申候、

三月

高嶋米式俵 同人

右之通為御役料被下置候、

三月

同午四月廿六日

一、右役前之誓詞被仰付候、
午五月四日頃

一、銀貳匁 羽太瀨大夫

右豊七郎様御幟、当年御建上ケ二付、為御祝被下置候、

午五月九日

一、金貳朱 羽太瀨大夫

右此度御誕生御用向相勤候付被下置候、お琴様也、尤御誕生掛り二

而無之候得共、半通り被下候、

午五月八日

一、羽太瀨大夫

右此度猶五郎様御別宅二付、御附被仰付候、

同日

高嶋米三俵 右同人

右之通為御役料被下置候、

但し御別宅迄ハ是迄之通相勤、御別宅御入用物取調候、

同日

一、羽太武次郎

右栄造様御相手助被仰付候、

但平服ニ而当日支配頭カ呼二参り候、

一、五月廿八日吉辰二付、猶五郎様御別殿江御移徙被遊候事、

銀壹兩 羽太瀨大夫

右是迄奥役無滞相勤候付被下置候、

五月廿八日

閏五月十一日

一、御附被仰付候、御礼被為請候事、

閏月十四日

一、武次郎、栄造様御相手御免、
同六月廿七日

一、猶五郎様御附之誓詞被仰付候、
同六月朔日

同六月朔日

一、栄造様御相手助被仰付候、武次郎

〔弘化四年〕

弘化四丁未年四月廿四日

一、殿様御儀、此度御隠居被為遊候而、若殿様へ御家督無御滞御讓被遊候二付、御祝為御家中下々迄一統金子被下置候、但御隠居様カ被下候事也、尤先年拜借金有之向ハ、残金不残被下候、拜借無之分如此被下候、

金子三兩ツ、羽太瀨大夫

同武次郎

一、御中小性以上三兩ツ、御鎗奉行以上五兩ツ、御徒士以下貳兩ツ、御持組カ下者又少スケナ候、

一、殿様御隠居二付、上下共三拾人余御召ニ而夫々御取扱有之候、

一、御隠居御祝二付、一同御役人以下へ赤飯、御煮メ御肴被下候、

一、若殿様御家督無御相違被為蒙仰候付、御酒、御肴被下置候、

同未七月朔日 羽太瀨大夫

右奥役歸役被仰付候、

豊七郎様映松院様御用向兼相勤可申候、

七月

右二付

一、高嶋米貳俵為御役料被下置候、

同七月二日

一、猶五郎様御附無人二付、助役相勤候様御頭中_方被申渡候、同四日右
助御免之段被申渡候、

未十月廿九日

一、奥役帰役之御礼被為請候事、

〔弘化五年・嘉永元年〕

嘉永元年
弘化五年正月十一日

一、隱岐守様御初入、御在城之砌也、羽太瀬大夫

右御馬廻組被仰付候、勤方は迄之通相心得可申候、

正月

一、右二付御番頭_方席之書付被相渡候

三番組

同人

右席 黒田五平次 次

鈴木六郎 上

惣列二而 堀池貞蔵 次

林 勝助 上

右之通被仰付候

弘化五申年正月十五日

一、当年具足初而差出し候処、左之通被下置候、

金五百足 羽太瀬大夫

右当年具足初而差出候付、為御褒美被下置候、

正月

同年

一、正月十一日、殿様御福引御鬮、例之通被下候処、第壹番二而

○御召下_シ横麻
○長御上下頂戴仕候事、

嘉永元申年五月四日

一、羽太瀬大夫

右神戸様御用向有之、河州表へ罷越相勤候様、尤御用向之義ハ御勝手方へ承り合セ可申、且又奥役者右御用相濟候上、是迄通相心得候様、御番頭、月番_方御口達有之候事、但し御用番等へ廻勤二ハ不及候由也、夫々江案内いたし候計、依之御用向御勝手方へ承り候、萩原錦平相詰居候二付為交代罷越、先ツ半季詰之心得二而罷越候様申談有之、

〔嘉永二年〕

一、右河内詰酉年四月三日為交代御勝手方吟味役浜八左衛門出河二付御用向送り、六日出立帰膳致候、尤已後者御吟味役一同ト当方ト交代二而相勤候様被仰出候事、

申七月

一、金三百足ツ、西原民右衛門

羽太瀬大夫

右此度郷中御講満講之処、格別之御益茂有之候付被下置候、

嘉永二酉四月十九日

一、当秋 羽太瀬大夫

スミ 寿明君様関東御下向二付、御修復奉行被仰付候、

四月

外一式掛り御用人箕浦猪佐衛門、御取_ル阿閉助右衛門御修復奉行表馬廻り荒川花蔵、御勝手方中嶋郡次、御徒目付御中小性奥村六助

御通輿九月十五日草津宿御泊り、無御滞相濟、快晴也

一、右一件諸勘定并諸帳面絵図等取調、皆出来二付、十一月廿五日御席へ差上、廿七日皆御用濟候段御届申上候、月番、御番頭江も相届候、三日之間休足引いたし候、

同二酉十一月

金貳朱

羽太瀬大夫

右於松様御髮置御祝義被成御整候付被下置候、

但外御用掛中二候得共、御殿二而御祝酒被下候事、

十一月十五日

羽太瀬大夫

右来戌年御年男被仰付候、

酉十一月朔日

羽太瀬大夫

同酉十二月十七日平服召二而

右先達而寿明君御下向之節、御役方行届候段、此度從公辺御賞美有之趣全諸事心を入格別出精相勤候故之義与御満足被思召候、依之、御意被仰出候、

但御賞美有之二付、御酒御肴被下候段、御頭中^右御達し有之、同銀ハ追而被下候、尤後取調中二兩度御酒被下、膳所二而頂戴いたし候、

麻御上下一具

羽太瀬大夫

金三百足

右此度寿明君様御下向之節御用向出精相勤候付、右之通被下置候、

酉十二月十七日

〔嘉永三年〕

嘉永三戌正月十三日

金百足

羽太瀬大夫

右豊七郎様於松様御用向御免、是迄無滞相勤候付、右之通被下置候、但奥役一方之勤二相成候事、

同戌正月十三日

一、神戸様御用向二而河内詰交代之義御免被仰出候旨、御番頭、月番三様^右御達有之、

一、奥役之御役料米貳俵之所、神戸様御用河州詰中者不被下候趣、且河州詰交代いたし、酉年四月上旬引取候処、直様寿明君御下向二付、御用掛被仰付、是又河州詰同様不被下候由之所、酉盆前壹俵、暮二壹俵被下候得共、何之心付も不致、勿論不被下与申訳合も一切存不申候故、難有頂戴いたし候、然ル処酉暮二至、御用掛り荒川花蔵御藏奉行勤中二御用懸被仰付、右二付四人之御役料不被下候由、依之支配頭へ相願被申候得共不被下候由故、此方之御役料被下候有無聞合有之二付、被下候段申入候処、御調二相成候由二而、御勘定所之間違故役料米出候趣、依之御勘定奉行并吟味役帳本伺之上差扣被仰付候、此方者支配頭^右呼二参り候付罷出候処、右之通之訳合候間、御勘定所へ対談之上、上納候様御達し有之二付対談いたし候所、外二子細ハ無之、上納致候様御達し有之候ハ、受取候様与之御達有之由二而可然対談付不申候故、尚又支配頭へ罷出、御勘定ハ右之通之次第二付当惑仕候、何分難渋者之義御憐愍を以被下置候様仕度、右相成不申候ハ、十年賦上納二被仰付候様歎願申上候処、何レ来年之事御勘定所之処ハ右之通支配頭へ申立置候間、御沙汰有之候迄、上納不致候趣申入置候様与之御差^右二付其段申入置候、然ル処翌年戌正月二左之通御沙汰二而被下置候、

酉年盆前之壹俵者被下置候、

同年盆後之壹俵者上納いたし候様被仰付候、

内同年十一月^右御用濟二付出番いたし候付十一、十二^右式ヶ月分

此代三拾七^右分七厘、昨酉暮立直段之由、御勘定所^右申来候付、掛屋切手二而御勘定所へ戌正月上納いたし候、

右之通上納いたし候処、酉十一月御用掛ニ而出勤いたし候付、
十一、十二、三ヶ月分正米壹斗三升余り被下候事、

嘉永三庚戌年九月

覚

一、畑貳畝拾五分之由ニ而、膳所村七左衛門方かり請候、元花屋所持之内之由、但正地帳ハ貳セ步少シ余なら而ハ無之候、戌九月大根地方かり請候処、其年之暮二年貢米斗三升五合之趣ニ而、十二月廿五日七左衛門取ニ参り候付相渡ス、尤来年夏大豆、小豆等取候迄之一年者年貢米也、毎年右之通米数ニ而前へ年貢渡しニ相成候付、差戻し候節ハ夏小豆取候上返し可申年貢米ニハ不及候、右之通七左衛門江義定いたし置候、柿木一本有之、是ハ七左衛門之差配之義定也、夫故二年貢米斗三升五合ニ候事、

但管井所持之処七左衛門申請、直ニ此方へかり受候、付り右之畑ニ柿木一本有之隔年ニ金壹步計之柿出来候由ニ付、木共ニ借候へハ壹斗七升年貢懸り可申、又不残売得之上所持いたし候へハ、壹斗九升年貢之由也、管井方七左衛門へ申請候ハ、当年之年貢壹斗九升七左衛門方ニ而いたし候約束之上、同人江申請候由、但米直段壹俵代六拾匁計之直之年也、

〔嘉永四年〕

嘉永四辛亥年

一、羽太瀬大夫

右立歸出府被仰付候、女中附添罷下可申候、

三月

一、右出府六月十八日出立、下役堀池市大夫被仰付候、道中無滞日程通り八月二日着府いたし候、

金貳百疋

羽太瀬大夫

右女中附添罷下候付被下置候、七月江戸表ニ而被下候、

一、右帰国之節立歸之老女代、三ノ丸様方御雇高崎并鳥居川村方左衛門姉部屋方中、外ニ尼吉人、尾州宮宿迄右連登り候様、江戸表ニ而被仰付候、

金壹兩

羽太瀬大夫

右此度中奥女中御差登之節、壹人ニ而附添罷登候付、為御手当被下置候、外ニ若党半人代貳步受取登り候、

一、右七月十九日江戸表出立、日積り通り十三日経り八月朔日歸着いたし申候事、

亥八月廿三日

一、金百五拾疋

羽太瀬大夫

右此度老女代高崎道中附添罷登候付被下置候、
同亥十二月廿三日

〔嘉永五年〕

一、米拾五俵

羽太瀬

右之通御直被下置候、

但し被召出、米九俵被下候年々七ヶ年目ニ而、当年御直被下候、尤江戸御供口之所、栄蔵様御相手相勤居候付、江戸口後レニ相成、当年御取扱ニ成、江戸表へ不参御直し之例、西川紋太郎之例之由、且又此度方ハ親身分ニハ拘り不申、諸御礼之節ハ親方も御礼申上候事、
嘉永五壬子年七月三日 羽太瀬大夫
右地方歸役被仰付候、

七月

三人扶持

同人

右之通為御役料被下置候、

七月

羽太瀬大夫

九月

右郷中御講御用掛被仰付候、

但廻礼ハ御勝手御役所へ罷出、案内相頼候、尤書役へも同様、御元々其席二居合無之二付宅へ参り候、支配頭ハ幸自分頭月番二付、

二ノ丸ニ而相濟候、其外御用番初廻礼なし、是迄之振合之由、

同子十二月廿一日御用納之節、平服前日召二而左之通、

麻上下一卷 羽太瀬大夫

金千疋

右近来初而具足差出候上、猶又当春悴儀同様具足差出候段、心掛宜一段之儀ニ被思召候、依之、為御賞美右之通被下置候、

十二月

但二ノ丸ニ而大御目付へ案内、廻礼御用番、両番頭計、

〔嘉永六年〕

嘉永六癸丑年四月

羽太瀬大夫

風呂敷式ツ、遊行上人ノ武運長久御守被下候事、

右遊行上人当秋勝部村最明寺江御移二付、御用懸被仰付候、

右御用相濟候上、御意被仰出候事、

同丑六月

同巖

右江戸立婦御供被仰付、六月廿一日出立罷下り候處、異国船品川沖へ渡來いたし、書翰差出御請取ニ相成候、船ハ兵船之様子ニ付、俄二浜手夫々固メ、御大名江御手当被仰付、大混雜之處、六月十一、二日頃異船不殘四艘共出船いたし候得共、右様子之折柄故御供之向

一同暫居殘被仰付、八月六日一同御暇被下、同八日江戸表出立、江嶋鎌倉廻しいたし、道中安部川一日半川支二付、同月廿一日夕無滞引取、但し異国船ニ而混雜之様子ニ付、下り之節御中小性以上鎧為持候様被仰出候、御中間代り金三步被下越前屋手雇者人召連候、引取二者御中間ニ鑑持セ引取、

同丑年十一月

一、支配頭中ノ廻文、左之通、

当朔日御登城御礼後御居殘、左之御書付御老中様方御列座、阿部伊勢守様御席上ニ而御方様江御広達之写左之通、

亜墨利加合衆國ノ差出候書翰之義ニ付、夫々致建義候趣意、遂一熟覽集儀参考之上達御聽候處、諸説異同者有之候得共、詰り和戦之二字ニ帰宿いたし候、然ル処面々被致建義候通、当時近海を初防禦筋未御全備ニ不相成候付、準申立置候書翰之通、弥来年致渡來候共御聽届之有無者不申聞、可成丈此方ノ者平穩ニ為取計可申候得共、彼ノ及乱妨ニ候義有之間敷共難申、其時ニ至不覚悟有之候而者、御國辱ニ茂相成候義ニ付、防禦筋実用之御備種々心掛、面々忠憤を忍び義勇を蓄へ彼之動静を致熟察、万一彼ノ兵端を相開候ハ、一同奮発毫髮茂御國躰を不汚様、上下挙而心力を尽し忠勤可相励上意ニ候、

同丑十一月

一、殿様ノ御直筆写

当夏以来異国船渡來ニ付而ハ、於公邊も防禦ニ御武備嚴重ニ被仰出候ニ付而ハ、莫太之御物入有之事ニ付、際立候御儉約五ヶ年之間被仰出候、是全公邊而已之義ニ而者無之、諸家共格別之節儉を尽、武備ニ心を用候様との御趣意ニ候、然ル処我等家之義相統無際物入之上、当年者早損ニ而収納祖宗以来未曾有之不納者一同承知之事ニも可有之候、平和常用すら近年手支候ニ、兵費相加り候而ハ、誠以

不容易義与深令心痛候、右二付而者兼々申達置候規定通り、借増米可申付筈二候得共、近来一同困窮之趣、且者当年柄之義二候得者、格別之沙汰を以両表共令捨候間、昨年も申達候通、弥以儉約之筋堅相守、縦令少分之事たり共無用之失費致省略、深武備二心を入候様可致候、勝手向者勿論諸役申付候者共、我等心中深推量り、志を一致いたし聊も過失無之様心懸、公務且軍用二差支無之様二と心を相用可申候、

十一月

御名

一、同年十一月

御直達之覚

兵者凶器也、戦者危道なりと申候得者、実以国家之興廢一挙に定り候、一大事之儀二候得者、一同其心得者可有之候得共、猶更容易之事二不存、我等為方二相成候様心を用可申候、銘々武器手当之義者兼々申付置候事二而如才者有之間敷候得共、困窮之者共平常之用途二も差支不行届哉二も相聞候付、相応之手当茂いたし遣し度候得共、何分昨年来過分之物入相続、其上当年早損二而格外不調之上、窮民夫食手当米多分差遣候程之義二付、心二不任候得共、乍少分手当与して別紙之通、夫々江差遣候之旨、浮華形容之事二少も心を不留対場实用之工夫専一二相心得可申候、

十一月

金七両 御家老中右御小性席迄

同三両 御馬廻り御小性 部屋住

同貳両貳分 御中小性部屋住 同五両 御中小性之向

同貳両 部屋住御徒士 同四両 御徒士御勘定人

同三両 古組右諸小頭迄

ノ

〔嘉永七年・安政元年〕

安政元ト改

一、嘉永七甲寅年正月十三日、左之通被仰付候、

新知六拾石 羽太瀬大夫

右之通被下置候

正月

右隠岐守様御時代御在府年也、

羽太巖

同年四月五日

右豊七郎様御小姓被仰付候、

但し平服二而当日召二而書付を以被仰付候、

一、同寅年四月十五日、左之通相願候、但半切紙認、但穂積之例也、

私義此度不存寄新知被下置、冥加至極難有仕合奉存候、然ル処御扶持方上り取続、飯米二手支申候付、何卒此上格別之御憐愍を以、当

暮知行惣渡り之内、地米八俵此節御繰上拜借被仰付被下置候様仕度、

此段奉願候、以上、

四月十五日 羽太瀬大夫

堀江六郎左衛門殿

右之通相願候処、同日御聞濟二付良座二而御礼申上候、御勝手方へ

案内いたし候、廻礼御月番、両番頭へ参り候、

右米八俵当暮一時二上納難渋二付、十月二至左之通相願候、半切認、

私義当春不存寄新知被下置候処、御扶持方上り取続飯米等手支申候

付、当暮知行惣渡之内地米八俵御繰上被下置候様奉願候処、願之通

被仰付難有仕合奉存候、右二付当暮皆上納可仕候処、下地困窮者之

義万端手支、彼是当惑難渋仕候、依之何卒此上格別之御憐愍を以、

右上納方之義如何様共被仰付被下置候様、此段奉願候、以上、

十月朔日

羽太瀬大夫

堀江——殿

右之通願候処三日ニ御聞濟、次ニ記ス、

巳□□午也

一、嘉永七甲寅年四月六日昼九ツ時、当時大宮様ハ無御座候得共、時之宮様ト申而、禁裏様之御姉様被入候由、大宮様御殿方出火之由ニ而上ノ御所内之御門江移り、夫方禁裏不殘炎焼、夫方今出川様、日野様、勸修寺様御殿焼失、夫方西手町家へ移り、東風少々有之、段々西へ火移、凡北ハ今出川通り切、南ハ丸太町通り切、西へ焼拔ケ、火之通りハ所々ニ而違有之、何通り切ト申事ニハ無之候得共、所ニ寄候哉今少ニ而御所司代屋敷近辺迄焼失、右之節ハ天氣統ニも有之、何之間も無之暫時ニ火移り、御所方ハ勿論驅逃出候計ニ而丸焼相成候由、禁裏様ハ下加茂江上ケ輿ニ而御立退、夫方御車ニ而正護院宮江御立退之事、

殿様御在府年也、四月六日昼八ツ時頃当地へ注進到来、一、二番手、三番手、四番手迄押出し、何レも京着ニ而消火ニ取掛り候、当表方握りめし并白米拾石余兩度ニ差登シニ相成、何レも郷人足ニ而式斗ツ、さし荷ひ、にきりめしハ皮包ニ而長持入也、御手厚く御登し之段評ばんニ相成候由也、此度ハ御屋敷近辺ニ而も無之ニ付、白米之御手支無之候得共、近辺迄も焼失ニ成候へハ、実ニ御手支ニ相成候付心得事候也、握りめし御登シニ相成候義ハ直様間ニ合候而、至極之御取計御都合之由、右者何分御人数五百人余之御手当ニ付、御屋敷ニ而精々たき出し申候得共、行届兼候所へ握りめし登り候付、至極御都合ニ相成候由、尤御人数ハ別レ々ニ相成、御町奉行方折々防方御差図有之故、何方ニ居候哉御屋敷江相知レ不申候付、食物相

廻り不申、大ニ難義いたし候者も有之由、右様之節大火与見へ候ハ、出立之節銘々握りめし三ツ計持参候方可然心得物也、四月七日朝五ツ時消火之注進到来いたし候、右出火ニ付京都御所司代方江戸表へ十二時之刻取ニ而注進、早飛脚御差出有之候由、

右ニ付御停止之義江戸表ニ而被仰出候之趣六日限を以申来り候上、四月廿四日方六日迄三日之間御停止被仰出候、是ハ天明之節御例之由、一、右ニ付、殿様御儀禁裏御警衛被為蒙仰候、高槻永井様も御同様被為蒙仰候由、

此方様五月十二日方六月七日迄御警衛御人数御差登、七月中御警衛并火之御番兩方共御勤ニ相成候、

但式ケ所御番所ハ公辺方御建揚出来、御渡相成候事、重之番所ハ御番頭吉人、

壹ケ所ハ近衛様御殿之東手角今出川御門ヲ壹町半計這入候所也、此所ハ御中小性計相話候番所也、此番所前重々堂所方通行有之、下座重ク候由、

同寅

一、六月十三日夜四ツ時頃、縁心寺本堂不殘焼失、庫裏ハ残ル、西風有之飛火ニ而、町筋餅屋金五郎之裏ニ普請可致積之木買入積置、雨用意ニわらニ而屋根ふき有之候所へ火移り、夥敷木材不殘并土蔵共不殘焼失、右丈ケニ而翌十四日五ツ時前二火治り申候、町筋江ハ出不申候、尤丸之内江近ク候付、堀江、兼松、御番所戸田等へ郷中駆付人足分ケ遣し申候、

右者寺内小僧之付火之由也、俄ニ而手後レ本堂丸焼之由、同夜八ツ時過頃大白雨有之都合宜敷候事、

一、同翌十四日夜八ツ時頃大地震ニ而一統驚人候得共、最中ニハ迎も外へ出候事難出来、少々治りかけニ漸ク外へ出候所、折々西北ニ当り

ドフ／＼ト響キ、地震候付宅ニハ居不申、火取扱停止いたし、二夜計外二場所拵へ、床机之上ニ而蚊帳を釣り寝申候、尤段々折々之地震ナヤスク相成候得共、三十日計震申候、是ハ由断ハ相成不申候得共、大地震之後ハ蔭之さす如クト相見へ、何方之大地震承り候而も、折々震候事之由、乍併決而由断ハ相成不申、用心いたし候方可然候事、此方之宅ハさしたる損所も無之、壁少々所々ユルキ表之方門ハ北手土塀倒レ申候計之事、

一、御本丸帯郭御番所石垣崩レ候付、御番所も同様崩落、ヒシ櫓同様崩落、宗門帳不残御用立すニ相成候由、其外所々塀崩落、北大手御門倒レ、南大手御夕門上丈ケ崩落、二ノ御丸内御建物少々損シ候御事、細工部屋不残倒レ、家中内土塀夥敷倒レ申候、乍併倒家且怪我人等無之候、町筋二而ハおてつ餅屋倒レ、中ノ庄稻荷江入口両家共半潰ニ相成候、其外筋ニ寄ユガミ候家所々ニ有之候、何分瓦ふき之古キ建物ハ甚六ヶ敷、ケ様之節ニハ帳危事大一二候心得物也、都而郷中町方共倒家ニ相成候者多分古キ瓦ふき家也、

一、寅八月十二日御頭中ノ御口達、丹波山家表へ罷越西原民右衛門代り、彼表之御用向相勤候様被仰付候、尤木村喜平太、森善次郎罷越相勤候二付、申談相勤候様被仰付候、依之廿日出立罷越候、翌卯十月晦日山家詰御用掛リ御免被仰付候、

但卯八月二日谷播磨守様御逝去故、無拠詔合ニ付御免相成候、

一、寅九月十八日京都御所司代 脇坂淡路守様御達し、今般異国船泉州沖江渡来ニ付出張之用意いたし置、今一応注進次第出張候様御達し有之、右ニ付此方様御心得二而、一兩年之内凡半備計京都御屋敷迄廿一日ハ出張有之候処、廿五日出張之御沙汰有之ニ付、当表ハ半備、伏見、藤森迄出張、御屋敷ハ半備出張、同所ニ而打合、夫ハ一手ハ墨染ニ而固、一手ハ竹田固ニ相成、然ル処十月九日異船

退帆いたし候付、固所引払候様御所司代ハ御沙汰有之、十一日早朝出立引取ニ相成、同日夕八ツ時過当着之事、但彦根様ハ一手京都迄出張、一手ハ大津表迄出張逗留有之候処、十一日十日朝大津出張之向引払有之、当町通行有之候、

一、禁裏御遷幸、卯十一月廿三日無御滞被為濟候事、前後当日快晴、右御警衛御勤被遊候付、卯十一月禁裏ハ絹五疋、中啓三本御拝領被遊候付、御勘定人以上麻上下二而恐悦申上、同月赤飯為御祝被下置、下々江ハするめニ御酒被下候、

一、右ニ付、江戸表ニ而十二月御時服御拝領之旨辰正月申来、正月九日御勘定人以上麻上下二而恐悦申上候、

一、寅十月三日、左之通青半切ニ而被仰出候、

羽太瀬大夫

右当春新知被下置、御扶持方上り候付取統難渋之趣、依願当寅年惣渡之内米八俵御繰上ケ御渡被下置候付、当暮上納可致候処困窮者之義万端支難渋之趣、尚又依願当寅年ハ三ヶ年賦上納ニ被仰付候、但御家老之御用番、御番頭両家へ廻勤御勝手へ案内、

〔安政二年〕

十月

一、安政二卯十月九日、左之通願書差出入、

私娘由緒御座候付、媒鈴木庄右衛門を以鈴木春二妻二貫申度旨申聞候付、差遣申度奉願候、右之段御家老中迄宜御執成被仰上可被下候、奉頼存候、以上、

十月九日

羽太瀬大夫 ○〔花押写〕

堀江六郎左衛門殿

右十一月廿五日、前日平服召ニ而御聞濟被仰出候二付、廻勤御家老

御月番、両番頭也、右願書遣し方ハ御勘定人以下二而も由緒無之候共不苦候由、貰ひ方春二願書二ハ由緒之訳認かへ候半而ハ難相濟候由、都而貰ひ候節者六ヶ敷、遣し候節者、在方百姓某方へ遣し度願二而も不苦候由、家中内二而も御勘定席、御徒席等ハ御馬廻り江貴候節ハ由緒之訳相談無之候半而ハ難出来候由、且亦願候前二組之肝煎へ存寄之有無相尋候上、筆頭へ案内いたし、願書下を以自分頭へ内見二入、立願二付同席を以二ノ丸二而差出、相濟候節ハ本人前日平服召也、御聞濟之上前書之通廻勤筆頭肝煎へ案内、御番所へ始末共案内之事、

卯年

一、十月晦日、山家詰御用掛り御免被仰出候、御用向卜申ハ御借財多御身鉢六ヶ敷二付、御勝手向取締主法立等被成度御人□貸被□候様播磨守様ハ殿様へ直々御頼二相成、無御伝寅六月頃ハ江戸表木村喜平太、膳所西原武右衛門、森善次郎三人江山家詰被仰付罷越候所、武右衛門義俄二御用向有之引取御免二相成、右為代此方へ同様御用向被仰付、八月ハ罷越相勤候処、卯三月ハ御在府二付木村ハ御供二而出府、善次郎ハ七月二俄二御免被仰付引取、此方壱人二而暫相勤候内、八月二日江戸表二而播磨守様御逝去有之、大物入臨時出来、弥御六ヶ敷次第二相成候、然ル処為代武内堅八郎罷越候付、相談之上勤方品々為伺、此方壱人九月廿三日ハ膳所へ引取、書付を以相伺候処、御家老中へ直々相伺候処、尤之義二御承知被成候得共、何分容易不成義二付急々差図も難出来、何レ御断之程江戸表二而引合中故、其内何と歟可申参候間、夫迄之所出立見合候様御沙汰二付、先ツ郡方へ出勤いたし居候処、江戸表二而も中々御先方御承知も無之由二而取留候事不申参、彼是御差図延日相成、此俣山家表へ罷越候而ハ、是迄手続も有之、御手離れ之御弁利二ハ相成不申、旁十月晦

日山家詰御免被仰出候、右為代浜専右衛門へ被仰付、十一月中頃被罷越候処、十二月上旬御断御承知二相成候処、江戸表ハ申参り候趣二而山家へ御掛合二相成、浜、武内兩人共十二月中二引払、引取二相成候事、

一、右山家之御養子ハ水戸様御分家、二万石松平播磨守様之御兄弟御相談出来候由、

〔安政三年〕

安政三辰年四月五日

隠岐守様御事

一、殿様御儀御隠居御願之通被為蒙仰、

猶五郎様御事

若殿様江御家□督無御滞被為蒙仰候、

同断

辰年三月七日

一、麻御上下 一卷 羽太瀬大夫

金百疋

右谷様御勝手向御取締御用懸出精相勤候付被下置候、

一、安政二卯年九月廿九日、京都安田宮内セ話二而、京都禁裏御所御内寺町通今出川ハ三町計上ル藤林左馬少允方江始而たみ事鳥度参り初いたし置、翌辰年三月十四日差遣し候、其節宮内、瀬大夫兩人同道いたし、夜二入罷越候付、供壱人京二而雇、上下等為持、先方着替へ候、尤何事も相互二省略、諸費無之様申談取計候事、右之節土産左之通、

御上下料

金三百疋

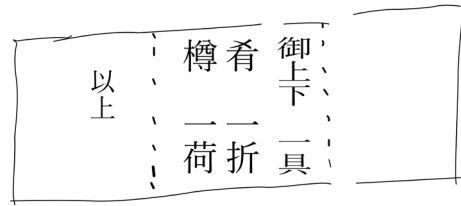
但多葉粉入包仕立

樽、肴料

金百疋

右同断

右之目錄認方、左二、



如凶大奉書横折、三ツ畳ミ長のし付

一、長刀 一振遣候

代吉歩式朱百文、さつまや手

但袋付二候へハ式歩三朱計かゝり候得

共其義二不及候由申聞有之二付袋止メ、

一、左馬少允ハ当時中詰相勤候由、無程御

膳番二相進候へハ宜敷候由、

一、白じゆ子半襟、盃、扇子

一、右同断

一、白しゆ子半へり紙箱入盃

一、黒じゆ子半へり

扇子

一、紅白粉紙

フシロヒ

一、翌三月十五日部屋為見廻宮内参り候、其節持参物、

肴料として

蒸籠料

金貳朱

同壹朱

一、四月四日藤林并宮内両家へ為挨拶罷越候、

但し袴一持参、藤林ニ而用ひ候、

肴料 百疋 宮内方へ已来ハ止メ候積り

白木綿 壹疋

ひちり面半へり一 娘おくまへ

右之通宮内并家内段々セ話ニ相成候付、為挨拶遣ス、

〔安政四年〕

一、当方ヲ遣し候親類書、左之通、

親類書

一、祖父

膳所家中 羽太新左衛門――

一、祖母

同家中 中嶋故郡次――妹

一、父

同家中 羽太瀬大夫 義程

一、母

大津 浄願寺女

一、妹

膳所家中 鈴木春二妻

一、兄

同家中 羽太巖――

右之通ニ御座候、以上、

卯九月

たみ

廿貳才

但奉書建議メ、

一、右二付巳正月初而之義二付、鏡餅親へ一重、左馬少允へ一重差贈可

申寄義通例之趣二付、為料壹朱包書面相添十二月十五日頃差登し候、

然ル処先方も同様為料壹朱参候事、

但初而之正月ニハ当方ヲ遣し、翌年ハ先方ヲ当方之親在世中差

積り有之候事之由、右者一度限ニ而互ニ入魂いたし候義弁利之事、

私娘禁裏御所御内藤林左馬少允妻二貫申度旨、媒中嶋郡次を以申聞

候付、差遣申度奉願候、右之段御家老中迄宜御執成被仰上可被下候、奉頼存候、以上、

安政四丁巳年三月

羽太瀬大夫

堀江六郎左衛門殿

右同月御聞濟被相成候、尤此度ハ禁裏之二字相除差出候様、御頭中申聞有之候事、

右者天保十一子年五月近六之助御願候類例、

私姉禁裏御所御内森彈正与申者之妻二貫申度旨、媒若林健右衛門を以申聞候付差遣申度奉願候、

一、安政四巳年十一月三日、熊田友次を以、お久事神谷佐五郎悴保太郎之妻二貫度申聞候付、十一月三日ニ差遣し候、先方ハ三百疋、肴壹匁五分、酒一升、切手□ニ參り候、当方ハ三百疋ニ肴、酒同様差贈り候、親類江之土産ハ五二人魂為代之約束也、乍併遣し方ニ付白井保田両家へ風呂敷壹ツツ、黒田へ半へり一贈り候事、先方ハ約定通り贈りなし、願濟無之内ニ付、幾日差遣し候段支配頭、大目付へ内々届候事、大目付ハ二ノ丸ニ而届濟、私娘白井吉右衛門媒を以、神谷佐五郎悴保太郎妻二貫申度旨申聞候ニ付、差遣申度奉願候、右之段御家老中迄宜御執成被仰上可被下候、奉頼存候、以上、

同五年正月廿四日

羽太瀬大夫○〔花押写〕

堀江六郎左衛門殿

美の紙認、同紙ノ上包也

右組肝煎江相談候処、存寄無之旨申聞ニ付、下書を以支配頭へ内見之上、廿四日同席岡村佐次右衛門相頼差出ス、

一、斎藤摂津守様御知行所野洲郡野洲村竹内次右衛門娘ヲ品中村沢野井増兵衛七話ニ而相談相調ひ、安政四巳年十二月八日悴妻ニ内分引取、尤表向媒之積熊田友次相頼取持旁相頼候事、然ル処当人無抛少々病

氣も有之、不得止事里歸りとして十七日送り遣し置、夫ハ破談之義家風ニ向キ兼候旨計ニ而申入候処、相談相整同月廿六日荷物不残差戻し、無滞相濟、右者内々支配頭、大目付へ届置候付、尚又相届候、肝煎江も同様也、尤親類内南笠村木下茂兵衛義前後共大二骨折心配いたし呉候事、

〔安政五年〕

安政五年八月十五日頃

一、山田兼太郎方不如意ニ付、同人ハ同性彦六方へ寄宿いたし、母親并兄弟ハ母之親元上戸山村へ相預ケ仕法いたし候段、一昨年御届申上、屋敷ハ一先ツ差上置候、然ル処彦六病死ニ付寄宿も難出来、無抛内々母親取寄セ、町ニ而借家住居いたし、其段親類方内々支配頭へ申上候処、含ニ相成暫其俣ニ而相行ひ候得共、かり賃も入、甚不都合故尚又相談、右之次第柄内々頭へ申上相歎如何仕候哉、屋敷被下候様仕度旨を以相伺候処、尤ニ承知ニ相成、表向肝煎を以申立候方可然由旨差函ニ付、其通り申立候処、御聞濟ニ而、先ツ當時御屋敷拝借被仰付候事、尤何レも口上ニ而申立候由、依之母親并兄弟共引戻し、且寄宿相止メ候事も同様共御承知ニ相成候訳合也、為心得手續記し置候、右未年春屋敷被下候義申立候処、北ノ金子槌之助跡屋敷被下候、

安政五年十二月

羽太瀬新司

右豊七郎様御附被仰付候、但是迄御小性相勤罷在候、

別紙ニ而米三俵

右同人

右為御役料被下置候、

〔安政六年〕

一、安政六未七月十九日、左之通願書差出ス、

私娘渡辺鎮之丞様御知行所栗太郎糺村ニ罷在候郷士西田金三郎悴順作妻二貫申度旨熊田友次中嶋郡次媒を以申聞候付、差遣申度奉願候、右之段「次第上り御家老中迄宜御執成被仰上可被下候、奉頼存候、以上、糺村ト唱

八月五日 七月廿九日

八月三日

羽太瀬大夫○〔花押写〕

堀江六郎左衛門殿

右願書差出し方ハ前二記ス、美濃紙認メ同紙上包ニ而差出ス、八月五日御聞濟也、媒之義御中小性以上歟、同席辺ニ而差出し候様与之義二付、郡次ニいたし候事、

安政六末年十二月

一、金五拾疋

羽太瀬大夫

右此度御用池普請御用出精相勤候付被下置候、右者御用池埋り候付浚普請被仰出候、先格を以御家中惣出二者候得共、半々ニ而隔日ニ罷出候、尤殿様御在府中ニ而豊七郎様折々御出ニ而同様土持被成候、右掛り役ハ御番頭、頭取ニ而御勝手方郡方也、御作事も同役勿論受堤も紐継足シ、三尺之嵩置出来候、池ノ南之方凡池半分計之所、御家中浚場半分堤寄り北之方、郷中出人足ニ而浚堤嵩置へ持運ひ、且又杖突之者御約組之内ニ而拾人計被仰付候、御勝手郡方ハ交々日々罷出土持いたし、郷人足浚之場所日々後ニ而明日之村々人足数ニ応シ坪割方ニいたし候、普請日数晴天廿日ニ而仕舞候事、惣坪凡四千坪有之候、惣ならし三尺取位ニ相成候、日々之御家中人数并郷人足都合千人計、日々罷出候而誠ニ見事成普請ニ候、普請中ニセ、村庄屋三郎兵衛方白餅差出し、万寿出し候者も有之、酒出し候者も有之、御家中郷人足共へ配分ニ相成候、豊七郎様方あんころ餅一同へ被下候、御上るハ郷中人足へハ普請所ニ而御酒、

肴、板一枚ツ、被下候、御家中ハ後ニ而二ノ丸前芝ニおゐて御酒、肴、板一枚ツ、棒だら一本ツ、蜆汁ニ而御酒被下候、右之外御家中一同へ被下物無之候、懸り役之者へハ御目録被下候、尤御家中之向者棒もつこふハ御作事ニ而出来、土ヲ掘もつこふへ入候事ハ当所村々人足之役也、御家中ハ身拵へいたし弁当持参朝六ツ半時方罷出候事、早曉方平尾池辺ニ而ドンく、チャトコヒ之太鼓村方叩き候事、

〔安政七年・万延元年〕

万延元年申年七月朔日十日記ス、

一、藤林左馬少允妻ニ遣し候お年義、是迄兩人男子出生いたし候得共、間茂なく小兒相果候、然ル処、全躰腹中ニコリ有之候得共、為差事も無之候処、当春来不相勝ふらくいたし、当五月頃方弥不勝種々養生いたし候得共、はかく敷無之、依之、六月十七日当方江取寄セ養生為致候得共不相叶、当申七月朔日夜六ツ半時頃相果ル、然ルニ暑中遠路差送り候義甚心配ニ付、双方申談、且双方之寺々承知ニ而藤林宿坊寺町通綾小路下ル勝圓寺方為念唯伝寺へ取片付之義書付来ル、申分無之ニ付、左之通忌服届出差出、其節口上ニ而暑中遠路之訳を以内分火葬ニいたし候段相届置候、七月三日夜六ツ時過迎ひ僧、こし元女先松明持、白張挑灯持、何レ茂岡山道之六躰地藏迄先へ遣し置、夫迄之途中ハ藤林方持参之箱挑灯ヲ先ニ立真、次ニ仏乗物銘々手挑灯ニ而送ル、六躰地藏方行列、尤内分ながらも夜分ニ付矢張麻上下着用、乍併内分ニ付、仏ノ打物箱等ハ不持候事、尤左馬少允義ハ葬式ニハ不立、灰葬ニ参詣事、

〔上部横書〕「林竹蔵方之例文」

私義京都江差遣置候娘病氣ニ付、先日方為養生逗留罷在候処、昨夜死去仕候、依之、定式之忌服左之通相請申候、以上、

忌十日 七月朔日の同月十日迄

服三十日 七月朔日の八月朔日迄

七月二日

羽太瀬大夫

堀江六郎左衛門殿

右之通月番頭へも同様相認め届候事、尤頭之名宛書入候事ハ近頃振合之由私義京都ニ罷在候妹昨夜死去仕候、依之、定式之忌服左之通相請申候、

忌 七月朔日の同月廿日迄

服 七月朔日の十月二日迄

七月二日

羽太新司

——殿

申五月

一、五月末、湖水満水ニ相成、尤全蘇春已来雨降続キ湖水も追々込上ケ候処へ、五月末風雨有之満水与相成、南繩手ハ惣門の三軒茶屋迄舟渡し橋本村へ申付ル例也、惣門内八軒町釣角屋迄板橋掛り候、是ハ膳所村掃除場ニ付、同村の御作事ニ而板拝借いたしかけ候由也、水ハ瓦ヶ浜御物見前迄差込候、夫のこん屋町奥村菅次宅床迄漬候、二ノ御丸ハ一円水漬、御玄関ニ而ハ敷台上迄漬、二ノ丸前ムクノ木辺の御玄関迄迄板橋掛りニ相成、瓦ヶ浜御殿不残水入、古城前米蔵不残水入ニ付、前広ニ米不残御本丸蔵并長蔵へ運ひ入ニ成、二ノ丸前芝地へ舟差入候、従之水北本多之前の北追手御門内迄板橋掛ル、御水主長家不残水入、戸田五左衛門殿宅門内迄少々板橋懸ル、木下町宮様前の敬願寺前少シ西迄水差込、往来出来かたく候付、北追手前升屋ノ辻子の家中内牢屋敷下り往来へ出ル迄往来ニ相成候、通り筋町々ハ葎ニ而スジカヒノ垣出来候、又響忍寺前の鮎屋之前升形迄水入、往来出来かたくニ付、右寺ノ前の南手ヲ通り大竹藪南手ヲ通行、

西庄瓦屋之軒へ下ル所迄往来ニ成、西庄泉水寺前少々南手の桃源寺

前寺町計西手迄水入、往来迫り候西惣門前西の馬場、石場辺、茶店はりま屋之西辺迄水入、舟渡しニ而大津御役所石原清一郎様も立退

ニ相成候由、百年余已来無之大水也、湖水縁村々ハ不残皆無、上ケ

村々迄も水入田畑も多分有之候事、近年申年度毎ニ水年ニ向ひ候ニ

付、心得可申事、尤湖水満水ニ相成候得ハ快晴ト相成、片降片旱魃也、

万延元庚申年

一、秀之丞儀中島家江養子ニ差遣候儀、林勝助、表向者広部八十五郎

媒を以相願候処、○御聞濟ニ相成候ニ付、九月廿九日朝差遣シ申候、

夫の引越御届相濟、其夕の五十日之忌相受申候段御届相濟候、

同十一月廿三日為家督六拾石被下置、御目見小性ニ被仰付候、

〔別筆カ〕
同十二月八日

一、瀬大夫義程死去、

法号 眞量院釈種義觀居士

神号 波多廻国幸彦命

二、諸事控〔二冊目〕

天保一四年（明治三九年）

〔表紙〕

天保十四癸卯年ヨリ

諸事控簿

羽太義比チカ

後改 義笈オイ

〔本文〕

天保元庚寅年三月廿五日寅ノ齋生

天保十四癸卯年十四歳

初名

嘉永三戌年七月七日改称

安政四巳年十一月十一日改称

新司

通称

武次郎

巖イハ

〔天保一四年〕

康禎公御代御法号又玄院様

一、天保十四癸卯年六月九日

猶五郎様御相手罷出候様被仰付候、

〔追筆カ〕同年七月十五日、於御中奥殿様江初而御目見被仰付候、

但右者、兵部太輔様御五男、斯岩御年九歳、後隱岐守様御順養子

被為成候事、御諱初忠和公、後康穰公

下総守様、後主膳正様 同勤 戸田弁三郎、堀池宗次郎

〔天保一五年・弘化元年〕

一、弘化元甲辰稔八月三日

諱義比ヨシチカ 花押〔花押〕 歸納宜也、字曰無莫、花押後改〔花押〕

写宜也、

論語卷ノ一、無適也、無莫也、義之與比

〔追筆カ〕右森鼎先生之選也、

〔右諱其外共明治八年五月、都合ニ仍リ改ム、依之、八年五月ノ所

二記ス、

一、猶五郎様御相手勤中為御褒美金三百足宛、二季ニ被下置候事、後略之、

〔弘化二年〕

一、弘化二乙巳年八月朔日、米九俵被下置、御中小性組被召出候、同月

四日右ニ付席上村善五太夫次、松瀬九八郎上被下置候、三番組江御

番入被仰付候、

一、同日、猶五郎様カ銀式両御相手無滞相務候付、為御褒美被下候、同

十日諸御礼被為請候二付、御礼申上候事、

〔弘化三年〕

一、同三丙午年正月、改印仕候付御届申上候事、

一、二月六日、禁裏崩御、奉称仁孝天皇、

一、二月廿五日、諸勤相務候段御届申上候事、

一、四月廿七日、猶又改印仕候段御届申上候事、

但シ半切ニ認差出ス〔印〕義比〔印〕宜 但シ裏印、但裏印八届

二不及、

一、五月八日、榮造様御相手助役被仰付候、御法号隆徳院様、

但右者兵部太輔様ノ御弟様也、御病身ニ付御隠居ニ被為入候、聞

五月十四日、右助役御免被仰付候、

一、六月朔日、右同断被仰付候、

但右御相手之儀者子細有之、本役者無之都而助役ニ被仰付候ニ付、
従是永助役相勤候事、右勤中為御褒美ニ季ニ金貳百疋宛被下置候
事、略之、

同役 西川紋太郎、牧野作馬、更井多門

後 飯田源次、飯島良造

一、同十二日、不快ニ付引籠候段御届申上、同廿五日出勤いたし候、

十一月

一、直心影流初伝為相濟候事、

十二月二日

右ニ付、金百疋被下置候事、

十二月廿二日

一、金貳百疋伴道雪派□出精ニ付被下置候事、

〔弘化四年〕

一、弘化四丁未年四月、殿様御儀、此度御願之通御隠居被為蒙仰、若殿

様江御家督無御相違被為蒙仰候事、

但 殿様 兵部太輔様御事、御諱 康禎公、後御法号又玄院殿、

若殿様 隼人正様御事、御諱 康融公、後隱岐守様、御法号令

徳院殿

右ニ付為御祝金三両頂戴仕候、但シ下々迄被下置候事、夫々多少有之、
右奉祝一統方献上物仕候事、

十一月廿九日

一、大津表へ立歸之御暇奉願候事、但シ鳳権ニ不幸有之罷越入、

十二月十日

一、妹死去いたし候処、七才未滿ニ付今日一日之遠慮いたし御届申上候
事、但右者おゆき事、

十二月十九日

一、大津表ニ罷在候叔母死去付、定式半減之忌服相請候段御届申上候、
忌十日、服□十日、但右ハ母之妹つね女事、同廿三日御無人付、忌
御構無之候付、明日方出勤いたし候様被仰付候、

康融公御代御法号令徳院様

〔弘化五年・嘉永元年〕

一、嘉永元戊申(歲)正月十五日

此度親共御馬廻組被仰付候付、御中小性席左之通御直シ被下置候事、
堀池宗次郎次、鈴木覚右衛門上

正月

一、種田流初伝為相濟候事、

同廿四日

一、金百(疋)匹、右同断ニ付被下置候事、

四月五日

一、明六日方勢州津表江十宿之御暇相願候事、

但シ右者母之継父中野長兵衛与参宮いたし、同十二日夕引取、翌
朝御届申候、

八月廿日

一、泉州堺表へ明廿一日方七宿之御暇相願候処、用事不相濟、尚亦廿八
日方三宿之追願御聞濟ニ相成候事、

但シ右ハ前同人与摂州大坂見物、夫方俄ニ紀州高野山江参詣いた
し、同廿八日夕引取、廿九日御届申上候、

一、嘉永三庚戌年正月九日

伴道雪流初伝為相濟候、右付金百疋被下置候事、

七月七日

一、武次郎事巖与改名相届候事、

同八日

一、萩野流御軍事大筒方被仰付候、

同廿五日

一、真野流初伝為相濟候、右付金五拾疋被下置候、

八月二日

一、栄造様御相手助御免、是迄無滞相務候付、金百疋被下置候事、

同三日

一、右同断、御相手助飯田源次引籠中被仰付、同十日御免、

同十五日

一、同断、御相手永々無滞相勤此度御免二付、栄造様金百疋、猶又為

御肴料金五拾疋、為御扇子料被下置候、右同断二付御肴一折、御菓

子一箱献上候、

十月十二日

一、大津表へ立歸り御暇相願申候、右者鳩権二不幸有之参ル、

十一月朔日

一、御老中松平和泉守様御登り御通行付、三大手掃除奉行被仰付候、

十二月十四日

一、直心影流目錄伝授為相濟候、右二付為御褒美金三百疋被下置候、

〔嘉永四年〕

嘉永四辛亥年正月

一、萩野流初伝為相濟候、右付金五拾疋被下置候事、

六月十九日

一、栄造様御相手助被仰付、同廿九日御免被仰出候、

九月十五日

一、右同断被仰付、十月五日御免、

十二月朔日

一、右同断被仰付、同七日御免被仰付候、

十二月

一、道雪流格別執心出精二付、為御褒美金貳百疋被下置候、

十二月廿三日

一、米拾五俵、右之通り御充行御直被下置候、

〔嘉永五年〕

嘉永五壬子年正月七日

一、此度具足初而差出候二付、御届申上毛附差出申候、

右二付為御賞美麻御上下壹卷、金千疋親共江被下置候、

正月十九日

一、金三百疋、右者種田流目錄伝授為相濟候付、為御褒美被下置候、

同廿五日

一、栄造様御相手助被仰付、二月九日御免、

閏二月三日

一、右同断被仰付、五月廿五日迄、

三月十三日

一、不快二付引籠相届、廿五日全快付出勤いたす、

六月廿九日

一、二番組江組替、筆頭被仰付候、

七月十日

一、銀七両、右者栄造様御相手御用多相勤候付被下置候、

八月廿八日

一、諸御礼被為請候付御充行御直被下候、御礼申上候事、

〔嘉永六年〕

同六癸丑とし三月廿二日

一、当年江戸立歸御供被仰付候、

一、五月三日不快二付引籠之段御届、同十五日快氣出勤相届候、

一、六月ヨリ八月迄雨不降、大旱魃御堀水悉干、

一、隠岐守様御事、康融君ナリ

一、殿様江戸表江御発駕六月廿一日

右二付御供二而出立、七月廿四日無御滞被遊、御着府候事、

右御発駕前江戸品川沖江異国船到来いたし居候付、御供之面々御中

小姓以上鎗持参可致様御沙汰二相成、持夫被下候事、然ル処御着府

之節者退帆いたし候後二候、右異船者亜墨利伽人二而、此後度々到来

交易、和親執結之儀申立候最初二御座候、其後御差免二相成、武州

横浜二交易場御開二相成候事、

家慶公御法号慎徳院様、七月廿二日美者初旬

一、公方様薨御二付御手当として立歸り之向不残暫居残候様七月八日被

仰付候、

一、八月五日、居残り之向不残御暇被下候付、同八日出立御届申、一日

之御暇相願、鎌倉、江之島等江相廻り見物いたし、阿部川一日半支

候付府中二留り、同月廿一日致歸膳候事、

十一月

一、此度異国船到来二付、御家中一統末々迄御手当金として左之通り被

下候、御小姓以上金七両宛、同部屋住金三両宛、御中小姓組金五両宛

同部屋住金式両式歩宛、御徒士御勘定人組金四両宛、同部屋住金式

両宛、其以下次第減少二而一本指之者迄被下置候、

一、以来御中小姓以上、自分具足所持之向雜兵具足所持いたし候様御沙

汰二相成、依之是迄所持無之者江ハ雜兵壹領二付金式両充被下置候、

但御馬廻り組三領御小姓組同斷、御中小性組式領充也、持席ヨリ

上ノ席遣役を相務候者江ハ不足分御貸被下候事、

右二付雜兵具足式領分金四両請取、新規相調申候、

〔嘉永七年・安政元年〕

安政元年甲寅年四月五日

一、豊七郎様御小性勤被仰付候、同勤山口勝之助、大羽幾之助

但右者兵部太輔様御七男、猶五郎様御弟

一、四月六日午ノ刻過、禁裏炎上、

但シ右者仙洞御所御仮住居之宮様御殿方出火二而、西ノ方浄福寺

通り迄、上ハ今出川、下ハ榎木町迄焼失也、

一、六月十五日暁八ツ時大地震、

九月九日

一、不快二付引籠御届申候、同十一月廿七日全快二付出勤いたす、

九月

一、泉州沖江異国船到来二付、一番手備伏見迄、廿一日、廿五日両度二

出張、尤人数寄之ため鐘三ツ重ね撞、

一、九月廿八日夜当地鷹匠町中村鹿蔵宅方出火、北風強ク南ノ方へ御家

中家数四拾軒計り焼失、

一、十一月四日巳ノ刻、東国大地震并洪浪、翌五日申ノ刻、摂州大地震

并洪浪、

但シ右両日共当地も地震有之、四日東、五日西ノ方幽二山鳴ノ音歟、

洪浪ノ音歟、大炮声ノ如キ響数多有之、

十二月

- 一、金貳百疋 豊七郎様御小性勤出精相務候付被下置候、
但右役中為御褒美二季二被下置候、以後略之、

〔安政二年〕

安政二乙卯年正月

- 一、萩野流目錄伝授為相濟候、右付金百疋被下置候、
三月廿七日

- 一、金五拾疋、右者豊七郎様御鎧初、御元服、御袖留、御前髪取兼御祝式無御滞被為濟候付被下置候、同貳拾五疋、右之節御櫛御用相勤候付被下置候、殿様御手元疋金五拾疋、豊七郎様御手元疋貳拾五疋同断付被下候、
四月八日

- 一、御同所様御附助役被仰付、同十月朔日御免、
十一月朔日

- 一、右同断被仰付候、
十一月廿九日

- 一、不快二付引籠御届、十二月十五日出勤いたし候、
十二月

- 一、高島米壹俵
右者豊七郎様御附助相務候付被下置候、

〔安政三年〕

安政三丙辰年四月五日

- 一、殿様御儀御隠居御願之通被為蒙仰、
若殿様江御家督無御相違被為蒙仰候事、

但 殿様 隱岐守様御事、後御法号令徳院殿
若殿様 下総守様御事、後主膳正様

五月廿日

- 一、豊七郎様御附助役被仰付、九月廿日御免、

十二月

- 一、高嶋米壹俵、金百疋

右者豊七郎様御附助役并御小性等出精相勤候付被下置候、

〔安政四年〕

康穰公御代

同四丁巳年正月廿日

- 一、萩野流稽古世話方被仰付候、
四月廿九日

- 一、豊七郎様御附助役被仰付、五月八日御免、

閏五月五日

- 一、右同断、六月朔日迄、
七月

- 一、真野流目錄伝授為相濟候、右付為御褒美金百疋被下置候、
八月三日

八月三日

- 一、御附助被仰付、九月廿七日御免、
十月十一日

十月十一日

- 一、右同断、十一月三日御免、
十一月廿五日

十一月廿五日

- 一、右同断被仰付候、
十一月十一日

十一月十一日

- 一、此度巖事新司ト改名相願候処、御預り二相成、御在府中付江戸伺二

而十二月九日御聞濟相成候、

十二月八日

一、此度野洲郷士竹内次右衛門娘、妻二貫候得共子細も有之、無程離縁

二いたし候

十二月

一、高島米壹俵、御補助相勤候付被下置候、

〔安政五年〕

同五戊午稔

一、公方様八月八日薨御、御法号温恭院様、

七月

一、高島米壹俵半、御付助役相務候付被下置候、

十二月

一、高島米壹俵半、前同断

十二月廿三日

一、前日御用召之上、御同所様御附本役二被仰付候、高島米三俵、右為御役料被下置候、

同役 松原熊蔵、富増新兵衛、村田喜兵衛

後 貝寄岩根、吉田五郎左衛門、杉浦孫太夫

〔万延元年〕

万延元庚申年

一、三月三日朝、江戸外桜田二において彦根騒動アリ

一、五月末ヨリ六月中旬迄湖水大洪水、

但シ二ノ丸御玄関、敷台中程迄水漬り、同御門前榎ノ西マテ、猶

当町所々水込、

七月朔日夜

一、妹おとし儀死去付、定式之忌服相請候段相届申候、

忌廿日七月朔日の同廿日迄、服九十日、七月朔日の十月二日迄、

但シ右者京都藤林左馬少允妻、

七月十日

一、御用多二付、忌半減二而御構無之段被仰候、出勤いたす、

十二月八日夜亥ノ斎

一、親共急病差発り死去二付、先病中之振二而翌九日早朝親共不快引御届申候、直様看病引御届申候、同夕親共之支配頭へ御高恩之御礼申上、私支配頭へ死去之段御届申候、同十一日唯伝寺ニテ深心院殿同所江葬式万端都合能相濟候事、号真量院釈種義観居士、

忌五拾日、十二月九日の西正月廿八日迄、服十三ヶ月、十二月ヨリ酉十二月迄、

〔文久元年〕

文久元辛酉載正月廿九日

一、忌明之段御届、夫々江廻勤いたす、

二月三日

一、麻上下二而御用召、左之通り御書附頂戴仕候、

一、五拾石、右親瀬大夫為家督被下置、御馬廻り組被仰付候、勤方は迄通り相心得可申候、

一、三番組江御番入被仰付候、席左之通り被下置候、岡村佐治右衛門

次粟屋彦右衛門上、惣列之席左之通り、林勝助次、粟屋彦右衛門上、右之通り被下置候事、

二月十五日

一、三番組支配頭堀江六郎右衛門殿へ征矢壹手目錄二而相贈ル、右料掛

や切手二而式刃四分、御番頭書役へ相渡す、

三月

一、此度鈴木故覚右衛門方江舎弟政之丞儀養子二貫申度旨、山口蔵助を以被申聞候付、親類一統相談之上熟談之旨同月十四日蔵助へ返答二及候、

三月廿一日

一、為結納上下地、樽肴等料物二而目錄添、深谷傳次郎持参有之、受納いたす、

但以後表向媒之儀者、深谷傳次郎被致候段、蔵助方前以断有之、

右二付当方二而酒肴可差出之処、前以入魂いたし置酒肴切手相贈ル、

三月廿五日

一、右之願書前以支配頭へ入内見二置、今日差出し申候、尤先方茂今日被差出候事、

四月朔日

一、豊七郎様明二日の京都東本願寺能為御覽二宿懸御登り御供被仰付候付、此段御届申上御供いたす、

四月七日

一、前日平服召二而弟亀五郎儀鈴木家へ養子願之通り御聞濟之段月番保田信六郎殿の御口達、

但政之丞儀亀五郎与改名、年之儀も十四才之処十五才与相届候様、鈴木家の断有之候事、

五月二日

一、明三日、亀五郎儀鈴木家へ引越候段御届、并幼年二付暫之処私方二寄宿仕度御含二相成候様、双方支配頭并月番等へ申上候事、

五月三日

一、吉辰二付朝五ツ時亀五郎儀媒深谷傳次郎同道二而引移り申候事、但

シ引移り祝式相濟後、先方親類齋藤富弥引廻し二而、御番頭始夫々江廻勤之事、

但シ右土産物品書并諸事附込帳二委シ、

五月

一、松姫様御儀、今般飛鳥井様へ御縁組之儀、去ル戊午年御端懸申御熟談二相成、当年五月二御入輿御取極り之処、御急病二而四月十一日被遊御逝去候、右二付御筐として縞縮緬紅裏之御振袖御法書ツ頂戴いたす、映松院様、但シ松姫様 故兵部太輔様御娘也、

同月十五日

一、諸御礼被為請候段御達二付家督御礼申上候、并新知五拾石御黒印被下置候、但右御礼銭青銅五百文追而掛屋切手二而御番頭へ相納ル、

六月廿四日

一、鈴木亀五郎儀、故覚右衛門跡目為家督新知五拾石被下置、御目見小性席御勘定所御用見習被仰付候、

九月廿七日

一、和宮様御下向御用掛被仰付候、但御書付を以、

但右御方者今上皇帝之御妹、公方様御台所也、

御用掛名前 御用人 加藤三右衛門 御元締 市元瀬左衛門 御吟味役 山口蔵助

表方 中神右橘、深谷茂八郎、羽一、猪狩衛盛

御膳役 佐倉伴次 地方役 澤田啓助 御徒目付 星野真作

但シ右御用懸り之儀以前被仰付有之候処、御下向段々御延引二相成候付、在府之人出来候付跡の衛盛与兩人被仰付候事、

一、右御通輿相濟候迄、豊七郎様御殿引切候段御届申上候、

一、和宮様御儀京都御発輿十月廿日

但廿日、廿一日両日大津宿御逗留、廿二日当地御通輿、鳥居川村鍵屋庄兵衛方御小休、草津宿御本陣田中七右衛門御昼休、未ノ齋

草津宿御発興、守山宿江被遊御着輿候事、右中仙道廿日之御道中也、

十二月十八日

一、麻御上下一具

金千疋

右此度和宮様御下向之節御用掛格別出精相勤候付被下置候、

十二月廿一日

一、御下向跡調御用向相濟候二付、此段御届申上、新廊下取片付、従是

銘々本役之方江出勤、

同廿一日

一、不快二付引籠候段御届申候、

〔文久二年〕

文久二年壬戌年正月十日

一、中島秀之丞儀郡次与改名、御聞届二相成ル、

正月十三日

一、此度和宮様御下向之節御役方并御道中筋、御道固共行届候段今般従公辺御賞美有之趣、全諸事心を人格別出精相勤候故之儀与御満足ニ被思召候、依之、御意被仰出候、但右之条御書附を以、右之節御口達ニ而追而御酒、御吸物被下候段御沙汰有之、

但シ平服ニ而前日召之処、引籠中二付名代寺西閑五郎相頼ム、

三月七日

一、右御用掛之面々於御料理間御酒、御吸物被下頂戴ス、但麻上下着用、
一、七月十四日夜、天子江毒薬調進之もの有之、其宵天火夥敷敷南北江飛違、当地よりも見ゆる、右御薬江移り候付不召上候由なり、終ニ及露頭ニ被召捕候者も有之、局方之脱走茂有之、恐へし、

八月

一、此度大津御郡代石原清一郎殿御組川嶋道之助妹儀、京都ニ而当方親

類飛鳥井殿内安田宮内養女ニ而八月十四日夜内分ニ而引取候事、其

夜媒熊田友次ニ相頼候事、追而表向御届申候節、媒神谷佐五郎頼ム、

九月

一、来春二月公方様御上洛被仰出候事、御法号昭徳院様、

但シ当春も被仰出、当秋ニ御上洛之処、御延引ニ相成、猶又今度

被仰出候事、此度者格別之御変革ニ而御宿泊ニ被仰出候、

十月三日

一、来春御上洛ニ付、御用掛被仰付候、但白紙御書附を以、

御用掛名前

御家老 本多頼母、村松猪右衛門、本多岩尾、柴田亘理

御用人 市元瀬左衛門、神谷兵左衛門

御元締 重根九郎右衛門、田河藤馬之丞

表 吉田五郎左衛門、遠藤竹右衛門、羽——、猪狩衛盛

御勝手御吟味 山口蔵助、牧野作馬、堀池貞蔵

書記役 山元寛平、白井吉右衛門、原田善太郎、武内平三郎

地方役 饗庭嘉左衛門、川地由市

御徒目付 星野真作、富岡賢次郎、大野玉太

外ニ棟梁并書役共

右者公辺名前書差出シ候様御沙汰ニ付、右之順を以差上ル、

一、此度公辺ニおゐて格別之御変革被仰出、諸御大名御隠居并奥方、御子共勝手ニ国元へ御引取ニ相成候而茂不苦候旨被仰出候、追々御国元へ御歸りニ相成候事、右ニ付此方様ニ茂奥様并紫雲院様、御子様共御歸りニ相成、十二月御機嫌能御着城被遊候事、何レ茂御出迎申上ル、

〔文久三年〕

文久三癸亥年

一、公方様御儀二月十三日江戸表 御発輿、

但三月二日石部宿御本陣小嶋金左衛門方御泊、三日六地藏村 御

小休、草津宿御本陣田中九藏方御昼休、大萱村行者堂江俄二御立寄、

鳥居川村鍵屋庄兵衛方御小休、大津御陣屋御泊、四日京都二条御

城江被遊御着候事、

一、殿様御儀者二条御逗留中御警衛被為蒙仰候二付、三日前方御上京被

遊候、右二付一番手御人数二而御城嵯峨口、野口両口御番所交代二

て相詰候事、

一、御参内之節供奉被為蒙仰被遊御勤候事、

三月

一、加茂下上社江行幸、公方様供奉被為蒙仰候事、

四月十一日

一、八幡社江行幸、公方様二茂供奉被為蒙仰候処、少々御不快付俄二御

断二相成候、

六月三日

一、御暇御参内二付、殿様二茂供奉被遊候処、天顔御拝天盃并酒饌御頂

戴被遊候、

一、京都御逗留中御用掛り之面々三人ツ、交代二御屋敷へ相詰、御番所

詰下陣千本通り焚出し所江茂相詰候事、

一、公方様御儀六月九日京都御発輿、淀方御乗船、大坂御城江御入、夫

方東海道被遊還御候趣被仰出候得共、同十三日大坂方御軍艦二而同

十六日無御滞被遊御着候事、

四月廿八日

一、豊七郎様御儀御用召二付、御上下二而御登城被遊候処、御知行五百

石御頂戴、後三百石御加増、御一類並御政事向御見習被為蒙仰候事、
但御内子之者是迄通り、

但右者殿様京都方暫御暇御願二而御帰り中也、

同日

一、右二付御附御免、是迄出精相勤候付金三百疋被下置候、豊七郎様

方御反物并御目録被下候事、其余御小姓御相手共不殘御免二相成

候、然ル処、外二四人御馬廻組、御小姓組之内江与力として被仰付候、

右戊辰年御政事御一新之節、如本卜御昇進被遊候事、

六月十一日

一、殿様御儀京都御用濟二付、御機嫌能御帰城被遊候、一番手之向も同

様引取、翌十二日御目見之上御意一統江被下候、

八月十八日

一、殿様御儀從御所被為召候二付、暁七ツ時御供揃二而被遊御上京候処、

御所辺異変之趣二而、上京之諸大名不殘参内、甲冑着用二而御門之

警固有之、騒敷二付殿様二茂不取敢御参内二而、早速当表へ注進有之、

早鐘撞人数打寄、一番手御人数不取敢相登ル、御旗本御人数者昼後

方相登ル、此方も御旗本二付昼後登ル三番組申合御願申上、先二登ル、

然ル処此方様二者今出川御門御固被為蒙仰候二付、一番手御人数二

而御門へ相詰候事、殿様二者御参内二而御旗本勢不殘公卿御門前二

御馬印其外御印相立、徹夜屯いたす、

但シ外御在京大名式拾余方同断、大小ノ銃炮筒切火繩等二而不容

易形勢なり、

右之次第二付殿様御用召之儀御沙汰止二相成候、

一、右異変之儀者攘夷之儀二付、先達而大和国行幸、神武帝山陵、春日

社等御拝暫ノ御逗留御親征軍儀被為在神宮行幸之事、右之通り被仰

出候付而者、元来長州侯之役子細も有之儀二付、長州侯俄二京地御

攘二相成行幸御延引被仰出候、右二付公卿衆茂七方計立退、長州へ被罷越候、

一、殿様二者其後九門内ニ御詰切ニ付、暫学習院外御三方御一緒ニ御詰ニ御座候処、此方様甘露寺殿、御書院御借入ニ而、夫ニ御詰被遊、毎々御参内被遊候、然ル処九月中旬御屋敷迄御引取ニ而、御三方程宛日々御当番日相定り、御当り日二者早朝甘露寺殿へ御詰為、天機御伺御参内、翌朝御歸り被遊候事、其後十月上旬御当番日ニ而も御泊り者無之、御屋敷を為天機御伺御参内、後御屋敷へ御歸り被遊候、
八月中旬

一、大和国五條并天ノ川村辺、播州銀山辺、浮浪士多人数寄集、所々乱妨いたし候付、諸大名へ取鎮被仰付候、

一、八月十八日京都へ相詰、九月十七日引取、但以後三十日交代ニ相成ル、

八月

一、殿様御儀、十八日異変之節早速御登京御参内御守衛被為行届候ニ付、天顔御拝御持古御末広并御絹五疋巻御拝領被遊候、

八月

一、御旗本勢并一番手共早速相登り候付、格別之思召を以金五百疋宛被下置候、

一、異変ニ付十九日曉迄ニ登京参内ニ而御守衛申候、諸大名并登合御守衛申候諸大名共、家来之者江禁裏を金壹万両被下候事、右凡式拾方計り、家来人数ニ応し配当ニ相成、吾人前金壹兩式朱与永八拾八文八分九厘三毛ツ、頂戴仕候、但シ右御金公辺をも壹万両御足シニ相成、都合式万両ニ而御配当ニ相成候よし、右頂戴之金子并御上を被下候金子を以、緋羅背板陣羽織新調いたす、

十月

一、粟田口、白川口御番所御固被為蒙仰、一番手之御人数ニ而両口共三十日交代ニ而相詰ル、御旗本御人数者御屋鋪へ三十日交代ニ而相詰ル、
十月

一、殿様を猶又思召を以異変之節京都へ相詰候者へ金貳百五拾疋宛被下候事、

十月廿五日

一、白鞆御脇差一腰、料金五兩
別段金貳百疋

右当年御上洛之節御用掛、且京都仕出方上締、格別出精相勤候付被下置候、但右上下召ニ而拝領、京都詰中ニ付相番岡村佐次右衛門相頼ム、

十一月

一、殿様御儀、京都異変之節早速御登京御守衛被為行届候ニ付、従公辺御時服五重御拝領、猶家来之者も褒置候様可被致与之上意候事、右ニ付殿様を御意被下候事、

十一月

一、猶又当年中ニ御上洛被仰出候事、

一、十一月十五日、江戸御本丸炎上、

一、十月十七日京御屋鋪へ相詰、十一月十八日引取、

十一月廿三日

一、鈴木庄蔵悴菊次郎死去之処、母方之甥ニ候得共、七才未滿ニ付今日

一日之遠慮引、書附を以御届申上候、

一、十一月御上洛跡調御用相濟、新廊下片付御広間江出勤す、

十二月三日

一、妻縁之願建願書を以差出し候、文言左之通り、

此度飛鳥井様御内安田宮内娘、神谷佐五郎媒を以私妻ニ貫申度、右

之段御家老中迄宜御執成被仰上可被下候、奉頼存候、以上、

但シ内実ハ前書文久二年ノ八月ノ処ニ委シ、

十二月三日 羽太新司 印〔花押〕

堀江六郎左衛門殿

右之通り前以支配頭江内見ニ入候処、当同役一統江談し之上存寄も無之様ニ而被相戻候ニ付、相番山田徳之助を以表向差出し候処、御預リニ相成候、

十二月五日

一、鈴木庄蔵悴勝次郎死去ニ付、忌三日、服七日相請候段書附を以相届候事、

十二月十一日

一、前日平服召ニ而妻縁願之通り御聞濟ニ相成候、

同日

一來ル十六日乃京御屋敷詰常御供被仰付候而相登ル、

〔文久四年・元治元年〕

文久四甲子年、元治与改

一、正月十八日京都御屋敷乃交代いたし引取、

一、公方様御儀御上洛御軍艦ニ而、亥十二月廿七日江戸表御発艦、正月八日大坂御城江御着城、同十五日京都二条御城江被遊御着候事、
一、右ニ付此方様二条御城御付火消被為蒙 仰、正月十三日乃御人数御

屋鋪江相詰候事、御同役松平甲斐守様、

正月

一、御参内之節供奉御願之通り被為蒙仰候、

正月廿一日

一、二条御城火消、来二月水奉行ニ而相詰候様御内意有之、御請申上候事、

二月朔日

一、前同断、来ル十三日乃相詰候様御達有之相詰、御番頭柿原鐘次郎殿、但シ騎馬数禁裏御所方火消詰同断八騎、

同月五日

一、亀五郎儀鈴木家江今日乃引移ル、但シ本人乃御届相濟、

同九日

一、那次儀御勘定所御用見習ニ罷出候様被仰付候、

同十三日

一、二条御城火之御番詰為交代相登ル、三月十三日交代いたし引取、三月十八日

一、神谷保太郎悴死去候処、七才未滿ニ付一日遠慮引相届ル、

五月朔日

一、尾州様御下り道奉行被仰付相勤ル、但シ草津宿乃石部宿迄、

五月

一、殿様御儀御老中方御連名之御奉書ニ而二条御城江被為召候ニ付、御登城被遊候処、昨秋以来禁裏御守衛并公方様御参内之節、供奉等御勤ニ付、四品ニ被為叙候事、

五月七日

一、公方様京都御発輿、淀乃御乗船大坂御城江御着、同月十七日大坂御発艦ニ而還御之事、右ニ付諸家様共追々御帰国ニも相成候得とも、此方様并御四方共兼而御守衛之廉も有之、暫御居残之事、

五月

一、殿様御儀御暇之御願書御差出シ之処、五月廿六日御暇御頂戴、明廿七日御参内被遊候様被為仰蒙候ニ付、御暇御参内被遊候処、天顔御拜天盃御頂戴、御持古御扇子、御晒布五卷御拝領被遊、六月四日御機嫌能御帰城、

六月下旬

一、長州御親子共昨秋京都異変後被蒙勅勘候二付、今般御赦免之御歎願書御差出二相成、其上御家老国司信濃、益田右衛門之介、福原越後等多人召連登京二而、山崎天王山、嵯峨天龍寺、伏見屋敷等へ陣取二而不容易形勢二付、粟田、白川両口、猶又嚴重二いたし候様被仰出、依之一番手備不残同廿三日出張、両口江相詰候処、猶追々長州勢相増不穩候二付、同廿八日殿様御出張、御旗本勢不残途中陣羽織着用御供仕ル、右御登り之上御参内天機被為伺候而、御屋鋪二御詰被為人候事、右御供二而相のほる、

一、七月上旬嵯峨街道之内太秦御固被為蒙仰候二付、粟田、白川両口御固も有之、人数不足二付御断二相成候処、右両口者少々手薄二而も不苦、右人数之内相廻し候様被仰出、依之一ノ一人人数二而太秦相固、一ノ二御人数二而両口御固二相成ル、然ル処、其後粟田両口者外様へ被仰付、此方様御免二相成、太秦一際嚴重二相固候様被仰出候付、御都合も有之御旗本勢二ノ見ノ内半備丈ケ妙心中太嶺院を下陣二御借入、太秦へ三日宛交代二而相詰候事、右此方も相詰ル、

一、長州陣所方此方様御固所江歎願書持参、何卒御取次二預り度旨○別紙二書認○御同席様御連名之願書^{二〇印入}持参二付、御相談之上御差出二相成ル、

一、右詰中一統江從禁裏暑氣払葉一貼宛被下置頂戴ス、

一、殿様方御祈禱之神酒并為御手当金壹両、其外御菓子等被下候事

一、奥様方御祈禱之御札、下々迄被下候事、

一、七月十九日暁、御所辺異変二付、早朝方殿様禁闕為御守衛被遊御詰不取敢飛鳥井様御殿御拝借二而、御頃合御見合御参内天機御伺被遊候事、右暫御常御殿近所二御詰被為人候処、無程朔平御門御固被為蒙仰候而御退出、右朔平御門近辺者外様二茂御固被成混雜二付、飛

鳥井様御殿内外二而御固二相成候事、

一、右同断二付、太秦詰并妙心寺詰共早朝妙心寺境内二而勢揃、小具足着用二而右裏門一条通りを今出川江通行御所江相詰、御旗本勢与一体二相成、甲冑或者小具足等着用二而御守衛仕ル、

一、右異変之儀者長州御歎願之筋不相叶候二付、人数不残引退候様段々御論も有之候由之処、聞人も無之候二付、七月十九日弥御討拵与相定り、此方様二茂討手被為蒙仰御手配之処、早ク先方探り知候哉、十九日早曉方嵯峨二屯之長州勢逆押二下立売通りを通行、守護職之会津侯御花畑二御仮住居之所江烏丸通りを押寄、蛤御門内外二而双方炮発、会津勢并乾御門御固土薩州勢、彦根勢等合戦有之、并天王山之勢者同曉堺町御門江押寄七同断御固、越前勢并会津勢与戦イ、并新町通り竹屋町二而も同断、将又伏見江出張之長州勢者伏見街道御固、大垣勢并会津勢与合戦有之候、

一、同朝六ツ半時頃河原町一条下ル長州屋鋪出火、右者前日留守居を御所司代江御呼出二而出張之人数、早々引払帰国いたし候様段々御利解有之、聞入無之節者早々打払二相成候段御達有之候処、御歎願之儀御聞濟二相成不申候節者私共方如何様二申論候而も、右人数者帰国難致候間、御聞届被下ず候儀ならば、屋敷へ引取火を掛切腹仕候段申上引取候而、南隣加賀侯御屋敷江ケ様く二付、只今屋鋪江火を掛切腹仕候間、外々江火移り不申様御防可被下様頼置、火を付切腹被致候由二風聞、右二付外へ火移り不申候事、

一、五ツ半時過、鷹司殿御殿内へ長藩忍込込候由二付、大炮焼玉打込、并烏丸通り長者町辺町家も同断二付焼討二相成、双方之火勢強、地風少シ有之、次第二南へ焼行、消防いたし候もの者人も無之、外へ茂疑敷所者鉄炮打込、戦響炮声焼音耳を貫計りなり、昼後追々火勢相募り、西者堀川、東者河原町限り、但シ三条方下寺町限り、南者九

条野迄焼拔、翌々廿一日曉漸火鎮り申候事、焼失境界 東ハ鴨川境町数八百十壹ヶ町、家数貳万六千九百三十四戸、西ハ堀川同南ハ七条野御土居竹田街道口、北ハ中立売迄

右合戦ニ而双方討死千人余有之由、并町人等も大分怪我死人有之、右之騒動不容易事共ニ而、既ニ禁裏御立退之御手都合ニ茂相成候得共、先不被為及其儀候、堂上方二者御裏方并市中者不殘近在且東山辺江立退候事

一、右騒動ニ付当御城も籠城之御手都合ニ相成、御家中十三才以上之男子者不殘得物携御城詰被仰付候、右ニ付老人、女子、子供、病人等者田舎向ニ縁者有之者者、夫々江勝手ニ、今日迄縁家無之もの者田舎ニ寺を御借入ニ相成、夫江勝手ニ立退可申、病人等步行成かたき者ハ願出候ハ、人足御かし被下候事、

但外近国之御城、茂右同様よし、

一、翌廿日、天王山并嵯峨天龍寺へ夫々討手被仰付候、此方様ニ茂嵯峨討手式番手被為蒙仰、一番当方手備ノ一之勢丈ケ出陣ニ相極、九ツ時過押寄ニ相成候処、一番手勢薩州御人数ニ而天龍寺并法輪寺焼討ニ相成候処、最早退散之後ニ而、武器并兵糧等殘し有之、薩州へ分取ニ相成候事、三番手者加州侯江被仰付候、天王山江者会津并彦根勢等へ被仰付、押寄戦有之討拵ニ相成候、

一、殿様二者御守衛ニ付飛鳥井様御殿ニ被為入候処、同廿九日御屋敷迄御引取、御人数御殘し御守衛相勤候様被為蒙仰候ニ付、御屋鋪方交代ニて相詰ル、但し陣屋之儀右御門前へ仮ニ御取建有之候処、其後御所方御建被下候事、外々様御陣所も同断、

一、此度長州人不容易企を発 禁闕を騒し奉^{マカ}脳震懨候ニ付、追討被仰出候事、右ニ付西国、四国、中国之内ニ而大名式拾方計り討手被仰付、尾州侯江惣督被仰付ル、右各芸州広島江参宿之事、但シ右禁闕を奉

騒候儀者、全長州御父子之御企ニ而も無之、先頃方登京之家来之企之趣風説有之、

一、東国ニおゐても昨年来方浮浪ノ士所々江屯いたし、乱妨之儀有之候付、段々御制度も有之候処、猶又当月中旬方江戸近辺之御城下所々乱妨合戦等有之付、追々討手被仰付候而、屯所常州筑波山并大平山等江推寄合戦度々有之、但十月下旬ニ至ル、

一、八月十九日、京都御守衛詰半備計り暫休息被仰付、此方ニも帰膳一、殿様御儀一先御帰国御願ニ相成候処、御聞濟ニ付天機御伺之上、八月廿九日御帰城ニ相成ル、

一、殿様御儀從御所被為召候付、九月五日御上京ニ而御参内被遊候処、天顔御拜天盃御頂戴ニ相成、

一、去七月異変之節防戦有之候、御大名方者從御所御太刀、或者御馬御馬具等拜領有之、

一、九月八日方御守衛詰為交代相詰候様被仰付相登ル、

一、去ル壬戌年諸大名御隠居方并奥方、御子共、御国元へ勝手ニ引取候様被仰出、夫々御引越ニ相成候処、猶又此度奥方丈ケ御常府ニ相成候様被仰出候、

九月

一、毛利大膳父子為征伐御進発被仰出、右ニ付当御城ニ而御泊城ニ被仰出候、

一、九月九日京都御守衛方交代いたし引取、

十月十三日

一、来月中禁裏御所方火ノ御番水奉行ニ而相詰候様御内意有之、御請いたす、同十五日表向被仰付候、

一、右火ノ御番詰九月廿九日朝六ツ半時御殿方押出し、郡山御人数与交代ス、

九月廿九日

一、前日麻上下二而御用召、但シ京詰留守二付名代菊地捨吉へ相頼ム、相番無人二付外組也、

拾石 右之通り御加増被下置候、

十一月三日

一、奥様御儀江戸表へ御発駕被遊候、但尚又此度御普代諸侯之分奥方御在府二被仰出候事、

一、野州辺浮浪之徒、大平山討洩レ千人計り兵器相携中山道ヨリ所々間道を経、上方へ相登候二付、十一月廿七、八日頃信州加納辺迄相登り候付、一番手人数廿八日草津宿迄出張、但シ京都方捕押候様被仰出候事、右二付京都火ノ御番詰最早一日之処二付、御守衛詰之内へ助被仰付候間、只今方引取候様被仰出、廿九日夕俄ニ引取、

一、十二月朔日早暁御触、只今着甲二而罷出候様二付罷出候処、鳥居川村へ只今方相詰候様被仰付、御旗本戦士并番頭組共相詰ル、

同二日

一、殿様二茂鳥井川村迄御出張被遊候事、右御出張中勢多橋往来留二而船渡しニ相成ル、但シ御在京一橋様、水戸様ニも敦賀辺迄御出張、

一、右浮浪之徒越前神保、半原両宿迄登り候処、諸家人数取巻大雪并兵糧等二困り之由ニ候処、弥討払ニ相定候付、降伏いたし加州勢へ不残御預ケニ相成候事、

一、殿様并一番手御人数も前条之次第二付、同廿六日御帰城、

一、長州御追討之儀、追々御手配ニ而惣督尾州侯初諸大名芸州迄出張ニ相成候処、徒党之張本國司、福原、益田三人之首被差出、実檢ニ相成、伏罪二付追討者先御見合ニ相成ル、乍併猶追而被仰出候儀も有之趣被仰出候、

〔元治二年・慶応元年〕

元治二乙丑年 慶応卜改

一、殿様御儀御参府被為蒙仰、正月九日御発駕、但去ル戌年公辺御変革之節参勤之儀も三ヶ年ニ一度百ヶ日宛ニ被仰出候処、此度前々之通りニ被仰出、

正月十一日

一、紫雲院様江戸表へ御発駕、

正月

一、昨年十月御加増頂戴二付、征矢壹年目録ニ而支配頭江相贈ル、

正月

一、萩野流免許為相濟候、

正月十九日

一、麻御上下一巻、金三百疋前同断、付為御褒美被下置候、但シ平服前

日召、

正月

一、京都白川村御固所詰被仰付、晦日方相詰、二月晦日引取

四月

一、東照宮二百五拾年御神忌二付、京都方宮様并堂上方等式拾余方日光山江三月下旬方御下り、右二付大津宿方守山宿迄警固供被仰付候事、御歸り之節も同様之事、

一、四月十三日方不快二付引籠之段御届、同廿五日出勤いたす、

四月

一、毛利大膳父子始御征伐之儀、先般塚原但馬守、御手洗幹一郎を以被仰出候御趣意相背候ハ、急速御進発可被遊旨先達而被仰出候処、未夕右之模様不相分候得共、不容易企有之趣相聞、更ニ悔悟之躰も無之、且從御所被仰進候趣も有之、方々御征伐被遊候旨被仰出候、

依之五月十六日御発足被遊候、右之通り四月十九日江戸表二而被仰出候、

一、四月晦日白川詰被仰付相詰、 閏五月二日交代いたし引取、

閏五月二日

一、御進発之節、御泊城二付御用掛被仰付候、同役名前多人数付略之、

一、公方様御儀、五月十六日江戸表被遊御進発、東海道筋名古屋方美濃路垂井宿中仙道草津宿方東海道御登之事、

一、膳所城御泊、閏五月十三日御日積り之処、御途中御逗留或者御川支等有之、同廿一日二相当り候、

一、膳所城江御泊二被仰出候処、御都合茂有之候二付、此度者御泊城不被遊候旨被仰出候事、

右之通り十九日愛知川宿御泊方被仰出候事、

但シ御先登御老中松平伯耆守様付御普請役方、京都方前以被申越

候二者膳所城江着御之上伯耆守殿方被仰上候儀有之候付、前日方

御越二候間、御宿取置候様并御目付御吉人、奥御祐筆御吉人、同

様京都方申参り有之候、然ル処、十八日御泊城之御日積り候処、

強雨二而野洲川満水御用橋も落流候付、愛知川宿御逗留二相成候

間、兼而延縮も有之候ハ、御知せ申上候様御頼越も有之、旁以

十七日暁早馬を以伯耆守様江申上二相成候処、最早御途中迄御出

之儀二付、膳所御昼休二而、先宿迄御出候様被仰出御越二相成、

御用向被仰上候処、俄二御模様相替り候御様子二而、御急キ一先

御入洛二而御参内之御様子二御座候、右之御次第二付、殿様者御

在府中故、御家老衆方御小休成共被遊候様段々御願被申上候得

共、御急キ之御様子二而御聞届無之、廿一日守山宿御立、渋川村

与次兵衛方俄二御小休、草津宿御昼休、新田行者堂御小休、鳥居

川村鍵屋庄兵衛方御小休、大津宿御役屋鋪御都合二依御止、御本

陣江着御、翌廿二日早朝御立、京都施葉院江御着、夕七ツ時御参内、

翌廿三日暁 御下り、二条御城江御入、翌廿四日朝御立、伏見御

泊、翌廿五日陸路御下り之処、御都合二依伏見方御乗船二而御下坂、

御城江御機嫌能着御之事、

一、六月三日不快二付引籠、同七日出勤、

六月七日

一、大戸川筋通船取調御用掛り被仰付候、

但信楽郷、牧村方黒津村、勢多川落合迄五里余開拓二相成候事、

一、右同断取調并絵図面等出来二付、八月八日京都東御町奉行所江持参

差出シ、十一日引取、

一、右御用向暫御用閑二御座候付、九月七日御届申上、御広間江出番い

たす、

但シ開拓之儀者今一応従公辺御下知有之次第取懸り候事、

一、九月十六日方京都江二宿之御暇相願罷越、吉宿二而用事相済、十七

日夜引取、

一、公方様御儀、九月十六日大坂方御上洛、同月廿七日被遊御下坂候、

一、来十月中白川村御固所詰被仰付、九月廿九日相登り、十月晦日致交

代引取、

一、公方様御儀、十月五日大坂方御上洛、十一月四日被遊御下坂候、但

シ右者撰海江英仏式ヶ国之異船乗込、兵庫開港之儀相願候趣二付、

右御所江為御願被遊御上洛候由之処、兵庫之儀者御許容無之、外式ヶ

所之所改而御聞届二相成候由、右御応接相済、十月中旬退帆、

一、十月廿一日安昌寺二おゐて藩士之内四人切腹被仰付、同日吟味所二

而七人死罪二被行候、家内者不残其夜退散被仰付、外二式家翌日追

放二相成ル、

但シ右者両三年前方正儀之党与歟相唱候もの諸藩二有之、従公

辺御召捕二相成候向茂有之候二付、右同意之もの於御家閏五月中
旬揚り屋人被仰付、御調之上右之通り御裁許二相成ル、

〔後筆カ〕
右十一名勤王ノ士二付、明治元年御一新ノ際藩庁ヨリ字茶白山江
招魂社設立ニテ勸請成ル△〕

十一月廿七日

一、種田流世話人頭取被仰付候、行義作法等万端心を付可申候、

右之通青紙御書付二而被仰付候、

〔後筆カ〕
△尚又明治十四年官祭二相成り同十二月三日当錦村江遷宮、同四

日祭典、

一、来十二月中京都白川村御固所詰被仰付、十一月晦日相登ル、

十二月九日

一、此度御家中拜借金御用掛被仰付候、

但シ御月番方御呼立二付、名代寺西閑五郎罷出被呉候処、青紙御

書附を以被仰付、白川村交代之儀者明後十一日差登候間、其上引

取候様被仰付候趣申参り、則十一日引取、

右拜借被仰付候御趣意者、是迄借財向并諸買掛り等不応対二相成

有之候、日々且借財高利等二而難渋之向、書附を以願出候者江拜

借被仰付候儀二付、右取調御用向付日々御居間書院江相詰ル、相

役御元々、御吟味役、御勘定奉行、御勘定并表方二而吉田五郎左

衛門与兩人也、右是迄町方等二不応対等有之候、日々応対相附以

後右様之儀無之様夫々御達有之、百姓町人二至迄御家中江対無礼

無之様作法正敷いたし候様厳敷御触有之、

但シ拜借被仰付候惣金高貳万兩余、

〔慶応二年〕

慶応二丙寅年

一、此度具足取替申候付、正月七日毛附を以御届申候事、

但シ右者親共之具足与取替、正月十五日相鋸候事、

一、大戸川筋開拓之儀、御聞濟之趣正月六日京都御所司代方御沙汰二相
成候事、

右二付拜借金御用掛方引続相勤候事、

二月七日

一、御纏奉行助役被仰付候、

一、三月中京都火ノ御番二相詰候事、但二月廿九日相登ル、四月朔日引

取、但引取後直二大戸川御用付御番引、

一、大戸川御普請鍬初三月十日、但シ此段京都江御届二相成ル、

一、禁裏御築地乾隅之所御広ケ二付、二月下旬方三月上旬迄地築賑、但

右之御場所是迄有栖川宮様御殿有之候所二而、御築地欠地二相成

有之候所、此度宮様御殿御花畑空地江御所替被仰付、御築地四角二

相成ル、但シ此所ハ御所ノ鬼門隅ニシテ凡壹反計り御扣地ニシテ猿

ノ象^像ヲ御築塀ノ軒ニ置、猿ケ辻卜俗称ス、

一、加茂川荒神口之橋新規二掛ル、二月中旬方砂持賑、

但右者是迄仮橋二而有之候処、西本願寺方寄附なり、

一、昨冬方当春来米価高直、但シ昨冬四斗俵壹俵付代金貳兩余、当三、

四月頃代金三兩計り、金相場昨年金壹兩付百匁計り、当時兩二九拾七、

八匁計り、但シ右米高直之儀者格別凶作与申二而茂無之候得共、世

上不穩候付西国筋方少茂登不申、京坂共払底付而也、四月下旬壹俵

代金三兩貳步壹朱余、御上る御手当之ため御家中之払米不殘御買上

二相成ル、

四月廿七日

一、御纏奉行被仰付候、但白紙御書附、

一、五月下旬米壹俵代金四兩余、銀兩二百貳拾匁余、

一、長州御征伐六月十四日御手始二相成ル、但シ攻口海陸五口、

一、殿様御儀、此度江戸表二而御同席中様被仰召御進発、御供被遊御願候処、六月廿七日御用召之上御供被為蒙仰、長防江御討入二茂相成候間、急速被成御上坂候様被為蒙 仰候、右二付七月五日江戸表御発駕、十四日振二而大坂江被遊御着候旨從江戸御飛脚到着有之、右同断二付大戸川詰之処、一先引払、帰膳

一、殿様二者御川支有之、同月廿一日当地御通行大津宿御泊二相成候様御先触有之、但シ縁心寺二而御小休有之、

一、当年一番手加勢被仰付有之候二付、七月十八日城州橋本御警衛詰被仰付、時宜二依同所大坂江下り、御供被仰付候哉も難計、其心得二罷在候様御達有之、右二付翌十九日橋本へ罷越ス、

一、殿様御儀、大坂表二而京都御警衛一際嚴重二被為蒙仰、御進発御供御免被為蒙仰候付、八月二日大坂表御発船二而御登り、伏見宿御泊り、京都江被為入、夫々御廻勤之上被遊御歸膳候事、橋本御往來共詰之面々御目見被仰付候、

一、八月七日夜大風、但シ西三日前大雨水有之、橋本辺洪水大川水溢レ、町筋一円水深所五尺計り、同所御陣屋大破、

一、八月十七日、詰中御目付役被仰付候、但白紙御書付を以、
奉称昭徳院様
一、公方様御儀於大坂表八月廿日薨御、

一、一橋中納言慶喜公様御儀、上様与奉唱候事、

一、御尊骸九月三日大坂江御軍艦二而江戸表へ還御、

一、上様御儀、九月五日御船二而御上洛、但シ大坂表江、

一、御上洛一条二付御相詰、若州様衆与万端掛合いたし候付、御同所様金五百疋被下候事、但シ此方様も向様衆へ是方前二被下候事、

一、十一月朔日橋本御番所并御陣屋向若州様衆与交代引渡し候而、八幡宿院御番所請取、不残八幡下陣江引移ル、右同断掛合等いたし候二付、

若州様金式百疋被下候事、

一、十一月四日、御目付役無滞相勤候付、金式百疋被下置候、

一、同五日、中野章助与役前交代いたし、帰膳いたす、

一、十一月廿三日、一昨年御加増被下置候御礼申上候事、右二付其後礼銭青銅五百文掛屋切手二而御番頭書役迄納置、同断之節六拾石御黒印頂戴いたす、

一、当秋諸国凶作之処、御領分中二而も高島筋別而凶作二付、銀納二相成、御勘定人以上、高島米被下候分代金二而被下候事、但壹俵代金四兩壹歩式朱与永当年米直段高直之処、別而十二月頃壹俵代金五兩式歩計り、右之外諸品大高直なり、

一、十二月廿三日、中島郡次御用召二而御馬廻組被仰付、同廿七日橋本詰、

一、十二月廿七日、御家中拜借金御用掛出精相勤候付、金式百疋被下置候、
一、十二月、此度御軍立御立替被仰出、右二付散兵隊二而一番手被仰付候、
十二月

一、筋入鉄炮御払願度旨相願候様御達有之、先達而願置候処、此度御渡二相成ル、但し諸道具附、「但シ明治三年上納金夫々御返シ二相成、
銃者都而拜借二相成候、其後銃返上ス、」

一、禁裏崩御、奉称孝明天皇、

右同断二付、長州征伐一先解兵被仰出、追々歸陣二相成候得共、長州之寄兵隊卜唱隊近国江押寄、毎々戦有之、一、三城茂責取候由、但し豊前小倉石州浜田等城焼払、御立退之由、

〔慶応三年〕

慶応三丁卯年

一、此度御家中由緒書御調、一昨丑年被仰出、昨寅年五月中迄ニ差出可申様被仰出候処、諸手繁務ニ付同十月迄御延被仰出、尚又当卯年三月中二昨寅年十二月迄之処相認差出可申様被仰出候、右ニ付取調本紙式通差出入、別冊ニ扣有之、

但シ此度之御調者、御先規方者細密ニ雛形を以被仰出候事、

二月廿一日

一、奥様御附江戸詰被仰付候、支度次第罷下可申候、

右之通被仰付候処、出立之儀十日之内支度出来兼候付、同廿九日三月七日迄御猶予相願候処、御聞届相成候、

二月廿九日

一、弟郡次儀、中島家江今日引移候、右ニ付本人方支配頭江相届候、

一、三月七日、当地出立、東海道罷下候、同役斎藤富弥并下役兩人、且紫雲院様御付下役吉人共同道、

一、右道中無滞江ノ島、鎌倉等江相廻り、日積通り四月十八日着府いたす、従是江戸詰中之一件、翌辰年九月帰膳後録之、但概略之、

三月廿日

一、奥様江御目見被仰付候、同日紫運院様江茂同様被仰付候、

奥様御名初御鈴様、後御銀様、康穰公御奥方、御里羽州庄内酒井侯紫雲院様御義者令徳院様御後室、御里薩州侯

四月

一、奥様方御紋付、御帷子地吉拜領之、御紋丸ニ酢漿草、

但シ右者御納戸払之節初而之者江者、御紋服被下候御例、

三月

一、慶喜公將軍宣下、大坂表ニおゐて相濟、

一、十月十三日、於京地、従公儀此方様江左之御書取を以被仰出候処、右写江戸表ニ而拜見被仰付候、

御封書写 但徳川公

我皇国時運之沿革を觀ルに、昔王綱紐を解と相家權を執、保平之乱政權武門ニ移りてより、我祖宗ニ至り、更ニ寵眷を蒙り式百余年子孫相受我其職を奉すと雖も、政刑当を失ふ不少、今日之形勢ニ至ル茂畢竟薄徳之所致不堪慚懼候、況や当今外国之交際日に盛なるニより、愈朝權一途ニ不出候而者、綱紀難立候間、従来之旧習を改め、政權を朝廷ニ歸、広ク天下之公儀を尽し、聖断を仰き、同心協力共ニ皇国を保護セは、必海外万国と可並立、我国家ニ尽所不過之候、乍去猶見込之儀茂有之候ハ、聊忌諱を不憚可申聞候、

十月

別紙御書取之趣

御奏聞被遊候処、去ル十五日別紙之通従御所被仰出候段、京地ニおゐて被仰出候旨拜見被仰付候、

十月

祖宗以来御委任厚御依頼被為在候得共、方今宇内之形勢を考察シ、建白之旨趣尤ニ被思食候間、被聞食候、尚天下ト共ニ同心尽力を致し、皇国を維持可奉安宸襟御沙汰之事、

十月

大事件外夷一条者尽衆儀、^(議)其外諸大名同被仰出等者、朝廷而役取扱自余之儀者、召之諸侯上京之上御決定可有之、夫迄之処支配地市中取締等者、先是迄之通ニ而追而可及御沙汰候事、

十月

右之通拜見被仰付候事、

十月廿七日

一、在国在邑共非常之手当厚相調置候様、江戸表ニ而被仰出候事、
一、当夏以来方伊勢路辺所々江諸国之神社仏閣之御札家々江天降り候

由二而、其辺男女共踊り歩行、甚賑敷風聞有之候処、初冬之頃近江畿内并当国江茂降り出し、十二月末迄盛二而、或者神仏之小キ御像杯茂降、御牋杯白昼二者空中降下ル処茂相見へ天下り候家々二祭備物杯花美二いたし、踊り来ル人江酒肴杯沢山二出し置、尤質素二いたし候得者罰杯当り候ものも有之由二付、甚花美を尽し昼夜共男女異風之姿二而踊り歩行大賑なり、殊二金銀且雜穀其外種々之品ふり候所茂有之、誠二希代之珍事、狐狸之所為歟、是乱世之前標也、

十二月九日

一、京地俄二騒動二付、一番手御人数并二ノ見共登京、殿様二者十日朝御上京、二条御城江為御伺御登城、御屋鋪へ御下り御逗留、同十三日 公方様大坂へ被為入候付、供奉御願御聞濟、一番手御人数も御召連御下坂、御城江御機嫌伺として御登り、其後御暇被下御帰り候処、直様從御所当分京町奉行代り市中騒立不申様執締被為蒙仰候二付、大坂へ御伺之上御請二相成候、但シ去ル九月山城全国御執締被為蒙仰候、御三方様へ被仰付候、右者、此方様へ龜山侯、笹山侯也、但大坂御逗留三、四日公方様御内実者九日夜御忍御下坂二相成候よし、右騒動之次第薩、土、芸、尾、越五藩二而俄二甲冑着用御所警固長州侯復官二而御登京被仰出、即日二条殿関白殿下并伝奏、儀奏御廃止、念候守護職、御所司代御廃止、板倉侯御老中御免、右御役宅都而即時二御明渡、町奉行同断、右之訳柄不詳、

一、当節諸家共脱藩之士夥シ、

一、江戸市中此節鉄炮相携、三十人或者五十人茂組し候強盜徘徊いたし、所々江乱入甚以不穩候、夫々手当等被仰付候得共、容易二不止、

一、江戸三田薩州侯上屋鋪江賊徒潜伏いたし、十二月廿五日早朝右御屋鋪庄内侯、間部侯外壱方等人数押寄、戦争二相成発炮等甚敷、終二焼打二相成、討取、召捕等五十人余、其余逃去候者数不知、其夜

八ツ時頃火鎮ル、

一、公方様將軍職辞退被遊候付、上様与奉唱候段御触有之、

一、上様方御建白之写御達二相成、左之通り、

臣慶喜不省之身を以從來奉蒙無論之寵恩恐感悚戴之至二不奉堪、乍不及夙夜不安寢食苦心焦慮宇内之形勢ヲ熟察仕、政権一二出テ万国並立之御国威相輝候為広ク天下ノ公儀を尽し不朽之御基本相立度との微衷方祖宗繼承之政権を奉歸、同心協力政律御確定有之度、普ク列藩之見込可相尋趣建言仕、猶將軍職御辞退茂申上候処、召之諸侯上京衆儀相決候迄是迄之通可心得旨御沙汰二付、右参着之上者同心戮力天下ノ公議与論を採、大公至平之御規則相立度奉存候外他念無之、鄙衷不空卜感戴仕、日夕企望罷在候処豈料也、今度臣慶喜江顛末之御沙汰無之而已ならず、詰合之列藩衆儀議々々ニモ無之、俄二一兩藩戎装を以宮闕二立入未曾有之大御变革被仰出候由二而、先帝ヨリ御遺託被為在候、摂政殿下ヲ停職シ、陪日眷之宮堂上方を無故擯斥セラレ遂二先朝譴斥之公卿数名拔擢シ、倍臣之輩猥二玉座近ク徘徊致し、数千年来之朝典を汚シ、其余之御旨意柄兼々被仰出候、御沙汰之趣与者悉ク霄壤相反シ、実以驚愕之至二奉存候、假令聖断ヨリ被為出候儀二候共、可奉忠諫筈、況や当今御幼冲之君二被為在候折柄、右様之次第二立至り候而者、天下ノ乱階万民之塗炭眼前二迫り、兼々献言仕候素願茂不相立、金甌無釁之皇統モ如何被為在候哉二付恐痛臣慶喜目今深憂此事二御座候、殊更外国交際之義者、皇国一体二關係仕候、不容易事件二付前件之如キ聖断を矯候輩一時之所見を以御処置相成候而者、御信儀を被為失、後來皇国之大害ヲ釀シ候儀者必然与別而深憂仕候間、最前真ノ聖意方被仰出候、御沙汰二随ひ天下ノ公論相決候迄者是迄之通取扱罷在候鄙言之趣御聞受被成下、兼而申上候通り公明正大速二天下列藩衆儀議ヲ被為尽、拳正退奸万世不朽

之御規則相立候上者、奉寧^{（震）}震襟下者万民ヲ安シ候様仕度、臣慶喜千萬懇願之至ニ奉存候、此段謹而奏聞仕候、

十二月

別紙

御奏聞狀此度御差出相成候二付而者、思召之程奉感激候面々者人数召連、早々上坂候様可被致候事、

十二月

十二月

一、金五百疋大戸川通船取調毎々出役格別出精相勤候二付被下置候、

〔慶応四年・明治元年〕

慶応四戊辰年 改明治元

一、上様御義此度從御所尾張大納言殿、松平大藏太輔殿を以被成御上洛候様御内論二付、大坂方御登り正月三日京都四塚関門辺迄御先勢被罷越候処、京都方出張之諸藩ト戦争相初、同夕伏見辺ニ而追々烈敷相成、從御所仁和寺宮征討將軍ニ被任錦御旗押立御出陣、同七日頃迄淀、竹田、八幡、山崎、橋本、牧方、森口辺ニ至迄大合戦有之、
一、殿様二者正月四日御所江御留守居を以、膳所城枢要之地ニ付守城仕候段御届二而、昼後御屋鋪御立被遊帰城候事、

一、正月五日、御所方不容易形勢ニ付、早々上京警衛候様御使を以被為蒙 仰候処、御病氣ニ付御断ニ相成候段御達有之、

右之次第二付当御城御固昼夜御厳重并大津江固人数出張有之由、備前、河州、芸州、大村、大洲、加藤、彦根其外追々被相詰候、

正月十二日江戸ニ而御達シ、

一、上様御義御軍艦ニ被為召、今十二日西丸江着御被遊候、此後之動靜二寄、速ニ御上坂被遊候、思召候、右之通向々江早々可被相触候、

但右二付而者正月三日以来御奏聞狀、且御達書等毎々拜見被仰付、略之、

一、正月十日江戸表御老中方方御達シ、当江戸御屋敷御人数異変之節者、助井左衛門尉殿御人数与合併相成候様被仰渡候事、

一、京都ニ而桑名為追討官軍御差向、此方様ニ茂中軍ニ被仰付、一番手人数出張ニ相成候処速ニ降伏二付、御嫡子吉人此方御人数江御預ケニ相成、御城者外ニ御預ニ相成候事、尤御当主者大坂方御供ニ而江戸江御下り外ニ而御謹慎之由、

正月

一、京都方被仰出候御書付写左之通り、

今般朝政御一新之御場合、今十二日御元服之御大礼被為行御仁恤之聖慮を以天下無罪之域ニ被遊度候間、是迄有罪不可容者ト雖朝敵者除之、一切大赦被仰出候、於国々茂不漏様施行可有之候、尤向後弥以賞罪嚴明ニ被遊候付、厚御趣意を体認致シ行届候様可仕旨御沙汰二候事、

正月

天朝兼而御沙汰之御趣旨被為在候処、此度浪華之兵伏見表出張叛逆之色相顕候二付、官軍御差向之処、已ニ戦争ニ及、朝敵顯然ニ候、依之速ニ征伐可致旨有栖川宮再度被為蒙勅命、并錦御旗下賜候条、四方之士民普天卒士之大義を弁明し、王事ニ勤勞可致候事、
正月廿八日江戸表ニ而御達

一、上様御儀思召之旨有之、此度御退隱被遊、御相統之儀者紀伊中納言殿江被仰付候様御願可被遊旨御内沙汰ニ候事、

二月初旬江戸表ニ而御達

一、祖宗以来今日ニ至ル迄各抽忠勤候段感謝之至候、然ル処余か不徳不行届方不料^{（ハカラ）}も近日之形勢ニ立至り、近畿、関西ニ知行所有之面々者

自然 朝廷方御沙汰之品茂有之趣二付、関東二罷在候ハ、采地二茂離レ難渋可致誠二以、愍然之至二候、銘々存寄次第采地江罷越、朝命遵奉士民安堵相成候様所置可致候、左候ハ、朝廷江対し恭順之旨意も相立、人民茂干戈之禍二昇らず、尊王之素志二相叶候間、聊無懸念銘々之采地江可罷越候、尤采邑御引揚相成候者共者如何様共扶助致し可遣候間、可得其意旨御沙汰之事、

二月

二月十三日江戸二而御達

一、上様御義上野江被為人、御謹慎被遊候而、只管恭順之御沙汰御待被遊候間、若京都方官軍御差向有之候共、御老人二御引請被遊候儀二付、必粗忽之挙動無之様急度御慎下之通急度相心得可申事、右二付大坂方御供之諸侯不残夫々江帰国御謹慎、

一、同断二付、官軍御差向之儀御融予御願二相成候事、

右御奏聞状拜見被仰付、略之、

正月京都二而被仰出、二月十八日江戸二而拜見被仰付候御達書略之、

一、関東 御親征被仰出、御先勢二月十三日出立之趣、

一、此節江戸表二而中外新聞、或ハ内外新聞杯卜相唱、其外二茂同類有之、諸国之形勢且諸手方報告有之儀、并夷国之事条迄活判^禮二而綴之、小冊二追々仕立、是をひさぐ大ニ流行、其後勅許無之類者御差止相成候事、

太政官日誌京都二而御広メ、其外新聞集茂流行、

一、殿様御儀、從御所被為召、三月六日御衣冠二而御参内被遊候処、於御学問所主上出御之上勅書御読聞セ、其後於小御所酒饌御頂戴有之、

勅書

朕夙天位ヲ紹、今日天下一新之運ニ膺、文武一途新裁ヲ以、万機を断決ス、国位之立不立、蒼生之安不安ハ朕力天職ヲ尽不尽ニ有レハ、

日夜不安寢食甚心志ヲ勞ス、朕不肖雖 列聖之余業 先帝之遺意ヲ継述シ、内ハ列藩万姓之撫安シ、外ハ国威ヲ海外ニ耀サン事ヲ欲ス、然ルニ徳川慶喜不軌ヲ謀リ、天下遂ニ及騷擾ニ、万民塗炭ニ陥トス故、朕不得止断然親征之議ヲ決セリ、尚已布造セシ通リ外国交際モ有之上者、将来之所置尤重大ニ付、天下ノ為ニ於テハ、形勢ニヨリ万里ノ波濤ヲ凌、身ヲ以て艱苦ニ当リ、国威ヲ海外ニ及シ、祖宗 先帝之靈ニ対ント欲ス、汝列藩朕力不逮ヲ佐ケ同心協力、各其分ヲ尽シ、為国家努力セヨ、

一、右之外御宸翰ノ写并御誓文ノ写有之、奥ニ記ス、

一、官軍追々江戸近江相迫候付、市中騒立老人、小供等夫々江立退候事、右二付奥様、紫雲院様二茂三月八日先ツ本所御下屋鋪江御立退被遊候二付、御供二而引越ス、

三月

一、此度軍裝左之通被仰出候、但諸藩一統左之姿ニ相成候事、御中小姓以上紋付、筒袖羽織、并胴服共黒紺地之内羅紗服連絹綿勝手次第、袴ハ小袴、半袴、細袴之内相用可申事、向後平日軍裝着用不苦候事、御徒以下同断次第有之、

三月

一、奥様紫雲院様共急速御国許江御登被遊候様被仰進候、右為御迎御家老代、御中老四月三日参着、但御普代之向都而断断、

三月

一、此度朝廷方御一新ニ被仰出候付、此方様二茂同様被仰出候而、御政事向御改ニ相成候廉々茂有之、右同断二付而者、御所方御沙汰二依、諸藩江高二応し徴士、雇士等被仰付、此方様方も御差出し有之、京都二而夫々御役目被仰付候事、

一、天子三月廿一日御登輦八幡宮御拜、夫方大坂江被為人、閏四月八日

還御

三月廿七日

一、奥様御在所江御引移二付御用掛被仰付候、

一、四月十一日江戸御城官軍江御引渡二相成ル、

一、上様是迄上野二御謹慎之処、四月十一日方水戸表へ御発途二相成ル、

一、四月十四日有栖川帥宮様始堂上方御入城二相成ル、

四月廿三日

一、奥様此度御在所江御引移二付、御供被仰付候、御同所様四月廿三日

御上屋鋪江御歸り二付、御供二而引取、

御宸翰之写 但前勅書之先キ

朕幼弱を以猝ニ大統を紹ギ、尔来何を以万国ニ对立シ、列祖ニ事へ奉らんやと朝夕恐懼ニ堪ざる也、竊に考るに中葉朝政衰て、武家権を専らにし、表ハ朝廷を推尊シ、実ハ敬して是を遠け、億兆之父母として絶て赤子之情を知る事能ざる様ニ計りなし、遂ニ億兆之君たるも唯名のミに成り果、其レか為に今日朝廷の尊重者古へ二倍せしが如クニて、朝威ハ倍衰へ、上下相離るゝ事霄壤の如シ、かゝる形勢にて何を以て天下ニ君臨せんや、今般朝政一新の時ニ膺り、天下億兆一人も其処を得ざる時は、皆朕か罪なれハ、今日之事朕自ら身骨を勞し、心志を苦め艱難の先ニ立ち、古へ列祖の尽させ給ひし蹤を履み、治蹟を勤てこそ、始て天職を奉して億兆之君たる所ニ背かざるへし、往昔列祖万機を親らし、不臣のものあれ者、自ら將として是を征し玉ひ、朝廷の政総て簡易にして如此尊重ならざる故、君臣相親しミて上下相愛し、徳沢天下ニ洽く、国威海外に輝きしなり、然ルニ近来宇内大ニ開ケ、各国四方ニ相雄飛するの時ニ当り、独り我邦のミ世界之形成ニうとく、旧習を固守し一新の效を計らず、朕徒に九重の中ニ安居し、一日の安きを偷ミ、百年の憂を忘るゝ時者、

遂ニ各国の凌侮を受け、上ハ列聖を辱め奉り、下ハ億兆を苦めん事を恐る故に、朕こに百官諸侯と広く相誓ひ、列祖の御偉業を継述し、一身艱難辛苦を問す、親ら四方を経営し、汝億兆を安撫し、遂に八万里の波濤を拓開し、国威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置ん事を欲す、汝億兆旧来の陋習ニ慣れ、尊重のミを朝廷の事となし、神州之危急をしらず、朕一たひ足を挙げば、非常ニ驚き種々の疑惑を生し、万口紛紜として、朕か志をなさざらしむる、時には朕をして君たる道を失はしむるのミならず、従て列祖の天下を失はしむるや、汝億兆能々朕か志を躰忍し相率て、私見を去り公義を採り、朕か業を助け、神州を保全シ、列聖の神靈を慰之奉らしめば、生前の幸甚ならん、

三月

御誓文之写

- 一、広ク会儀を興し、万機公論ニ決スヘシ、
 - 一、上下心を一にして盛ニ經倫を行ふヘシ、
 - 一、官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まさらしめんことを要す、
 - 一、旧来之陋習を破り、天地の公道ニ基くヘシ、
 - 一、知識ヲ世界に求め、大ニ皇基を振起すヘシ、
 - 一、我国未曾有之變革を為んとし、
- 朕、躬を以て衆ニ先んし、天地神明ニ誓ひ、大ニ斯国是を定め、万民保全の道を立んとす、衆も又此旨趣に基き協心努力せよ、
- 慶応四戊辰年三月 御諱
- 勅意宏遠誠ニ以て感銘ニ不堪、今日之急務永世之基礎、此他ニ出へからず、臣等謹而叡旨ヲ奉戴し、死を誓ひ、黽勉従事冀くは、以て宸襟を安し奉らん

慶応四戊辰三月

總裁 名印

公卿 各名印

諸侯

一、当月中旬の常州、野州辺屯集浮浪之徒朝敵二付、討拵連日戦争甚し、異人此度参内被仰付候、

一、閏四月廿九日、於西丸、大総督宮の田安亀之助殿御召御渡御書付写、但御名代出仕候、慶喜伏罪之上者、徳川家名相統之儀祖宗以来之功、勞を被思食、格別之叡慮を以、田安亀之助江被仰付候、

但城地祿高之儀者追而被仰出候事、

右之通被仰渡、其後御高七拾万石、駿府城并駿州一円、但不足之分者奥羽之内二而御頂戴二相成ル、八月九日江戸御立二而駿府へ御移り二相成ル、

一、奥様御儀閏四月八日以来毎々御発駕御日限被仰出候得共御病氣不被遊御勝道々御延引二相成ル、

一、上野山内江先頃の御靈屋守衛与唱、元徳川家諸隊之士多分屯集有之、大総督宮の毎々御沙汰之次第も有之候得共、不相用候二付、五月十五日御討攘被仰出、早朝の炮声相聞へ夕景相濟、山内中堂始諸堂不残焼失、其外寺々并上野廻り之町家多分焼失、凡百五十人計り討し、其余所々江逃落、上野宮様二者前以為御知有之、御立退之由、

一、向後江戸を東京与可相唱旨被仰出、附而者勅書有之、略之、

一、奥羽辺并越後路等之諸侯朝敵之分御追討、其外浮浪之徒所々江屯集等御討攘戦争先月末の甚敷、東京の官軍追々操出（續）シ有之、怪我人茂船等二而毎々歸府有之、

一、東京、閏四月中旬の五月下旬迄霖雨之處、諸国迎も同様之由、江州湖茂洪水、前代未聞之満水五月中旬甚敷、二ノ丸御殿床ノ上迄込揚り、殿様二者瓦浜新御殿江御立退、其外丸ノ内江も過半水揚り往還筋も

甚敷、御家中裏仮往還二相成ル、当年諸国川々大荒未曾有之次第なり、

一、此度御所二而金札御発興（行）、当辰年の十三ヶ年限り通用被仰出候事、去ル五月末の銅錢追々直上ヶ被仰出二相成、銀相場此度御廢止被仰出、一、近年湖水折々満水有之候二付、此度從御所黒津村辺之島々流れ之支り二相成候分御取拵二相成、八月中旬の取懸り相成ル、

一、御即位八月、但此度者復古二被仰出候二付而者、御祭典式都而往古之御振合二相成候由、

一、奥様御儀、八月十日東京御発駕、東海道筋十六泊二而御登り候処、酒匂川二日、富士川三日都合五日御支へ、宮宿二而一日御逗留都合廿二泊二而九月二日御機嫌克被遊御着城候、右二付御供二而着膳いたす、

一、東京南八丁堀御上屋鋪、此度御用二付御上地被仰出、右為御替地呉服橋内元牧野侯跡屋鋪御拜領二相成ル、九月初旬御引渡シ相濟、然ル処常府之向者去ル五、六月頃の追々膳所表へ引越被仰付、追々相登り、未夕残り之分者右御替屋敷并本所下御屋敷等へ引移り二相成ル、右御用地之儀者築地へ異人館取建御免二相成、八丁堀辺者御圍関門裏二相成候由、但シ暫遊所二相成、後廢止、

一、天子東行之儀、先達而被仰出候處、愈九月廿日御出輦大津御泊、当地坂本屋御小休二而五ツ過当町御通輦、勢多并新田等御小休、草津御昼休、石部宿御泊二而御東行、殿様二者草津宿二而天機御伺、石部宿二而天顔御拜、御在産之鞭五拾本御献上二相成、但草津銘産ノ鞭也、翌朝御領分堺二而御見送り被遊候事、東京御着輦十月十三日、同十二月還幸、

一、今般御即位御大礼被為濟、先例之通被為改年号候、就而者是迄吉凶之象兆二随（徴）ひ屢改号有之候得共、自今御一代一号二被定、依之慶応四年可為明治元年旨被仰出候事、

九月廿四日

一、四番組江組替被仰付候、但今般御軍立二依而夫々組替被仰付、席之儀ハ其組々二而先進上座二被仰出、惣列之儀者是迄之通り被仰出候事、十月十三日

一、奥様御附御免、是迄出精相勤候二付、金百疋被下置候、奥様方御手品并金貳百疋被下置候、

同十七日

一、御同所様御道中御供頭兼相勤候付、金貳百疋被下置候、

十月廿三日、但前日方平服召、

一、銃隊嚮遵役二番組上席被仰付候、

同日

一、御纏奉行帰役被仰付候、

十一月九日拜見被仰付候、朝廷方之御沙汰書貳通、

一、天下地方藩臬之三治二歸し、三治一致して御国体可相立、然ルニ藩治之儀者従前各家之立事二随ひ職制区々略同有之候付、今般一般同執之御趣意を以、藩治職制大凡別紙之通可相立旨被仰出候事、行政官

藩治職制

執政

無定員

掌体認

朝政補佐 藩主一藩紀綱政事無不総

参政

無定員

掌参政事一藩庶務無不与聞

公議人

掌奉承

朝命代国論備議員

一、執政、参政者藩主之所任与雖、從來治襲之門閥二不拘、人材登庸務

て公擧を旨とし、其人員点陟等時々大政官二達すへし、

一、執政、参政之外、兵刑、民事及庶務之職制、其藩主之所任と雖、大凡府臬簡易之制二准、一致之理を明二すへし、

但職制一定之上者、是を冊二して大政官二達へし、

一、藩主之側わら從來取置之用人等之職を廢し、別二家知事を置、敢而藩屏之機務二混せしめず、専内家之事を掌しむへし、

一、公議人者執政、参政中の方出すへし、大ニ議事之制を立らるへき二付、

藩々二於而も各其制を立へし、行政官

右二付御家二おゐて被仰出御書付貳通

一、奉体認朝廷御政憲我等家之政治断然改正いたし、旧来之治襲に寄ず人材を擧げシ、専ら藩力を整候間、一同此意を服膺一途ニ精勤可有之候事、

十一月

一、御政治御改正被遊候付、諸役所共今日方御廢止、一同御免被成候、乍併難差置御用向有之節者、手続を以御不都合二不相成様相勤可申候、此旨手先々々江通達可有之候、

但諸番所之儀者是迄之通り相心得可申候、

十一月十三日御達

一、家老、中老、番頭、用人已下之席々総而被廢、左之通席順御改正相成候間、此旨相心得可申候、

一等席

執政

右是迄之家老二候事

二等席

参政

右是迄之中老二准候事

二等席

五等銃士隊長

右是迄之番頭二准候事

五等士頭

公用人

壹、此壹貳付者后改正ノ席順ナリ、

扨從頭

三

大炮隊長

四

三等席

六等銃士隊長

五

會計判事

七

民政判事

八

六等士頭

六

家知事

貳

監察

九

右是迄之大目付以上二候事

七等銃士隊長

四等席

上等銃卒隊長

中等銃卒隊長

下等銃卒隊長

右是迄之四役二准候事

五等士

扨從

右是迄之馬廻り小性二准候事

六等士

右是迄之中小性二准候事、

七等士

右是迄之徒勘定人二准候事、

右以下者追而御治定被仰出候事、

一、平常御用向之儀、自今參政月番二而取扱候様被仰出候、

一、三等席已上者執政二而支配いたし、四等席者參政二而支配いたし候様被仰出候事、

一、右之外諸役改号并役割等被仰出、略之、

十一月十四日

一、五等銃士被仰付候、

同十七日御触

一、上等銃卒并八等組

坊主以下、同心以上

一、中等銃卒并九等組

御持 新組

一、下等銃卒

足輕

一、其以下

諸中間

一、三等之役席御立替被仰出、其役名ノ下二壹、貳付を以記之、

一、奥羽辺茂粗平定二相成候由二付、十一月下旬有栖川帥宮還行二相成

ル、

十一月晦日麻上下召二而

一、上等銃卒分隊司令士被仰付候、

十二月御直書

一、今般政治致改正候得共、我等存寄之儀有之、今一応為人撰執政、

參政其外諸役之一同差免候間、其旨御心得可申候、

十二月

一、諸役之差免候得とも、公用方并側廻り奥付者当分先其俣相勤候

様且又御東行御用掛り、官軍御用掛り、并駅遞掛り等者其俣別而入

念相勤候様可致候事、

但役之難差置用向茂可有之候二付、不都合二不相成候様手續二而

可取計事、

十二月

一、今般政治改正候得共、猶又更二人撰いたし候儀者、衆議を執り

人才を登庸之ため二付、役々之人員を以追々及尋問二候間、銘々私心を去り、誠実を尽し相撰可申候、是我等今日之苦慮を助ケ候儀二候得者、不憚忌諱急度可申聞候、等閑二相心得候もの者不忠之至候、

十二月

執政 五人 六等士以上

参政 三人 同

監察 貳人 同

右之面々人撰申付候間、明朝六ツ半時無遅滞銘々方直ニ我等江可差出、居間書院ニ而請取候間、封書ニ致可申聞候、万一存寄無之者茂同様封書ニ而其俣可申聞候、

一、封書者麁紙たるへく候、

一、忌引罷在候もの、父母之忌三日、其余者無構候間、早々出仕見込可申聞候、

右之趣早急六等士以上江是迄之支配手続を以通達可致候、

十二月

口達之覚

一、人撰之義、懇意之者等申合差出候様之次第有之候ハ、急度可申付候、互ニ宅々江相越候義堅無用ニ候、

十二月

一、被仰出被仰付御沙汰之文字者、行政官ニ限り候旨被仰出候間、此旨一統相心得、右之文字自今相用申聞敷事、

十二月

一、其藩精兵貳百人至急越後表江出張、長州藩与可致交替事、

軍務官

右之通十二月三日被為蒙仰候、但シ外ニ宮津藩、龍野藩同断被仰付候事、

十二月七日夜

一、上等銃卒分隊長被仰付、越後表江出張被仰付候、

右十二月十日出陣被仰出候、

右二付、同九日於御料理之間、七等士以上江 御酌ニ而御酒被下、同十日早朝発途、中仙道を洗馬駅迄、夫方北陸道江向イ道中三十泊之宿割ニ而、巳年正月十日越後国蒲原郡新潟港江着陣、同所他門通り下一ノ町三五屋喜三兵衛方ニ上等卒隊長三人止陣候事、

一、右今般出兵人員凡三百貳拾人余、但シ大隊長羽賀記外四小隊并大砲隊其外役々也、十分者一番隊、上等銃卒者二番隊、中等銃卒者三番隊、下等銃卒者四番隊也、

一、右同断二付、弟鈴木亀五郎并中島郡次も一番隊ニ而出兵ス、

一、着陣後所々探索等有之候処、当節先平穩也、

〔明治二年〕

明治二己巳年二月九日

一、上等銃卒半隊長助被命候、

二月十三日

一、同国魚沼郡小千谷戍兵候様、北陸道軍務方方同国水原表ニ而被達候事、

右二付惣隊十四日新潟発途、同十七日小千谷江着陣、同所本町十一屋仙左衛門方ニ止陣、但シ本營者照專寺也、

一、今般版籍御返上之儀、左之通御願書弁事江被差出候間、此旨一統相心得可申候、大政御復古百事御一新之今日、殊ニ土地人民私有仕居候而者、於名分深奉恐入候、然ル処今般数藩奉返上度旨上表之趣茂承知仕、誠ニ以公正至当之儀与私儀茂本懐之至ニ御座候、何卒版籍奉還奉仰朝裁度有御執奏奉願候、以上、

二月

御名

一、昨廿二日、弁事御役所江重臣御呼出二而、左之通御書付を以被仰渡候、

本多主膳正

今般土地人民版籍奉還可致旨及建言候条、全忠誠之志深叡感被思食候、尚東京御再幸之上、会議を経、公論を被為謁、何分之御沙汰可被為在候得者、版籍之儀一応取調可差出旨被仰出候事、

二月

行政官

右之通膳所表方申来候二付、御達有之、

一、右同断二付、御家中一統面扶持被下候事、

一、二月廿八日、同所澄光院江移陣、但一小隊成ス、

一、三月七日、再御東行被仰出候事、

一、四月廿一日、当隊横町専正寺へ転陣ス、

五月廿七日

一、半隊長助被免候、右二付金三百疋被下候事、

一、式小隊再新潟江戌兵候様軍務方被達候、右二付六月廿一日一番隊

四番隊、小千谷発途二相成ル、

一、六月廿三日、当隊寺町極楽寺江転陣ス、

七月七日

一、同国魚沼郡湯ノ谷最寄羽根川最寄辺不穩候趣二付、兵隊拾人引纏羽根川最寄山田村江出張候様被命罷越ス、同十六日半隊長香河茂手城与交代いたし小千谷江帰陣、

七月十七日

一、弟鈴木亀五郎儀病氣之処、終二七月十五日暁七ツ半時新潟病院寺町長善寺二而死去候段、弟郡次并隊中茂申參ル、右之段大隊長江相届候事、然ル処、出兵中二付忌服構無之、従是膳所表鈴木家始夫々江急便差出ス、

右長善寺二位牌ヲ嘗、永代回向料納置ク、但シ同所二而□善之助之位牌并回向料同断、同小千谷照専寺境内ニおゐて、当藩方石碑ヲ嘗、分骨を納メ、司堂金を納給也、但シ同所ニ外四人同断、

口達之覚

一、殿様御儀、未夕御男子無之不被為在候二付而者、当節柄之儀二付、此度神戸様二而丹後守様御実子恒弥様御儀御血統之儀二茂候間、御養子二可被遊御頼 思召之旨、東京方申参候間、此段一同相心得可申候、

一、六月十八日、於東京弁事殿様御用之儀有之候間、明十九日直垂御着用御参朝被成候様御剪紙御到来二付、則翌日御参朝被遊候処、輔相三条右大臣殿御出座、弁事五条弾正大弼殿方御書付を以、膳所藩知事被為蒙仰候事、

一、新潟之二小隊引払可申様被達候付、七月廿四日小千谷へ着陣、

一、東京兵部省方此般豊浦藩与交替可致旨被仰出候処、豊浦藩着陣迄之処半隊相残り、其余帰国候様、北陸道軍務方被達、依之一番隊四番隊引払被命、八月朔日小千谷発途、北陸道帰陣二相成候、但シ残り外式藩も所々分兵候処同様引払二相成ル、

一、当藩兵隊之内一小隊、同国刈羽郡柏崎港戌兵候様軍務方被達候付、当隊江被命、八月廿八日柏崎江移陣、同所民政局内江屯ス、然ル処此方儀外御用有之、八月廿五日小千谷出立、水原并新潟等江罷越、九月朔日小千谷江引取候処、右之次第二付、通調方兼勤被命、同三日柏崎江移ル、

八月

一、知事様東京方御帰着、瓦浜御屋鋪江被遊御着候事、

八月廿三日

一、右家従

名前

八月

右者御用召二付名代差出候処、右之通り被命候段申参ル、知事公方為月給金拾兩宛被下候事、

此般知事様付被命候、役員御家令壹人、御家扶四人、御家従四人、御賄方四人、其以下略之、右御家従以上者藩士之内ニ而今般御拜借之旨朝廷江御願ニ相成候由、其以下者御譜代ニ而御扶持方等 知事様方被下候事、

御直書

今般於東京御国体御改正之儀辱茂蒙御諮詢候ニ付而者、当藩茂今春来版籍奉還之意味茂有之、御下問之許ニも別段異見茂無之候ニ付、偏ニ慫慂及奉答候処、今度御布告書一同拜見之上致承知居候通リ、御政体大ニ御改正被仰出、我等事不省之身を以新ニ被任知藩事、実以恐悚ニ不堪候、因テハ当月十月を限、従前之政蹟瑣細取調致言上、将来之藩治務メテ有名無実之冗費ヲ省キ、国家を養之道ニ基キ、確實簡易之制度ヲ定メ、別紙職制之通り奉請朝裁トス、就而者一同祖先以来我等一家之為ニ、種々之功勞モ有之候付、相応格祿差遣来候得共、此制及ヒ旧冬来相定候等級都而相廢シ、当今仮ニ申付置候職務一同差免候間、此旨相心得可申候、万一旧習ニ泥ミ私論等相唱候輩有之候而者、所謂 朝命ニ逆候ニ相当候間、心得違無之様各祖先以来一身を忌、我等家之為ニ勤勞セシ忠志を失ワス、推テ 朝廷之御為奮勵可有之簡要卜存候也、

副書

本紙申達候通、一同祖先以来我等一家ノ為種々之勤勞^功不少令満足候、依之相当之及報賞度候得共、方今柄不任心底候処、幸ニ先般不用之器物を売却シ献金相願候処不被為及御沙汰候付、之を以乍聊左之通り末々迄差遣候、

金貳拾兩 従前五等士以上之当主

同拾兩 同五等士以上ノ部屋住、同其身隠居勤御雇

同拾五兩 同六等士当主

同七兩貳步 同六等士之部屋住、同其身隠居勤御雇

同拾兩 同七等士当主

同五兩 同七等士之部屋住、同其身隠居勤御雇

右之以下末々迄被下、略之

八月廿六日

右二付尚又人撰ニ而左之通り被仰^命付候

正六位 従六位 同

大参事 壹人 権大参事 壹人 公儀人 壹人

右六位以上者奏任官、其以下者判任官

小参事 三人 権小参事 三人 公用人 壹人

大監察 貳人

庶務理事 十六人 其余略之

一、知事様之御高、従前之十分ノ一、六千石御頂戴之事、

但現石ニ而貳千五百石余、内千五百石御奉還被成候事、

一、従前之一等席以下七等士以上を士族与相唱、年ニ米三拾俵宛被下、

其以下者卒族与相唱、年ニ拾五俵宛被下候事、右者後慰勞米与唱候事、

但シ役付之者江者月給若干被下候事、

一、木綿御羽織 壹金五百疋

右去丑年御進発之節御用向格別出精相勤候付被下置候、

九月

一、豊浦藩着陣ニ付、貳小隊合併、十一月十四日柏崎発途、北陸道筋越前今庄駅迄、夫ヨリ近江路中河内宿通り、中仙道鳥井元駅江合十九泊ニ而十二月三日着膳ス、何レ茂大書院ニおゐて知事様へ御目見御

懇之御意ヲ蒙り候事、同四日、王旗為返上罷登候様被命、役々并隊卒拾人引連京都軍務官江返上、同五日引取、

一、十二月七日ハ瓦浜御館江出勤いたす、

一、金貳拾五兩

名前

昨冬以来永々越後表江致出張候付、右之通下賜候事、

十二月

膳所藩

〔明治三年〕

明治三庚午年

一、紫雲院様御儀、東京方御引越、正月三日瓦浜へ御着ニ相成ル、

二月

一、梅光院様二百五拾回御忌御相当ニ付、縁心寺ニおゐて御法事御執行有之、依是其御代方御奉公務来候向江御料理被下候事、此方先祖之儀も、其御代ニ御召抱ニ付頂戴いたす、外二三十人計有之、但御先祖御代々御召抱ニ相成ル御家来向、家状一覽と唱候三冊之御記録ニ委シ、

一、知事様御養子神戸様ニ而丹後守様御嫡子恒弥様為御迎、三月廿三日当地出立、御家令田原信五郎、此方并御賄方初田半吾罷越ス、但シ参り懸ケ思召を以、御妾壱人外二女中壱人、伊勢参宮いたし候ニ付付添参り引取懸ケ、津表方相分レ神戸江廻り、神戸表ニ而御惣容様江御目見御居間ニおゐて御料理等被下、恒弥様御迎申、四月八日瓦浜御邸江御着相成ル、

一、膳所城之儀、朝廷江御伺之上御廢ニ相成ル、五月ヨリ追々御取払、御売払ニ相成候事、外諸藩茂追々同様之由、

一、紫雲院様御儀、瓦浜古御庭之方江御新館御出来ニ付、九月十二日御移ニ相成、此方ニも御附廻り候事、但し惣体廻リニ御附申候事、

一、九月十八日夜大風雨、

一、川嶋寛助儀、朝廷民部省江被召、駅通少佑ニ被仰付、東京永詰ニ付先妻之娘お兼儀当分当方へ預り置、其後鈴木庄藏媒を以同分家鈴木庄右衛門方懇望ニ付、同嫡子末次郎妻ニ九月十二日先内分ニ而差遣し候事、右寛助妻子引越候様被申越、閏十月十五日大津出立ニ而被引越候事、但シ寛助儀當時駿州静岡駅江出張ニ候事、

十月

一、藩制猶又御改正、但シ此度庶務理事等之職称相廢、大属少属等ニ其外共相改り候事、但シ役付者以来月給相廢、職務ニ応し、禄賜り候事、

一、此度農工商共皇国一般苗字被免候事、右ニ付藩士之向、卒共、以来

諱相用候様相届候上相改候事、

十一月

一、当藩士族卒農籍江歸入、或者商業志願之向ハ、左之通り為救助下渡候事、

初度

当午年十二月迄出願致候向

三ヶ年無税

山地五反歩

金五十兩

外ニ墾田望之者ハ三反歩迄

式度

来未年六月中迄出願致候ハ、

三ヶ年無税

山地三反歩

金三十兩

外二墾田望ノ者ハ弍反歩迄

三度

来未年十二月迄出願いたし候者

同断

山地弍反歩

金十兩

外二墾田望ノ者ハ壹反歩迄

山税米弍合を以定則トス、墾開地者三ヶ年之内開拓出来候ハ、

同商業志願之向 改之上税御取極、三ヶ年過開拓無之

初度 金百兩 分者、壹反二付八升之税可相納旨後

弍度 同六十兩 二御布告有之、

三度 同三十兩

卒商農志願之向

初度 金五十兩

弍度 同三十兩

三度 同十兩

右期限二相後レ出願致候共、救助一切無之候事、

但シ右出願不致向者、精實取糺之上、品ニ依慰勞扶持引米可申

付候事、

十二月

一、華族元武家之面々東京住居被仰出候事、

右之通り被仰出候得共、知事等御在職之方者妻子御召連、且当分之

処子細も有之御願有之候ハ、即今御引越無之候共不苦候趣、

同

一、諸藩知事公三ヶ年二壹度三ヶ月宛東京詰被仰出候事、

右二付諸藩知事公御割合セ有之、当藩知事公御儀、来正月ヨリ三月

迄之御詰番二御当り、十二月十二日御発駕有之候事、

但シ御相詰弍拾三、四方宛なり、

明治四辛未年

一、私儀方今之御趣意ヲ奉体シ、向後慰勞米奉還、農籍江歸入仕度、此

段奉願候、以上、

膳所藩

庚午

士族

羽太義比 印

十二月十五日

膳所藩

御伝達所

御附紙

御趣意相弁候志願之程神妙之至ニ候
依而願之通被聞届候事

右之通り柳川半切ニ相認、并系紙二同文相認庁掌江差出し候処、同

日御聞届相成候事、但し当時家従在勤中二付、以来迎も都而伺届等

是迄之通り二付、居村等不相認候事、右同断、一藩追々出願有之、

年内中二凡九分余計迄農商江歸入相成候事、

一、私儀、先般農籍歸入之儀願之通御聞届被成下難有仕合奉存候、就而

者御規則之通恩賜金并山地別紙絵図面之通拜戴仕度、此段奉懇願候、

但墾地之儀茂奉願度候得共、未夕目的茂無御座候付、追而奉願候、以上、

元士族

羽——〔印〕

庚午十二月廿五日

膳所藩

御伝達所

願之通下賜候事

印

右願方前同断也、但山地之儀者伊勢落村地先二而、字弁才天山之内五反步被下候事、往還新道之側北面之山也、但シ上ミ三方者他藩支配之場所なり、

右者正月十二日木元権大属を棹入之上請取之、

右之山地立木ノ俣代金百兩ニ伊勢落村江永世払渡し候也、

同村当時庄屋喜右衛門、年寄磯右衛門也、右金百兩之内六拾兩正月

廿八日請取、残金四拾兩者五月廿日請取候事、

右ニ付永世讓渡し之証書相渡し候、文言式枚奥ニ記ス、

十二月上旬

一、中島縁儀も帰農相願候二付而者、山地、墾地共望無之候二付、右代り金五拾兩中嶋江相廻シ、山地相願被下候上者、此方江讓り請候旨示談ニ而、膳所村地先馬ヶ背山ノ詰り西面蔭ヶノ所ニ而、山地墾地合八反步被相願候処、御聞届ニ相成、則翌正月九日権少属吉田五郎左衛門、同望月常之輔兩人を棹入之上、緑立会ニ而請取之、

〔明治四年〕

明治四年辛未年正月

一、熊田与平次儀、旧冬帰農被相願候砌、山地望無之ニ付、右代り金ニ而被下候様被相願候処、則代り金五拾兩被下有之、然ル処此度右五拾兩上納いたし、山地五反步被下候様被願與被下候上者、此方江讓り請候旨示談ニ而、馬ヶ背山之内中嶋縁を讓り請候地、手続之所被願與候処、則五反步被下候付、金五拾兩相廻シ上納相済、右之山地二月五日鈴木権少属、深尾同断を請取、



一、私儀、御規則之山地之儀旧冬奉願候砌、墾開地之儀茂奉願度候得共、即今目的茂無御座候付、追而可奉願旨申上置候、然ル処此度別紙圖御場所ニ而三反步御差支茂無御座候ハ、何卒被下置候様、此懇願候、以上、

辛未正月廿七日

元士族

羽太義比〔印〕

膳所藩

御伝達所

右者伊勢落村地先字日光山之内、宮山ノ左右之所ニ而相願候事、

御付札

御規則之通被下候事

印

右願方都而前同断、

右之墾開地二月九日、植村大属、田中権少属を請取、其後其俣同村江永世地所共金三拾九兩ニ売渡し候也、右之年貢者同村を可相納者也、但シ右宮山ノ西手ニ而拝領いたし、東手并西手之上ニ而少シ残り之分共、三反步隣家鈴木末次郎を願之上拝領ニ付、六反步六拾五兩ニ売払、内六分通り此方之分四分通鈴木入手也、此訳者右之山地万端鈴木ニ論し、世話いたし候訳なり、

二月

一、西京藩邸奉還相成候段御布告有之、但シ祇園前屋舖なり、右者往昔徳川家の本多家江御拝領之御屋舖也、

二月上旬

一、多田翁助、兼而所持之大工町西裏ニ有之候敷地、此度此方江代金四兩三步ニ永世讓り請候也、但し式拾壹歩五厘七毛、年貢高九升三合五夕、免六四なり、右膳所村地先上畑也、畝歩内実者壹畝半余有之、

長サ南北拾壹間余、中南二而凡五間、北二而凡四間半計り有之、

三月

一、馬ヶ脊山之内此方持林壹町三反之内杉百本余代金三拾兩貳步松ガ者ケ之所北手之所四十八兩二桜之馬場亦吉江売払、

一、五月十八日夜大風雨、但シ大坂辺る西猶甚シ、

一、伊勢落村地先字弁財天山之内五反步、此方持林之六分立木之俣同村方へ永世譲り渡し、代金皆済二付永世証書左之通り渡し置ク、

証文 此文体書替呉候様頼二付改渡す、文言略之、

其村地先字弁財天山之内北面之所、五反步此方持林二候処、此度依都合其村方江譲り渡候也、為後証依而如件、

明治四辛未年 栗太郡伊勢落村庄屋

膳所藩

五月 喜右衛門殿

羽義比〔印〕

年寄

磯右衛門殿

六月

一、御隠居様御儀、当年中二東京江御引移被遊候付、御供被命候事、

右者紫雲院様御事、此度御神葬御願済二付、御改名順貞様

一、七月十五日於東京御沙汰、但シ皇国一般今般藩ヲ廃止、県ヲ被置、藩知事職免官、猶追々御沙汰之趣茂有之、

右之趣七月十九日夜御便り着、廿日御達二相成、右二付当知事公江免官御本紙并勅書且御沙汰書等御到来、同弁官茂被廢候事、

勅状之写

朕惟フニ更始之時ニ際シ、内以億兆ヲ保安シ、外以万国ト対峙セント欲セハ、宜名実相副、政令一二歸セシムヘシ、曩ニ諸藩版籍奉還之儀ヲ聴納シ、新ニ知藩事ヲ命、各其職ヲ奉セシム、然ルニ数百年因襲之久キ、或ハ其名アツテ其实挙サル者アリ、何ヲ以テカ億兆ヲ

保安シ万国ト対峙スルヲ得ンヤ、朕深是ヲ慨ス、仍而今更ニ藩ヲ廢

シ県ト為ス、是務テ冗ヲ去、簡ニ就キ、有名無実之弊ヲ除キ、政令多岐之憂ナカラシメントス、汝群臣其レ朕力意ヲ体セヨ、

一、官員并士族、卒共礼式之外脱刀勝手次第之事、

右之趣伺済之段七月十四日東京ガ申来り御達ニ相成候事、但シ外諸藩ニ茂同断有之趣、右二付当知事公ガも家令始同様相心得候様御達有之、

一、朝廷ヨリモ右同断之御布告八月ニ有之、皇国一般ニ候事、

九月

一、伊勢落村地先字日光山之内、北面ノ所ニ而墾開地三反步被下候分、同所ニ而鈴木末次郎江被下候分と一緒、同村へ売渡し、代金皆済ニ付此度永世讓渡証書連名ニ而渡し置ク、

一、御隠居様并奥様共大坂并堺等為御遊覽被為人候付、御供被命候、八月廿四日御出立、九月六日御機嫌克御歸着ニ相成候事、

一、諸藩元知事君不残朝廷ヨリ被為召、来ル九月中ニ東京江着有之候様先達而御沙汰ニ相成、右二付当從四位様九月十三日御発駕、大坂表ガ蒸気船万里丸ニ御乗込、十五日同所御発艦、十八時ニシテ御京着ニ相成候筈、十七日暁大坂御発艦、十九日朝品川江御着相成候事、御沙汰書写、但シ元知事公東京ニ而御頂戴

一、方今宇内開化之時、実用之材ヲ養候事最急務ニ候、殊ニ華族ハ四民之上ニ立、人之標的トモ可相成義ニ付、今般一同 輦轂之下へ被召寄、親ク中外開化ノ進歩ヲ察シ、聞見ヲ広メ知識ヲ研キ、国家ノ御用ニ被為充候 御趣意ニ候条、各奮発勉勵可致事、

辛未十月八日

太政官

右之通於東京被仰出候付、元知事康穰君其俣東京ニ御住居被遊候事、然ル処、御屋敷呉服橋内之儀者、一ト先藩邸と相成、此内ニ暫御仮

住之處、其後御用地ニ相成候付而者、本所柳島之御下屋敷者御不弁利之地ニ付、御上納ニ相成、此度改而本所松井町二丁目元旧幕府御旗本間ナ部氏ノ邸御買入ニ相成、御引移リニ相成候事、其後改而右ノ御邸ヲ朝廷ヨリ賜リ候事

一、皇国一般頭髮之義、以來如何様ニいたし候而も願届ニ不及旨御布告有之、依之東京者不及申、元諸藩共追々前髪を立、或散髪、薙髪、并ザン切等ニ成ルもの多し、

一、御隠居様、奥様并御小兒御房様、御隆様共御帰京、十一月十二日当地御発駕ニ付、為御從送出立、東海道十九日程ニ而十二月朔日本所松井丁御邸江御着ニ相成候事、

但シ右御帰京ニ付而者先般御隠居様ハ康穰様へ御談ノ上、此方并齋藤富弥兩人引越可申哉之辺御内諭有之候処、當時之御時節往々話計見込無之、無抛次第も有之、御家令迄兩人共内談ニ及候処、其後御取消ニ相成リ、改而此方立歸御供被命候事、

引越 岡井正興

御供 羽太義比

御家丁 宮城利光

岩瀨成実

東京ニ而御付人員、左之通り

御家扶 田中有年

岡井正興

御家從 奥海広誉

本多左門伴

御家丁 佐藤権兵衛

十二月

一、皇国一般此度諸県御改正被仰出候事、

近江国二県ヲ被置 大津県 後改 滋賀県

長浜県 後改 坂田県、同年九月御廢シ属

滋賀県ニ

右ニ付元藩之諸県当分之内、其本県之出所ト相成ル、

但シ大藩者格別、当元藩庁翌申年三月初旬滋賀県江引渡シ濟、元政庁メ切ニ相成ル、

〔明治五年〕

明治五年申年

一、東京御用濟ニ付、正月十日出立之儀申上候処、從四位様ハ御白無垢吉ツ并御目錄、外御式方様ハも御目錄等被下、御家從被免候事、

一、正月十日、東京發途、同連宮城、岩岡、西田満貞、東海道筋歸路横浜并箱根七湯等ヲ廻リ、浜松駅ヨリ高瀬船ニ乗り山手新所ト申所へ着、二夕川駅へ出、此間二夕川迄一り計リ、吉田駅改豐橋駅ハ夜船ニ乗込、伊勢大湊江海上廿里余渡海ノ積リニ候処、半渡過ハ風波悪相成、三、四里引戻シ尾州知多郡師崎、尾州ノ南端ニテ豊橋ヨリ十里余、ニ而碇船、猶翌日も同断之次第ニ付此所ハ陸路出立、尾州熱田ハ十六り同大野湊へ九り、大野ニ而一泊、翌日此所ヨリ勢州上へ野へ渡海シ、同月廿三日夜歸膳いたす、

但シ右之船者四季ニ依リ甚難涉ニ付心得可有之事、

一、御家令始当地居残り御雇之向不殘免職之義東京ハ御申越ニ相成、同月廿七日御家令ハ夫々江被達候上、当庁江連名被相届候事、

一、從四位様ハ一昨年緘御熨斗目御給吉ツ、御隠居様ハ昨冬發駕前、御紋付、黒羽ニ重御給吉ツ、奥様ハ葵御紋付御食籠吉ツ頂戴ス、

其外御三方様ハ品々頂戴略之、

一、来国後ノ短刀、長七寸九分在銘、白鞆入折紙拾五枚 代金七兩貳歩、

一、青江吉次ノ刀、長二尺四寸七分、但シ無銘、鍔上ハガイ金無垢、下キ七代金貳拾五兩、

右明治十四年売却ス、

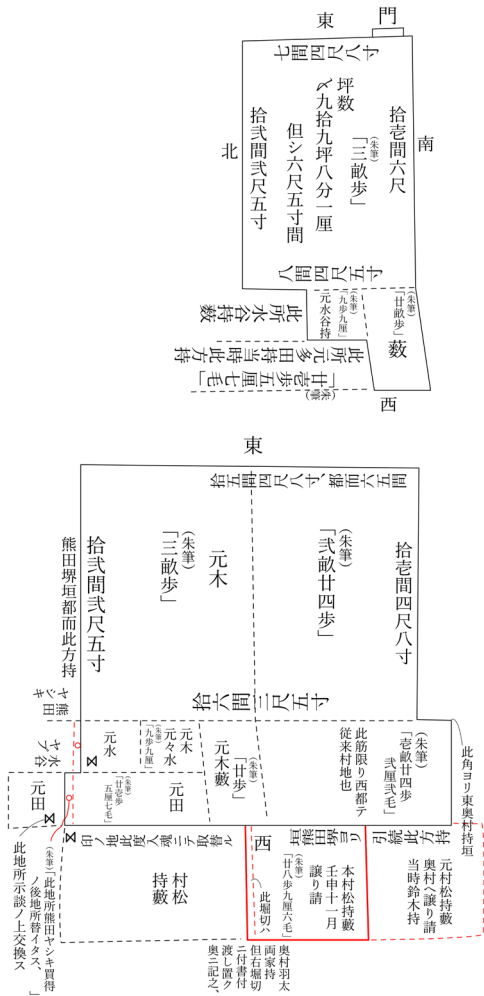
右色々御払物有之候節求置、其外品々略之、

一、此度一般歸田方法御差留被仰出候二付、当元藩士族卒追々腹籍出願も有之、此方二茂二月十七日出願いたす、右出願之もの士卒共合七百五人、元方歸農不致士卒合四拾余人有之、此度腹籍出願不致ものも有之、尤官員ノ向者出願不相成候事、

四月

一、北隣家木元弥太六義、南山田村江兼而歸農二而今般被引越候二付、家屋敷地共譲り請ル、代金貳拾五兩也、其後建物拾貳兩二売却元木元屋敷地図、但シ本図有之

合粗絵図此方地面、但シ本図在別



「此図面ノ間数ハ都而従前ヨリ御作事方ノ帳面ノ通りナリ、但シ六尺五寸間也、

右屋敷地者從來無稅地之處、此度稅地ニ相成候二付、朱書之通畝歩藩庁ノ戸長江達ニ相成候義ニ而ナリ、然ル処此度地券御取調二付右之口々都而屋鋪地ニいたし差出し候也、合壹反八歩、但六厘五毛戸長ニ而除ニ相成ル」

「戸籍番号

滋賀郡第二区粟津村北第二百四十四番

屋敷地番号第貳千貳十七番」

八月

一、腹籍願ノ義御間届無之旨御達ニ相成、然ル処、九月ニ至リ元歸農いたし候節、本資金預ケ置未タ不請取もの者、元籍江御引戻シ被仰付候事、依之此度復籍被仰付候者数名有之、

滋賀

但此方も本資金相預ケ置、未タ不請取其俣大津県江引渡相成候得共、右金子者歸農之節一ト先請取翌年ニ至リ相預ケ候儀二付、本文之分類二者御採用無之、乍併歸田方法中、且本資金即今入用ニ無之向者、藩庁江相預ケ云々之御布告も有之、旁以相預ケ候儀二付、右之次第を以再心復籍之儀致出願候事、

右預ケ置候金子者百円、此方并中嶋緑ノ分五十円宛ノ処、藩庁ノ適宜ヲ以、前藩有之、手元金預リノ口江書入、且此方一名之預リニ相成、此次第柄者旧官員會計掛御取調有之候様再心出願ス、

一、此度金銀貨幣都而御改正、金銀円貨幣ニ相成、早春ヨリ流通并銭九拾六文ニ而壹百文通用御廢止、丁百文ニ相成候事、

但以來金何拾何円何拾何銭何厘ト相称候様公布、尤壹銭者従前之銭百文也、

十月

一、当膳所村、中ノ庄村、別保村三ヶ村合併、粟津村与改称、

右者此度地租改正、地券御取調御改ニ付而者、入組之地所者都而
堺境改正候様御達ニ候処、右三ヶ村境堺甚六ヶ敷、仍而如斯、其後
木ノ下村、西ノ庄村式ヶ村合併、錦村ト改称、

但外国々村々ニおゐても合併、或ハ分村等多分有之、

一、皇国一般村町共区分ニ相成、依之粟津村之儀滋賀郡第貳区也、

詔書写

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ纏度

ニ合ス、故ニ二、三年間必ス閏月ヲ置カザルヲ得ス、置閏ノ前後時ニ

季候ノ早晚アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル、殊ニ中下段ニ掲ル

所ノ如キハ率ね妄誕無稽ニ属シ、人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス、

盖シ太陽曆ハ太陽ノ纏度ニ從テ月ヲ立ツ、日子多ノ異アリト雖トモ

季候早晚ノ變ナク、四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置、七千年ノ後僅ニ一日ノ

差ヲ生スルニ過ギズ、之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不

便モ固リ論ヲ俟タザルナリ、依テ自今旧曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ、天

下永世之ヲ遵行セシメン、百官有司其レ斯旨ヲ体セヨ、

明治五年

壬申十一月九日

一、今般太陰曆ヲ廢シ、太陽曆御頒行相成候ニ付、来ル十二月三日ヲ以

テ、明治六年一月一日ト被定候事

一、一ヶ年三百六十五日、十二ヶ月二分テ、四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事、

一、時刻ノ儀、是迄昼夜長短ニ随ヒ十二時ニ相分チ候処、今後改テ時辰

儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ、子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時二分千午

前幾時ト称シ、午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時二分千午後幾時ト称シ候事、

一、時鐘ノ儀、来ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事、

一、諸祭典等旧曆月日ヲ新曆月日ニ相当シ施行可致事、

一、太陽曆一年三百六十五日、閏年三百六十六日、

十一月

一、居宅西裏手年来有之丸ノ内村松敷地、畝歩村ノ水帳三畝廿六歩、其

実五畝計有之、半分を隣家奥村ト兩人ヲ譲リ請度旨及依頼候処承諾

ニ付則代金七兩貳分ト肴代百疋相贈ル、右半分之内示談ニ而北手此

方持、南手奥村、然ル処開墾いたし候付而者、北手ニ残ル村松敷堺

二堀切無之而者不叶候ニ付、右堀切地兩家持ニ取極メ、左ノ書付奥

村へ送り置ク、

覚

一、居宅裏ニ而從來村松持敷地之内、南手ニ而半分此度兩家へ譲リ請

開墾いたし候ニ付而者、残り村松持敷隣り拙者持ニ相成、右敷堺之

堀切地所東西長サ七間式尺五寸、幅垣ノ根共式尺五寸示談之上兩家

持ニ候間、此後若村松敷開墾有之、堀切地西畑地ニ相成候上ハ、右

地所配当候歟、元敷譲リ請ノ直段壹坪ニ付錢九百三拾四文之割を以

御手前持ノ半分此方へ買請候歟、其時之都合次第ニ取計可申候也、

明治六年二月

羽太

奥村——殿

但其後地租改正実地検査有之、其節此方畝歩ニ相成ル、

〔明治六年〕

明治六年二月

一、北隣熊田与平次屋敷地三畝歩有之所、此度地代金九円ニ而買得ス、

外ニ立木并表通り土塀瓦代として金貳円、合拾壹円也、

右ニ付券状并図面共在別、但右地所二者從來之村地者無之、

二月九日

一、滋賀県庁ヨリ御差紙を以被達儀有之、明十日午前九時罷出候様当分

金穀事務取調申付候事、 羽太新司

但月給八円差遣候事、

明治六年二月十日 滋賀県庁

当時県令松田道之、因州鳥取ノ人

三月廿日

一、左之通御書付を以拜命 羽

当県等外二等出仕申付候事

明治六年 滋賀県庁

三月廿日

出納課申付候事 羽

滋 羽

小分課可為金穀専務事

滋 羽

五月

一、清水町田中常蔵持畑地數共式畝十式歩、此方屋敷裏手南寄りニ有之、地所代金五両壹分ニ而買得ス、券状在別、右番号式千八十三番字膳所畑、但番号、後改正ニ相成ル、

七月三日

一、明四日被達儀有之、午前九時礼服用用し罷出候様当県等外一等出仕申付候事、

等外二等出仕 羽

明治六年七月四日 滋賀県庁

一、当村并中ノ庄村、別保村合併、粟津村ト改称相成ル、

〔明治七年〕

明治七戌年

一、先年皇国人台湾^{ワシ}国工漂着ノ節及殺害候二付、当夏問罪征罰勝利、

一、右之事件ヨリ皇国ト支那国ノ間ニ葛藤ヲ生シ、支那国ヨリ掛合ノ次

第も有之、仍而当秋内務卿大久保利通ヲ全権^理弁利大臣ニ任、外数人

并海陸軍兵等支那国工為応接被差向之処、終ニ為服罪償金五十万イ

ンゲ皇国工差贈ル、

六月一日

一、滋賀県出仕二付而者、昨六年七月の大津中京町南側ニ而町持家従前町会所右借請、吉人移住之処、此度縁家橋本権兵衛持家、同町同側一番屋敷借請、妻仲共引移ル、但母儀者当分之内、弟縁儀眼病之養生として寄宿二付、共二本宅ニ居住、同十八日

一、兼而御趣意之旨も有之ニ付、中京町借宅ニ而本日ヨリ煎茶商店相開候事、

十一月十日

一、弟縁儀、此度中島家へ相歸り候付、母儀当借宅江引移り候事、

右二付而者本宅之儀メ切ニいたし置ク、

十一月十二日

一、今般都合之儀有之、当分之内栗太郎第五区澁村江転籍、式十六番屋敷西田順作方寄留之旨相届候事、右二付送籍状同村戸長西田清左衛門方江相送ル、

八年七月本籍粟津村江復籍イタス、右二付送籍状北粟津村戸長工納、

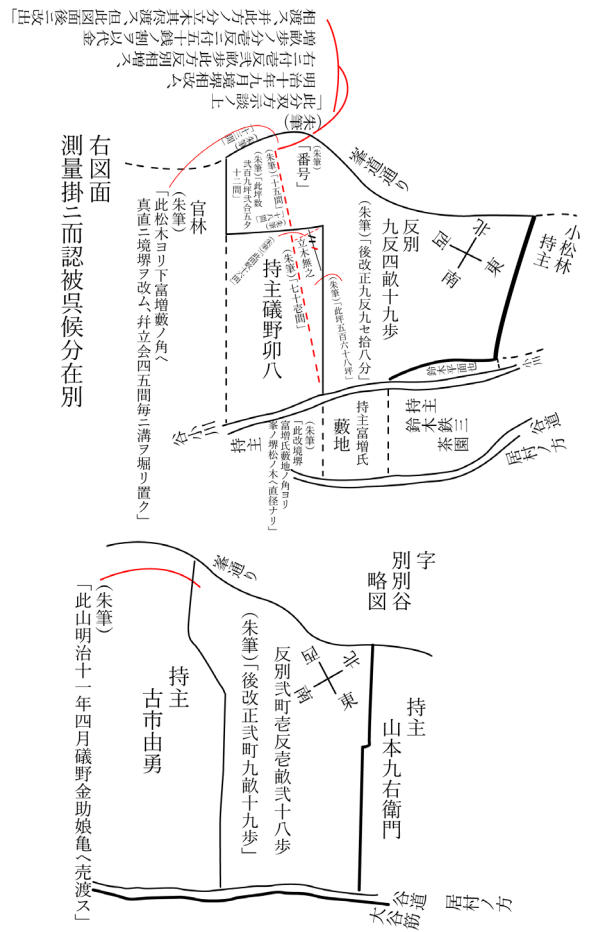
〔明治八年〕

明治八亥年一月

一、此方持山林栗津村地先字馬ヶ脊山之儀、四方官林ニ而往後ニ至り境界煩敷、官ノ保護方も面倒ニ付、可相成者所有地続之所ニ而地所替出願候而者如何哉之辺、地券事務ヨリ内話有之、然ル処へ右地所之儀者甚険路ニ付、幸地所替之儀出願ス、但外四名連名、

右ニ付此方持山測量掛ニ而実地被相量候処、三町六畝拾七步有之、依之、替地可相成ケ所図面を以談有之、則本年一月左之式ケ所ニ而請取、

同地先字中ノ庄谷ニ而壹ヶ所、反別九反四畝拾九步、松木目通り壹尺回り以上、式百貳十九本、此立木代価金拾貳円七拾六錢八厘、同地先字別保谷大谷筋ニ而壹ヶ所、反別貳町壹反壹畝貳十八步、此松木前同断、八百十四本、此立木代価金三拾四円、式口合金四拾八円七拾六錢八厘、二月十日官納ス、但右者此方持林之分立木無之故也、前件出願之儀者、昨七年秋之事ニ而内務省伺、此節御指令相下り候由、



一、太政官并民部省楮幣来ル、五月三十一日限通用停止御取換被仰出候、然ル処、壹円以下之分者来九年五月迄御延期、五円、拾円ノ式種者御引換相成ル、

一、今般実名改称、左之通、但柴田勝久子ノ撰

義笈 フライ 花押 〔花押〕
サ 帰納 グアフ 脛字 ミル

右之通改印之儀、五月四日県庁工届済、

三月十五日、東京九谷坂招魂社内参拜拝観ノ儀、親戚ノ者ニシテ合祀ノ姓名年月国所等申出候得ハ相許由、

一、此度東京招魂社合祀云々之御布告有之候ニ付而者、弟鈴木亀五郎儀出兵先ニ而病死之趣、逐一書取ヲ以、高嶋安次郎 性善之助、同断病死、

中島緑ノ兩名ニ而当県庁江相届ル、尚又九年一月書取可差出旨御沙汰ニ付差出ス、

五月十九日

一、滋賀県出仕之義辞職願差出ス、左之通、

一、私儀不束者ニ御座候処、永々蒙御懇命難有仕合奉存候、然ル処、今般前途家計之都合茂有之候付、甚奉恐入候得共、何卒出仕蒙御免度此段奉願候、以上、

明治八年五月十八日

滋賀県権令籠手田安定殿

羽太——印

明治七年ヨリ県令籠手田安定、肥前平戸ノ人

一、翌廿日礼服用罷出候様依願出仕差免候事、

等外一等出仕 羽太——

明治八年五月廿日 滋賀県庁〔印〕

但式ヶ年以上奉職ニ付金拾円賜候事、

一、此度地租改正被仰出候ニ付而者、此方屋敷并畑地共、戸長方実地検査

二相成、依之改正略絵図、左之通、

戸長役場ヨリ検地左之通、但角ミ指也

第貳千四百七拾貳番

畑地藪共

反別九畝拾六歩

第貳千四百七拾三番

屋敷地

反別四畝貳拾九歩是六四方指

第貳千五百貳拾番

畑地

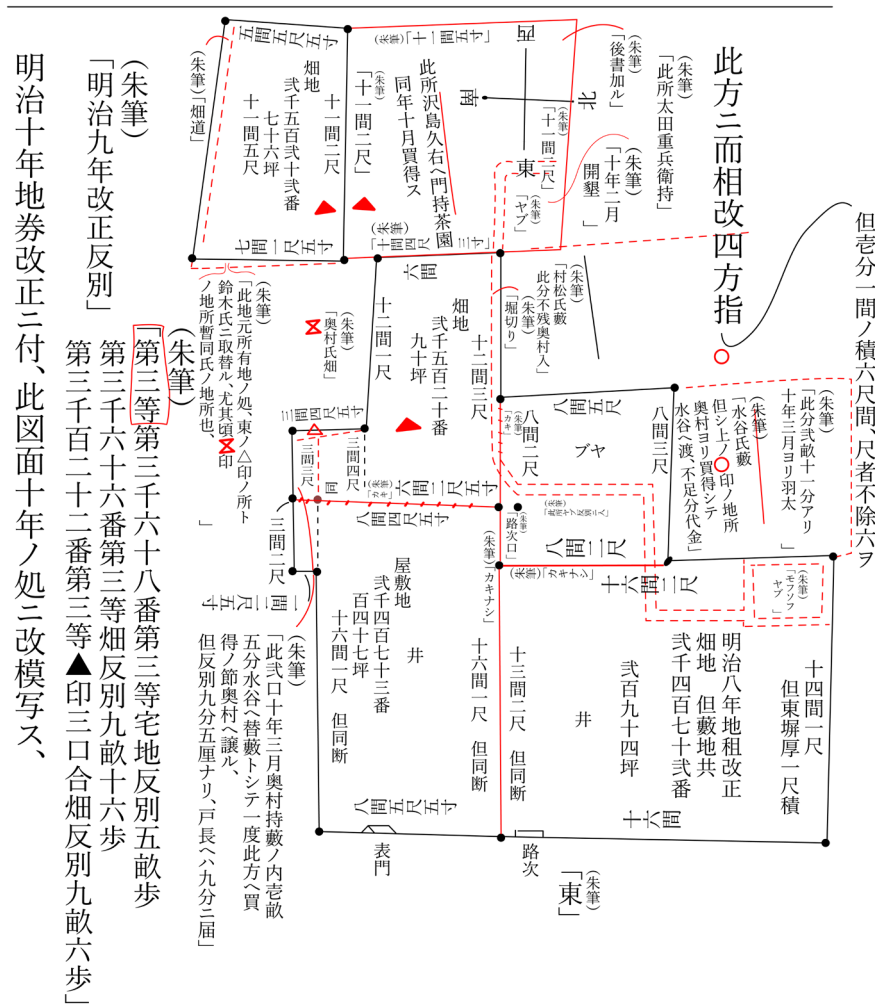
反別貳畝貳拾九歩

第貳千五百貳拾貳番

畑地

反別貳畝六歩

右県庁江届相成候分

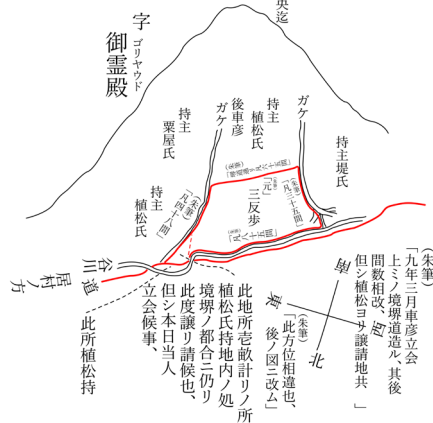


六月

一、家祿奉還之儀詮儀之次第有之、当分差止候旨趣公布ニ相成ル、但右者、士族ノ向家祿奉還いたし候得者、為資本家祿六ヶ年分一時二賜り、地所等望ノ者者、社寺上地ノ分半価ニ而入札御払下ニ相成、右地所之儀者、永世他人江売渡不相成候事、尤家祿奉還届之節、活計之目の相立書取ヲ以申立候事、当時皇国土族員数四十式万余輩有之由、

八月十二日

一、此般粟津村地先御靈殿山ノ内、西手裾、但旧字枯木谷筋ノ奥ナリ、二而齋城庸藏所有地三反歩、但旧藩庁ヨリ墾地代二賜ノ地所、代金式円式拾五銭ヲ以買得候也、尤立木無之、右地所江本年一月替地相成、字馬ヶ脊山江近年植付置処ノ杉松苗植替ノ積、尤右苗植替



ノ後山地返上之儀地券専務江相断置、同年地券御改正ニ付、一般改丈量相成、元三反歩、改七反八畝式拾四歩アリ、但植松ヨリ譲請地共、〔朱筆〕

〔改番号〕

八月

一、先年来方致出願置候士族江復籍之儀、今般御採用相成復籍被仰付候、尤弟中嶋緑義茂同断之儀ニ付、連名ニ而出願候処、同様復籍被仰付候事、尤内務、大蔵両省ノ裁判也、但今般外百七拾式名茂復籍被仰付候、是者帰農之節墾田地三反歩頂戴不致候付、施行央卜見働シ復籍被仰付候事、合百七拾四名ナリ、

十月十三日

一、此方屋敷続西手茶園畑四畝歩余、当時沢島久右衛門所有地、此度代金三拾壹円ニ而此方江買得ス、右二付券状書替之儀裏書連印ニ而戸長役場江差出し談シ置ク、右之地所元中本多持畑也、

一、讃岐国金刀比羅宮江為参詣、十月十六日出途、翌十七日大坂川口ヨリ蒸気船快鷹丸ニ乗組、午後五時出船、翌十八日午前十一時讃州多度津江着船、午後二時着宮、同町泊り、翌十九日丸亀ノ湊ヨリ和船雇切、備前ノ下毛村江午後五時着泊り、翌廿日由加神社江参詣、夫ヨリ同国岡山城下泊り、次第陸路播州等名所旧跡廻歴、同廿五日午後八時帰着、但同連橋本権兵衛、

十月

一、華士族其他有祿ノ者、追々金祿ニ御引直ニ相成旨御布達ニ相成、一、皇国一般諸藩改正祿高御給与ノ処、旧膳所藩改正祿高ノ儀ハ、士族四斗俵三拾俵、則現石拾式石二候処、藩ノ適宜ヲ以、帰農不致者拾式俵ニ減石相成有之、依之、後追々士族江復籍ノ者モ同様拾式俵給与、右ハ改正祿高錯雜イタシ有之ニ付、次第柄再三申立有之候処、結局御詮議可相成旨当県ノ御沙汰ニ相成ル、後御聞届難相成旨御沙汰有之、

〔明治九年〕

明治九年一月

一、朝鮮国不礼ノ儀有之、応接使特命全権弁理大臣陸軍中将兼参議開拓長官特命全権弁理大臣陸軍中将兼参議開拓長官黒田清隆、副使井上馨、海軍式連隊引率出艦、右事済之後、同年八月同国卜修好条規并貿易規則等結約相成、

四月

一、皇国一般帯刀被禁候事、

一、南都東大寺博覧会见物トシテ五月六日発足、八日帰着、同伴武村新太郎、

八月

一、華士族及ヒ平民トモ家禄賞典禄ノ儀、永世一代或ハ年限等ヲ以テ御給与有之候処、其御制限ヲ改メ来明治十年ヨリ別紙御条例之通り、公債証書ヲ以テ一時二下賜候旨御布告ニ相成ル、但別紙略之在別、八月

一、旧膳所藩士族卒歸農商いたし候もの、此度不殘復籍御聞届相成候事、但シ右者は迄追々復籍被仰付候残り之分ニシテ御救助米請取残り有之候儀ニ付、本資米同断之訳ヲ以御引戻被仰付候事、尤卒ノ一代之者ハ御救助米悉皆請取済ニ付、式代以上也、

一、十一月初旬肥後熊本、周防山口外三ヶ所計リ士族騒動、同下旬慎ル(鎮)、十二月常州水戸辺并勢州三重県下百姓騒動、昨年冬肥前佐賀士族騒動、十二月十七日

一、亡父十七回忌相当ニ付、大津寄留宅ニおゐて法事相営ム、但八日相当之処、都合ニ仍リ十七日相勤ム、外晴雲院百回忌相兼ル、別帳ニ委シ、

〔明治一〇年〕

明治十五年

一、皇国一般地租地価ノ百分ノ三ノ処、此般百分ノ式分五厘ニ被仰出候事、左ニ、

詔書写

朕惟フニ、維新日浅ク中外多事国用実ニ費ラレス、而シテ兆民猶疾苦ノ中ニ在リテ、未タ富庶ノ沢ヲ被ラサルヲ愍レミ、曩ニ旧税法ヲ改正シテ地価百分ノ三トナシ、偏重無カラシメントス、今又親ク稼

穡ノ艱難を察シ、深ク休養ノ道ヲ念フ、更ニ税額ヲ減シテ地価百分ノ二分五厘ト為サン、有司宜ク痛ク歳出費用ヲ節減シテ、以テ朕カ意ヲ賛クヘシ、

明治十年一月四日

一、一月下旬京都へ臨幸被為在候事、但シ御船二月十九日西京御駐輦被仰出候事、

右者先帝ノ御年忌御祭典ニ付、后皇宮並大宮御所共是御陸路臨行相成候処、二月初旬ヨリ西国動乱ニ仍テ、御駐輦チツニ相成、

二月十九日

一、鹿児島暴徒擅ニ兵器ヲ携へ、熊本県下へ乱入国憲ヲ不憚叛跡顕然ニ付、征討被仰出候段、一般御布達ニ相成ル、

右ハ旧鹿児島藩士元海陸軍大将西郷隆盛拳魁トシテ、元同断少将桐野某、元同断篠原某、其他壹万余人引率、朝廷へ尋問ノ儀有之趣ニテ発途、肥後国所々ニテ戦争三月中盛也、

官軍甚苦戦有之双方共死傷数千ニ及フ、四月中旬ニ至リ叛徒追々敗走ノ由、桐野深手、討死篠原、但三月中旬頃逆徒式万五人計リノ由官軍熊本籠城、二月中旬ヨリ四月上旬迄八方賊徒圍之、其外三月初旬出羽庄内士族動揺、同頃福岡県下百姓騒動二月石川県下同断四月初旬豊前ノ中津士族動揺、其他旧藩士族ノ内逆徒ニ靡キ候モノ往々有之由、

一、逆徒鎮撫ノ儀ニ付、柳原殿三月中旬勅使トシテ鹿児島へ御下向、但軍艦ニ而、外警固軍艦数艘、右島津侯謹而御請有之、鎮撫方精々尽力成功ノ上上京可仕旨勅答ニ相成候由、

一、主上七月廿八日、京都御発輦、御船ニ而東京へ還幸、后皇宮御同船后太后宮六月陸路還幸、大津御休迄馬車ニ而被為入候事、九月廿八日、御布告

一、去ル廿四日午前第四時官軍鹿兒島賊巢ヲ攻撃シ、西郷隆盛、桐野利秋、村田新八、其外余賊撃取り、降伏人数名、同第八時全平定相成候旨、其筋ヨリ電報有之候条、此旨布達候事、

一、乱世ト云モノハ永ク治世ノ時ヨリ憶測スレハ、一隅乱ヲ起ストキハ一般動揺ノ様ニオモヘトモ、左ニハアラズ、御一新前ヨリ所々数度ノ戦争有之候へども、差構無キ所ハ只物価ノ高下有テ、戦場ノ噂而已喧ク其他相異ルコトナシ、

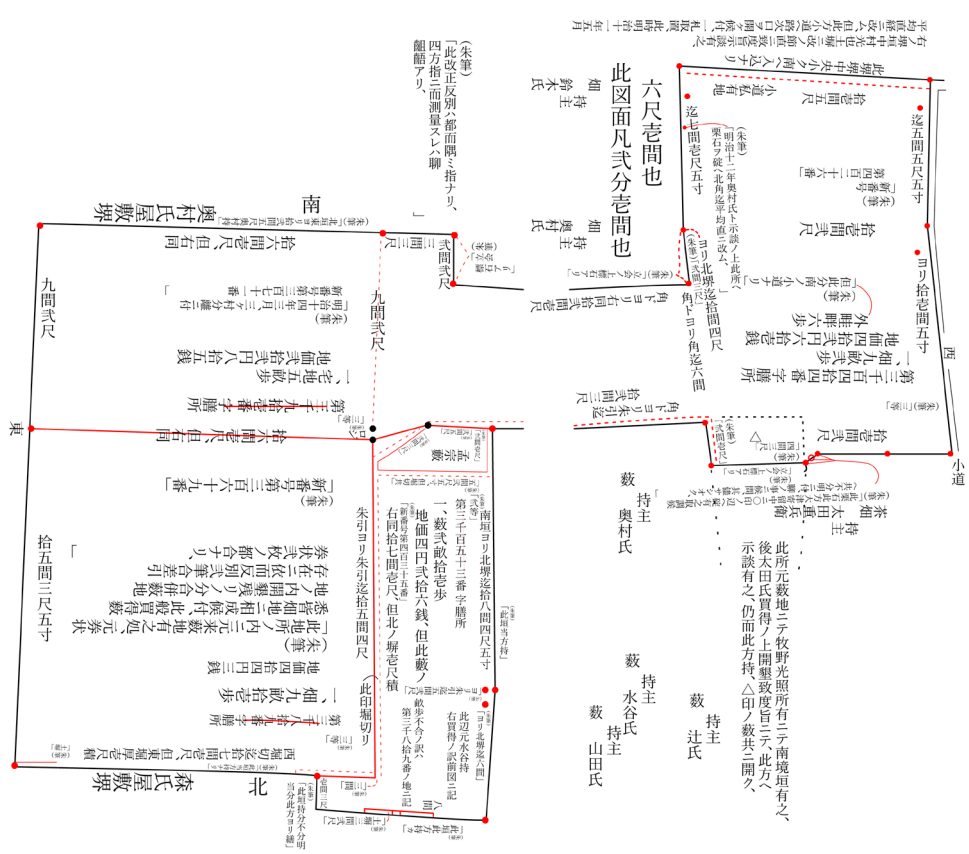
一、近年夏ノ頃雨少ク田地モ旱クコト多シ、是ハ兼而聞及通り山谷兀トキハ雨少ク、夕立モ伝又由誠ナリ、近年諸方ノ山々伐出スコト夥シ、仍而是迄大雨ノ時ハ溢ル、川々モ、近頃水半バニ不過、京都モ北山繁茂ニシテ、加茂川水大雨ノ時溢ル、コト、年々兩三度ツ、アリ、然ルニ禁裏炎上後ハ強雨ノ時モ半ニ不過、是ハ御造營ノ用材其他伐木多キ故ナリ、夏ノ夕立伝ウ為メニ峯通りノ樹木ハ切取ヌ所モ有之由、尤ノコトナリ、

一、十月初旬ヨリ十一月初旬迄虎列刺病流行、大坂辺尤甚シ、当津ニモ少々アリ、伝染病ニシテ腐モノ、悪臭ヨリ起ルコトモ有之由ニ而内外ノ掃除等県ヨリ数度御制度アリ、

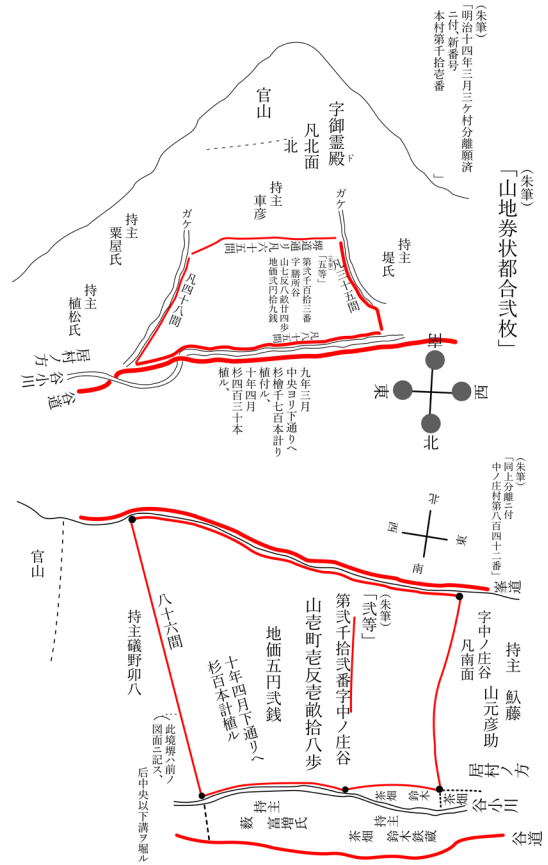
一、近頃諸国ニ人乗車大ニ流行、是ハ明治三年ノ春ノ頃東京駒込辺ノ某發明ニ而官許相成リ、同年冬此方御供ニ而上京ノ砌ハ道中筋ニモ少々計リ有之、東京ニモ年末ニ至リ凡五千計リノ由追々仕込諸国へ送ル景況ナリ、

一、今般地券御改正券状交換御下渡相成候ニ付、屋敷并畑地共図面改正模写ス、

但シ前ノ図面模写ノ后、地所売買等ニ而出入有之分爰ニ改ム、



〔朱筆〕
「山地券状都合式枚」



〔明治二年〕

明治十一年戊寅年

一、九年八月公布ニ相成金禄公債証書御発行ノ儀、昨十年ノ年号ニ而追々御下渡ニ相成、九月十五日拜受ス、

十四ヶ年分金三百拾七円五拾九銭

内 公債証書八枚、此金高三百拾五円年七分利、此利子、金貳拾貳円五銭

外端金貳円五十九銭、正金ニ而拜受

右利子之儀者年々十一月ト翌年五月ト両度ニ御下渡

右ノ公債証書之義ハ五ヶ年間置据、明治十五年ヨリ同廿九年迄貳拾五ヶ年間二年々抽籤法ヲ以悉皆下賜候事、

但シ右金高ノ義者、家禄平均ノ右代金ヲ華士族共高二応シ、年数ニ差等有之、旧膳所藩士之分八十四ヶ年分ノ金高也、

一、京都ヨリ当津迄ノ汽車鉄道築造八月ヨリ手始ニ相成ル、此請負金高八拾五万円ノ由、

一、主上北陸東海ノ両道御巡幸被仰出、九月一日東京御発途、北陸道筋ヲ十月十三日午前当津工御着輦、但行在所ノ義ハ師範学校御仮設、同十五日午后京都へ被為人、同廿日同所御発輦、当津御昼休、草津御泊リニ而東海道筋還幸、

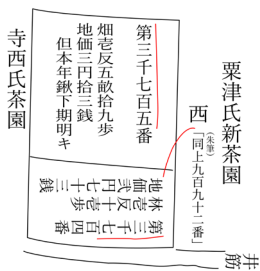
〔明治二年〕

明治十二年卯年二月

〔朱筆〕「明治十四年三月三ヶ村分離ニ付、新番本村第九百九十三番」

一、鈴木嘉則持字桜林茶園、反別壹反五畝拾九歩、但明治七年開墾同所続小松林字同、反別壹反拾壹歩
右貳ヶ所代金貳拾円ニテ買得ス、

小野氏茶園ノ下



但シ此分十三年十二月地券名前書換出願ス

四月八日

一、去明治七年六月ヨリ、大津中京町ニテ橋本氏持家借受寄留罷在候処、此度都合ニ依リ粟津村北本宅江帰住ス、
十二月廿四日

一、姪西田順作長女延栄義、同郡滋賀村園市兵衛妻ニ嫁附ニ付相伴イ参ル、延栄改名阿以、右第十三年十一月長女出産ス、

〔明治三年〕

明治十三年辰年四月五日

一、茶製場壺ヶ所、建坪六坪在来ノ土蔵北手江建築ス、

六月

一、家禄受取不足之分請求、先年来ヨリ内務、大蔵兩省江情願之処、結局此度授産金トシテ当士族一統江金拾貳万円拜借被仰付候事、

右拾貳万円無利足十五ヶ年置据十六ヶ年目ヨリ后十ヶ年間二元金返納之事、

但シ右拜借金割賦方者、元卒ノ貳代以上之者ハ士族ニ被仰付候モ

ノト差等有之共二百余人、前条願之儀者其筋ニヨイテ嚴密取糺

ノ末、十分之条理有之候得共、何分十一年第百貳十三号公布之旨

趣難默止、依之右之通拜借被仰付候事、内拾万円七百余名江配当

ニ相成リ、余貳万円ハ殖利ノ上還償為県庁へ御預、

七月

一、主上三重県外式県御巡幸之上、京都ニ暫御行在、大坂ヨリ汽船ニ而

還御、

八月

一、汽車鉄道京都ヨリ当郡馬場村迄、尚夫ヨリ大津元代官所跡地迄落成ニ付、主上開業式御乗初相成ル、右鉄道大津ヨリ長浜迄汽船ニテ、

同所ヨリ越前敦賀湊迄鉄道着手相成ル、尚又長浜ヨリ美濃路ヲ尾州

名護屋江着手之由、但シ当馬場村停車場ヨリ当地西ノ野ヲ南へ八丁

繩手勢多橋ヨリ上ミ鉄橋ヲ架シ、向イ地筋ヲ長浜迄築造相成趣ニテ

目論見有之、道筋票柱相建ツ、

十一月

一、寺西仲持地字桜林、但此方持畑ノ東続キ也、新茶園畑八畝歩旧茶園畑壺反壺畝歩下ノ粗図之通、此度代金拾六円六拾五錢ニテ買得ス、

但旧畑壺反壺歩ノ分地味モ不宜地価大二高価ニ付、今般林地ニ地目

變換之義不取敢寺西氏名前ニ而相届候処、十二月初旬郡吏検査之上

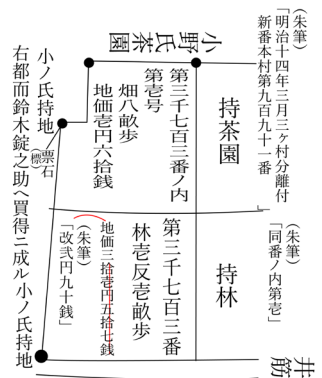
御聞届相成ル、

但シ右式ヶ所壺枚ニテ同番ノ処

十四年月分裂、並名前書換相願候

積リ、「同上ノ訳同十五年ノ処ニ

記ス、」



〔明治一四年〕

明治第十四年巳一月

一、客年六月授産金トシテ拜借被仰付候内、金百円ヲ以此度当地ニ結社

相成候積塵社江入社ス、当社營業ハマツチ製造会社ニ而当県庁ヨリ

保護方被成下候事、但シ株券壺枚金五拾円ニ付、貳枚ヲ持請ル、但

シ会社資本金壺万円、

七月三十日

一、主上北海道江御巡幸、同十月十一日還幸、

一、九月十三日夜当国并近国大風雨、瓦ヲ飛シ諸木ヲ抜ク、但シ戌亥子

ノ風烈シ、

国会開設ノ詔 此時十月十二日

將ニ明治二十三年ヲ期シ議員ヲ召シ国会ヲ開キ、朕ガ初志ヲ成サン

トス、今ニ在廷臣僚ニ命シ、仮スニ時日ヲ以テシ、計画ノ責ニ當ラ

シム、汝チ故ラニ早急ヲ争ヒ事變ヲ煽シ国安ヲ害スル者アラバ、処

スルニ国典ヲ以テセン、右者先年来ヨリ民権国会等ノ与論公議世上

喋々タリ、仍而此般如斯 聖徳ヲ発シ玉フナリ、尤明治初年ノ御誓

文有之故ナリ、

〔明治一五年〕

明治十五年午

- 一、当氏神膳所神社創立ノ昔ハ幾星霜ヲ経ルモノナルヤ、古伝社記等ハ往古兵火ノ災ニ罹リ灰尽シ、是力為メ詳ナラスト雖トモ、延喜式内ノ神社ナル事古老ノ口碑ニ申伝ヘアリテ確定セス、依テ有志者数名確認ヲ索ムルコトニ注意スルコト年アリ、然ルニ不図粟津拾遺集ナル古書耆冊武村氏ノ手ニ入り、此文中ニ就テ神官粟津重義ト共二月廿八日出立ニテ大和国式上郡穴師村ニ赴キ、郷社式内穴師兵主神社神官中氏ニ乞テ社記ヲ拝覽スルニ果シテ明文アリ、依之証書ヲ請求シ、大社三輪神官 氏ノ奥書ヲ受、二月一日帰宅シ、夫ヨリ何レモ尚尽力シ竟ニ同年九月郷社ノ列ニ加ヘラレ、其他万事成就シ、往古ノ社記モ略復歸ス、尚委細社記ニ載録シ有之、

五月

- 一、去ル十三年十一月買得シ置ク本村字桜林ノ茶園元寺西持ノ分、此度地目変換、地価修正済ニ付、名前書換相願、裏書ニテ訂正成ル、左之義ハ明治十四年三月間済相成ル、
- 一、去ル第六年三ヶ村合併、粟津村ト改称ノ処、今般第十四年三月元ノ如ク三ヶ村、分離ノ儀聞届相成ル、依之、旧名ノ通り膳所村ト改、十一月
- 一、此度氏神郷社ニ御昇格ニ付、祝祭十一月三日祭典式、四日神輿渡御、五日能、狂言奉納アリ、
- 一、父ノ式拾三回忌ニ付操上ケ、十一月廿日仏事首尾能相務ムル、
- 一、両三年前ヨリ万年青大ニ流行、蘭ノ類モ流行ニ候処、当秋頃ヨリ益盛ニ相成、万年青上等ノ品者万円ノ価ト相成リ、加ルニ石解^{〔解九〕}モ秋ノ央ヨリ頓ニ盛ニ相成、人情ニ関シ候付、府県庁ヨリ説諭有之、一時ニ相止ム、

〔明治一六年〕

明治第十六年末二月

- 一、此方事次第老年ニ及ヒ未タ嗣子無之二付、此度養嗣子之義鈴木瀧見之甥ノ続キ、媒介^{バイイ}ニ応シ、左之通親戚協議ノ上決定ス、京都府下山城国宇治郡山科郷小野村第四番屋敷元随心院宮御内岡本故右衛門権大尉長男
土族 岡本義房
三男 金三郎
誕生慶応三卯年四月七日
- 但シ右義房義、昨明治十五年隱居長男義和戸主此岡本家ハ弟鈴木故亀五郎ノ為メ祖父ノ鈴木故六郎ノ妹ノ縁附其孫ニシテ、則縁類ナリ、
- 一、二月廿三日、結納差送ル、
- 一、翌廿四日、小野村ヨリ本村江送籍ニ相成ル、
- 一、右金三郎義双方談ノ上、京都儒者大亦俊方江三月五日ヨリ入塾学事修業ス、
- 一、右ニ先タチ糺村西田順作四女寿栄、則此方姪ヲ養女ニ貫請ノ義先年ヨリ内約ス、右スエ儀都合有之第廿年十月鈴木正富ノ妻ニ歸ス、本村字大林
- 一、茶園畑反別式反式畝拾五步持主錦村坂本屋九右衛門所有ノ分、此度買得ス、右代金百三拾円ナリ、維時四月七日、
- 五月五日
- 一、養嗣子金三郎引移初、万端首尾能相整候事、
- 右ニ付、先方ヨリ父岡本義房、母於鶴、兄義和、但シ差掛リ事故有欠席、当方親戚鈴木庄蔵、西田順作、中嶋緑、橋本権兵衛、鈴木瀧見、

但シ仲人兼、鈴木政、右請待ス、饗応人饗庭源十郎、酌人鈴木於銀、鈴木於菊、右夜子十二時無滞相濟、

一、六月三日、金三郎叔母旧命婦岡本保子、義房姉、義和妹於由、右義房氏同伴ニテ石山寺參詣、旁初テ入来アリ、

一、十一月一日、岡本氏へ舅入并金三郎初入兼請待ニ付、親戚庄藏、順作、権兵衛同伴ス、於仲、緑兩人当分所勞ニ付断ル、先方親戚、京九条村河寄吉次郎、京大仏藤島益磨差掛リ事故ニテ不参、旧淀藩小磯代同人弟、京五条橋下清水太郎兵衛、外ニ仲人兼鈴木瀧見、右早朝ヨリ参リ醍醐神能拝覽シ、同夕ヨリ祝儀、夜十二時過万事無滞相濟、何レモ一泊、翌二日午前引取、右之節土産物五重ノ饅頭數三百五十、樽肴親類五軒へ扇子箱、風呂敷、外下女三人、出入方六人金包、其他略之、

當時近キ親戚取調左ニ

一、中嶋緑此方ノ弟、此中嶋家ハ此方ノ祖母ノ里方ナリ、系図ニ委シ、

一、鈴木庄藏妻政此方ノ妹、此鈴木家ハ先代ニモ当方ヨリ嫁ス、但シ系図ニ委シ、尚其先代ニモ当方へ入籍ノ人はレ有ヨシ伝聞ス、

一、神谷保太郎妻久此方ノ妹、当時大坂北区天満河内町式丁目五番地寄留、
一、栗太郎総村西田順作妻房此方ノ妹、但シ西田家ハ旧幕旗本渡那辺家ノ臣、

一、鈴木瀧見ノ養父故亀五郎此方ノ弟、

一、大津中京町橋本権兵衛、是ハ母ノ里、元大津石川町中野長兵衛方ノ重縁ナリ、中野家ハ先代旧藩本多公ノ徒臣ナリ、是故ニ菩提所当地安昌寺ナリ、当時絶家同様ノ姿ナリ、

一、当時大坂府下東成郡西玉造村岡山町三百八十五番地川嶋敬正ハ妻仲ノ兄ニシテ里方ナリ、元大津旧代官所附、但先祖ヨリ同、

一、京都府下山城国宇治郡小野村岡本義房ハ養嗣子金三郎ノ父ナリ、但シ祖先ヨリ旧随心院宮内ナリ、

一、京都新町通り今出川上ル新在家町、安田貞風、此実祖母ナリ老母ニ当ル女ハ此方ノ祖母ノ妹ナリ、則中嶋出也、但祖先ヨリ華族飛鳥井家臣、

一、同町阿津川貞寧、前同断、但シ養父貞順ハ安田貞風ノ父貞固ノ弟ナリ、但同上、

一、同下京第廿五組元塩竈町森伊三郎ハ鈴木庄藏長女娘、他家タケ栄ノ智ナリ、

一、当郡南滋賀村園市兵衛ハ西田順作娘長女延栄ノ智ナリ、改阿以此后ノ分ハ明治廿一年ノ部ニ記載并ニ正訂マツス、

一、京都烏丸通り五条下ル大坂町、川田平兵衛ハ同上三女娘婦起栄ノ智ナリ、

一、此度徴兵令御改正相成趣ニ付、都合ノ儀有之、十二月廿五日嗣子金三郎江戸主ヲ讓ル、

〔明治一七年〕

明治十七年申

一、二月ヨリ金三郎義京都中学校江入學ス、然ル処都合ニ抛リ三月退校出願候処、同月十九日聞届相成ル、

明治十五年四月十七日ノ付落、

一、滋賀郡第七小学区学務委員申付候事、

明治十五年四月十七日

滋賀県 印

羽太新司

監獄御用掛申付候事、

但月俸金七円給与候事、

明治十七年五月九日

滋賀県印

一、本多家御先祖鎮座創立ノ事、有志者ノ發起ニテ許可ヲ經、成就ス、

上棟式 八月三日 祭神 中興初代忠俊公 二代忠次公

三代康俊公 四代俊次公、四公

鎮座式 同 四日 正祭 同五日 祭典 同六日

右御場所ハ瓦ノ浜旧御庭地内築山ノ辺ヲ地行相成ル、

一、清国、仏国、去六月以來葛藤ヲ醸シ候処、終ニ八月廿三日午前一時

ヨリ福州ニオキテ開戦ニ相成ル、

一、去五月監獄御用掛拜命ニ付テハ、学務委員之儀兼務難相成候ニ付、

辞表指出シ候処、左之通、

滋賀郡第七小学区学務委員

羽太

依願職務差免候事、

明治十七年八月廿九日 滋賀県印

一、実母儀去七月下旬ヨリ病痾ニ有之候処、次第二差重リ、九月初旬

ニ至リ危険之場合ニ付、同六日看病引之儀相願、引籠介抱ス、

一、九月九日午前第一時終ニ療養不相叶卒ス、齡七十三歳、真珠院积尼

貞観卜号、但シ右ノ号ハ先年五重被相請候時ノ称号、

右ニ付、忌五十日 九月九日ヨリ十月廿八日マテ、服十三ヶ月 九

月ヨリ第十八年九月マテ

前書之通定式之忌服相受候段届并役場及衛生委員、同断

一、葬式、翌十日午后第三時、唯傳寺ニテ真量院殿ノ向イ墓所江葬ル、

此日殊ニ天气快晴、万事都合能相濟候也、

十月四日

一、事務多端ニ付、除服出勤可致旨達ニ付、五日出勤ス、

一、日明ヶ仏事執行ニ付、翌六日ヨリ五日間賜暇相願、

一、十月八日仏事執行ス、但別帳ニ委シ、

八月

一、滋賀県令籠手田安定任元老院議員、同氏ハ肥前国平戸ノ旧藩士ナリ、

同

一、任滋賀県令勅任中井弘、同氏ハ薩州鹿兒島ノ旧藩士ナリ同十九年ヨ

リ諸県共知事トナル、

一、十二月四日朝鮮国事變ニ付、本邦ノ人民陸軍大尉壱名外商人迄合四

十名死歿、

右ニ付同月下旬外務卿井上馨氏全權大使トシテ朝鮮国江応接出張被

仰付、外属官数名随行ノ処、竟ニ服罪ニテ約定相整、翌十八年一月

謝罪トシテ先邦大使、副使来朝ス、

〔明治一八年〕

明治十八酉年

一、琵琶湖、京都地江疏水ノ件、一月廿八日許可相成ル、不日着手相成ル、

一、昨年十二月朝鮮事變ノ儀ニ付、清国江応接使宮内卿伊藤博文氏江全

權大使被仰付、参議西郷従道氏外数名随行、二月廿八日出艦、同四

月談判相整、

一、七月一日大風雨、琵琶湖洪水、但シ五穀ハ豊作ナリ、

一、昨年来ヨリ世上一般大不景氣ニシテ糊口ニ惑フモノ多シ、

十二月廿二日

一、大政府御改革、諸省ニ大臣ヲ置レ、太政大臣ノ称ヲ廢止、内閣總理

大臣ト改ム、外略ス、

〔明治一九年〕

明治十九戌年三月

一、栗太郎繼村西田順作ノ二女姪春栄、同郡小野村奥村寅吉妻ニ歸ス、同伴ス、

十月七日

一、父真量院二十七回忌、母真珠院三回忌相当ニ付法事執行ス、但シ別冊ニ詳記ス、

〔明治二〇年〕

明治二十亥年三月十三日

一、速入院百五十回忌、令心院百回忌相当ニ付、内仏ニ於テ三部経献讀、別冊ニ詳記、

三月

一、鈴木庄藏ノ二女姪ナミ改メナオ、此度京都府下麩屋町四条下ル西側、俣野定次郎妻ニ歸ス、因テ同伴ス、

七月廿六日

一、鈴木庄藏妻妹マサ死亡ス、定式忌服ヲ受ク、

十月七日

一、西田順作ノ四女姪スエ儀、鈴木庄藏長男文吉正富ノ妻ニ歸ス、但シ此方媒介ス、但シ右スエ儀ハ、此方ノ養女ニ可貴受様、明治十五年頃内約致置候処、此度都合ニ依リ如斯、

一、金三郎儀、本年徴兵適齡ニ付、検査ノ上看護卒ニ被撰、其后当籤ニ相成ニ付、十一月廿八日、鈴木庄藏、同文吉、飯島良藏、鈴木嘉則、奥村六次郎等招待祝宴ス、同十二月一日、大津堂所江入営、第九聯

隊第十中隊第一小隊江編入、

十二月十五日

一、鈴木庄藏正祚死亡ス、

十二月十八日

一、中ノ庄村神職生駒氏邸内ノ鎮座金刀比羅宮ハ、同家祖先ヨリノ鎮

座ニシテ数年来ヨリ社中員モ多数有之候処、死后ハ祀魂ノ儀モ無之、遺憾ノ事ニ付、此方發起トナリ当主生駒秀一當時権大講義初メ、社中一同

協議ノ上、本日崇靈祭ヲ執行ス、崇靈員百十坐、号入崇靈社ト、今後毎年例祭ヲ執行ス、

〔此十二座合祀ス、共二百十坐〕
波多之建ハダ タケオゴ、ロ雄心之命通称義榮波太能信喜ノフヨシ明神義貌マサキヒメ真栄比売命美都長

女波多之若桜比咩之命同室同言祝明神室行コトホキ夜須良岐命同長男右

二柱本日初テ崇靈ス、
波多之國クニサチヒコ幸彦命義程ツグ都具比売命同二女波多能吉葛命義都ヨシツラ同

直照比咩命室直ハナカガ花加具命義貌二男同マホクヌ真秀国女命室国メ右直照比咩命本日初テ崇靈ス、

〔明治二一年〕

明治二十一年子二月

一、字桜林ノ茶園壹反五畝十五歩、及ヒ八畝歩ノ式枚、都合ニ依リ字平尾住伊藤綱次郎江本年ヨリ四ヶ年間、則明治廿四年ノ式番芽摘取迄

貸渡ス、定約書在別、此件都合ニ依リ取消ス、

四月八日
一、西田氏ノ三女姪フキエ事、神谷光啓ノ妻ニ婚姻式、西田氏宅ニテ執行、其席ニ列ス、

但シ右フキエノ先聲京都川田平兵衛儀ハ昨廿年死去、男子壹人アリ、連歸ル、是ハ川田家相続人ナリ、即今右ノ男子ヲ連レ縁付、

亦右神谷光啓氏ハ西田順作氏ノ甥ニシテ同氏ノ実家ノ戸主ナリ、旧水口藩士ナリ、

一、近キ親戚明治十六年調ノ増補及ヒ訂正左之通、但シ別冊横帳ニ親族

ノ拔書アリ、

秦義政

一、西田順作氏ノ二女春栄ノ賀、栗太郡小野村住奥村寅吉氏、

一、鈴木故庄藏氏ノ二女ナミ、后改ナオノ賀西京麩屋町四条下ル西側侯野定次郎氏、但シ侯野家ハ〔以下記載無し〕

一、西田順作氏ノ三女フキエノ賀川田平兵衛死去、后再嫁旧水口藩士神谷光啓氏、順作氏ノ甥ナリ、但シ順作氏ノ実家ナリ当時医師ニシテ京都府下久世郡宇治、

訂正

一、川嶋敬正氏、当時本県神崎郡日吉村住、同郡八日市村外八ヶ村戸長ナリ、

同

一、鈴木正富ノ親庄藏死去ニ付戸主、但シ庄藏ノ三男ナリ、右妻西田順作氏ノ四女スエ、

一、本県庁新築成功ニ付、六月廿五日開庁式

旧 県庁位地三井寺山内円満院宮旧殿

新 同四ノ宮町ノ東元田地

但シ右人民縦覧廿六、七ノ両日許之、大ニ群集雑踏ス、余興種々有之、

七月十五日

一、福島県下耶麻郡磐梯山噴火、被害村落五ヶ村、同戸数四百六十三戸、死亡人四百七十七人、被害惣反別凡壹万三千三十二町歩余、右ハ官報ニ有之、

一、八月卅一日午前一時頃ヨリ当地大風雨、東南ノ風午前四時頃鎮、同第二時頃尤強、瓦ヲ飛ス、但シ大坂地方ハ当地ヨリ甚敷、次テ京地及ヒ北江州ノ方モ当地ヨリ強シ、

一、本年ハ諸方ニ大風水有之、被害人モ多分ニ有之、岐阜県大垣地方、

石川県、徳島県下等、其他兩三県下ニ水害有之、大垣地方殊ニ甚シ、

一、本村之墓所河原三昧地所ノ内、西ノ方ニテ凡三分通計リ鉄道ノ敷地ニ相成ルニ付、新古共墳墓東ノ方江移転相成、八月右移転式大施餓鬼有之、但シ移転料下ル、

但シ右ハ東海道鉄道開設ニテ馬場村停車場ヨリ引続湖東江敷設着手相成ルニ因ル、右ニ付当方ノ古墓式ケ所ノ内西ニ有之分壹墓東ノ方ニ移転ス、委細系図ニ記ス、

〔明治三二年〕

明治三十二年丑

二月十一日宮城ニ於テ

一、憲法発布ノ大典式及ヒ皇室典範御治定法、国会議院法等ノ宣布アリ、但シ憲法七章七十六条、皇室典範十二章六十二条、国会議院法十章九十九条、貴族院令十三条、衆議院議員撰挙法十四章百十一条、會計法十一章三十三条其他数件略之、

右ニ付東京ハ無論、皇国一般祝賀ヲ表スル事盛ナリ、依テ本村外三ヶ村等臨事^時祭ヲ執行ス、

憲法発布勅語

朕国家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ、朕力祖宗ニ承ルノ大権ニ依リ現在及将来ノ臣民ニ対シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス惟フニ我力祖我宗ハ、我力臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚リ、我力帝国ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ、此我力神聖ナル祖宗ノ威徳ト並ニ臣民ノ忠実武勇ニシテ国ヲ愛シ公ニ殉ヒ、以テ此ノ光輝アル国史ノ成跡ヲ胎シタルナリ、朕我臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫ナルヲ回想シ、其朕力意ヲ奉体シ朕力事ヲ奨順シ、相与ニ和衷協同シ益我力帝国ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ、祖宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムル

ノ希望ヲ同シク、此負担ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ、

大日本帝国憲法ノ詔勅

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ万世一系ノ帝位ヲ踐ミ、朕力親愛スル所ノ臣民ナルヲハ即チ朕力祖宗ノ惠撫慈養シ玉ヒシ所ノ臣民ナルヲ念ヒ、其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿徳良能ヲ發達セシメンコトヲ願ヒ、又其翼賛ニ依リ与ニ俱ニ国家ノ進運ヲ扶持センコトヲ望ミ、乃チ明治十四年一月十二日ノ詔命ヲ履踐シ、茲ニ大憲ヲ制定シ朕力率由スル所ヲ示シ、朕力後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲシラシム、国家統治ノ大権ハ朕力之ヲ祖宗ニ承ケ之ヲ子孫ニ伝フル所ナリ、朕及ヒ朕力子孫ハ将来此憲法ノ篇章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ、朕ハ我力臣民ノ權利及ヒ財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保護シ、此憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其享有ヲ完全ナラシムヘキコトヲ宣言ス

帝国議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ、議會開会ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ、将来若此ノ憲法ノ或ル篇章ヲ改定スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラハ、朕及ヒ朕力繼續ノ子孫ハ發議ノ權ヲ執リ、之ヲ會議ニ付シ、議會ハ此憲法ニ定メタル要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外、朕力子孫及臣民ハ敢テ之ヲ紛更試ミルコトヲ得ザルヘシ、朕力在廷ノ大臣ハ朕力為メニ此憲法ヲ施行スルノ責ニ任スヘク、朕力現在及ヒ将来ノ臣民ハ此憲法ニ對シ永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ、

御名 御璽

二月廿七日午后八時

一、琵琶湖疏水工事第一隧道、大津口東西ヨリ掘鑿開通連絡ス、長サ廿二町余、

一、今般徴兵令改正、看護卒廢止ニ付、金三郎儀三月卅一日首尾能解隊、

歸郷ス、

四月一日

一、全国市町村自治制施行相成、依之、当所四ヶ村ヲ膳所村ト改稱、

一、四月十六日、東京ヨリ本県下坂田郡長浜マテ汽車開通ス、

一、二月十一日朝、東京ニテ山口県土族西野文太郎ナル者、文部大臣森有礼氏ヲ同官邸ニオキテ刺ス、右ハ大臣先堺伊勢聖廟江參拜ノ際、太神宮へ奉對失敬ノ振舞アリシ故ナリト云フ、

一、七月一日ヨリ京都、東京間鐵道竣成開通ス、但シ当国坂田郡米原駅ヨリ東ハ六月一日ヨリ開通セリ、

一、鈴木正富儀東京郵便局在勤被命、七月七日赴任ノ途ニ就、但同日午后八時五十二分馬場停車場ヨリ乗車、名古屋一泊、翌八日午后一時四十分新橋着ノ旨申來ル、

一、六月中旬以來降雨多分ニ有之候処、七月中旬ヨリ中旬マテ新潟県下及ヒ西ハ福岡県下、大分県下等大洪水、琵琶湖毛満水ナレトモ陸地へハ揚ラス、

一、七月廿八日、熊本県下大地震、

一、八月十九日午后ヨリ翌廿日マテ東方ノ大風雨アリ、此際和歌山県下大洪水、溺死人数多アリ、同日同上ニテ奈良県下大和国十津川ノ莊連山數百ヶ所崩壞シ噴水甚シク、諸川堤防破壞シ、山間所々ニ於テ小湖水出来、夫力為數十ヶ村ノ人戸流失又ハ崩壞ノ為、埋圧等ニテ溺死人、圧死人等數千人ナリ、慘状ヲ極ム、大坂府下、京都府下毛川々堤防破壞ス、当県下ハ輕キ方ナリ、十津川ノ遭難土民ノ内、万死ヲ通レ産業ヲ失シモノ北海道江移住願ニ依リ、十月中旬ヨリ五回ニ被差送、石狩国住トナル者數千人、政府ヨリ厚御惠ミアリ、諸方人民毛金品ヲ義捐ス、

一、九月十一日午后大風雨、東北ノ方最強、午后十二時西ニテ止、此際

愛知県下尾張、三河両国海辺最甚敷、家屋破壊流失等ニテ死傷人多シ、
岐阜県美濃国モ洪水、

一、九月十八日金三郎儀、滋賀県庁江御雇出仕拜命、出納課随勤、

一、同人此度実印改彫、十月五日夫々届済、

一、十月十八日、大隈外務大臣ヲ外務省門前ニオキテ、福岡県土族来嶋

恒記ナル者爆発弾ヲ以狙撃ス、右ハ外国ニ対シ条約改正ノ事件ニ因

テナリ、但シ大臣命二者別条ナシ、

一、同月廿一日、北海道国大風雨、洪浪アリ、

一、十一月三日、天長節ニ際シ、立皇太子御式御執行アリ、嘉仁親王ト

奉称、御年十歳四月、明治十二年八月三十一日御誕生、

一、神谷保太郎妻妹久サ儀、十一月八日午前七時死亡ス、観心院積貞鏡

ト号、同家当時大阪市居住ニ付、九日下坂ス、十日同地ニオキテ火葬、

当地唯傳寺ニ白骨ヲ葬、但格太郎同墓、

一、十二月十五日関西鉄道会社線路ノ内、栗太郡草津駅ヨリ甲賀郡三雲

村迄竣効ニ付、開業式アリ、右ハ伊勢地方江ノ線路ナリ、

一、明治十三年当旧藩土族江授産金トシテ拝借被仰付候金拾貳万円ノ内、

向フ十五年目ヨリ還償ノ準備トシテ貳万円余県庁ノ主管ト相成有之

分、及ヒ右利子繁殖ノ内ニテ当所私立製糸場ヲ県庁農商課江買上ケ

相成有之候分トモ、此度政府ヨリ旧藩土族へ棄捐ニ相成ニ付、右製

糸場ハ維持ノ法方ヲ立、其余分金貳万円土族一同江拜戴ス、但シ旧

士卒ノ差等アリ、維旨十二月ナリ、

但シ右ハ来廿三年国会開施ニ付テハ、皇国一般御貸下金都テ

五十ヶ年賦一割ノ利子トシ、利引法ヲ以一時上納方被仰出候処、

当藩ノ分ハ特別ノ訳ヲ以、県知事ヨリ願ニ因リ、悉皆棄捐セラレ

候事、

〔明治三年〕

明治廿三年寅

一、大坂、名護屋^古両師団及ヒ海軍ノ大演習、尾、三州地方ニテ三月三十

日ヨリ四月二日マテ四日間御執行、天皇陛下親シク統監在セラル、

一、天皇^{マメ}后皇兩陛下四月五日汽車ニテ京都江行幸啓、五月六日還御、

〔以下、用紙に野線あり〕

四月九日琵琶湖疏水式ニ付、兩陛下京都ヨリ臨御、滋賀県庁江御立

寄相成、

四月

一、民法発布ナル、同法中民事訴訟法廿四年四月一日ヨリ施行、同法中

財産編発布、財産取得編、債権担保編、証拠編等、廿六年一月一日

ヨリ施行、

五月

一、商法発布ナル、廿四年一月一日ヨリ施行、

一、旧藩主康禰君并奥方御同伴、久々御墓參旁御来膳、四月十五日急行

列車御乗込、翌十六日御着、馬杉庄兵衛方ニ御止宿ニ相成、御滞在

中旧藩土ヨリ能楽金剛出勤狂言、及ヒ弓術大的式撃劔会、打毬等本

多神社境内ニオキテ備御覽、御滞在中本多神社祭典四月十八日、膳

所神社同五月三日江操上ケ執行、

一、士族卒及旧郷代官其他、当所元御用相勤候者等江御浜邸ニ於テ酒肴

ヲ賜り候、五月四日午后八時東行汽車ニテ御帰京相成、

一、右ニ付御写真并御土産物特別ニ拜戴ス、

一、本年者大神宮六十一年目ノ御蔭年ニ候処、世上一般參宮人少シ、春

来霖雨且米価高直ニシテ不景氣ノ故ナルヘシ、

一、昨年米穀凶作ノ上、本年麦作宜カラス、米価次第騰貴、四、五月頃

ヨリ石拾円以上ニ相成ル、外国米夥多輸入ス、

五月廿二日

一、本県知事申井弘氏元老院議官二任、后任元老院議官岩崎小二郎氏被命、肥前国大村ノ旧藩士也、

八月

一、東京靖国神社江十一月六日ノ大祭ニ際シ、維新前後殉難者悉皆合祀被仰出、

右ニ付実弟鈴木亀五郎ノ履歴差出候様達有之、依テ左之通、

履歴書

鈴木元清

一、元清、亀五郎ト称ス、嘉永元年十一月六日ヲ以膳所ニ生ル、

一、文久三年禁裏警衛トシテ京地九御門ニ勤番ス、

一、明治元年十二月越後ニ出兵ヲ命セラル、

〔上部ニ記載〕

「此般靖国神社へ合祀之儀、数名共ニ村役場ヨリ申立相成候処、其筋方越後平定ノ后ニ歿シタル者ニ付、合祀ノ詮議不相成トノ事ニ有之、然ルニ同様病死ノ内三名合祀済ノ旨、第廿四年十月ノ官報第貳千四百六十七号ニ記載有之、依テ同断死没ノ高嶋善之助モ未祭ニ付、同人父高嶋教久氏ト共ニ廿五年十一月願書、履歴書相添、再差出ス、但シ爰ニ有之履歴書ハ相違ノ廉々有之候付、改メ差出ス、后廿六年十一月合祀被仰出、尚奥ニ記ス、」

殉難事項

明治元年会津征討ノ令アリ故ヲ以テ越後国新潟ニ出兵シ、同二年七月營中ニ歿ス、年二十、馬廻役タリ、

右之通ニ候也、

親族

明治廿三年八月

滋賀郡膳所村大字膳所

羽太新司 印

右者相続人鈴木瀧見ヨリ可差出候処、在東京中ニ付代理ス、

但シ履歴之儀右ノ外粟田、白川両口警固其他式ニケ条有之候処、右之通役場ヨリ本紙被相回候付調印ス、

九月

一、明治十三年授産金拝借之砌、協議結社ノ積塵社燐寸製造県庁ノ保護モ有之候得共、何分一統不馴ノ業ニシテ終ニ失敗、此度解社ス、

一、帝国議會開院式十一月廿九日御執行相成ル、引続會議有之、開院式廿四年三月七日、

〔明治廿四年〕

明治廿四年卯

一、一月廿日午前一時、帝国議事堂衆議院ヨリ出火シ貴族院共焼失ス、原因ハ電灯機ノ由、

一、本村字桜林所有地ノ内、兩三年前地押検査ノ際、畑地起返リト相成、第九百九拾一番ノ内、第貳畑地五畝九歩ノ地、元ノ林地ニ地目変換ノ儀、昨廿三年春出願候処、許可相成ル、但シ今般規則改正ニ相成リ、第一類ヨリ第二類ニ変換ハ、元地価五ヶ年据置六ヶ年目、則来ル廿八年ニ至リ林地価ニ改リ候事、右ニ付廿三年度林地税追徴ノ分、今廿四年一月達シ有之、当役場江相納メ、畑地税ハ其后相戻サレ候事、右五ヶ年据置ノケ条、国土保安条例ニ因リ禁伐林ニ付本年ヨリ免税、

四月

一、国土保安条例ニ因リ本村以南ノ私所有山林ノ分、都テ免税、是ハ淀川水源土砂流出ニ因シ、禁伐林ノ故ナリ、

五月

一、本県知事岩崎小二郎氏大分県知事ニ被任、后任沖守固氏、神奈川県士族ナリ、元同県知事ナリ、五月六日赴任、

一、魯国皇太子殿下本國御來遊、本月初メ長崎御着艦、九州辺及ヒ京都

御巡覽后、十一日当県下御來遊、唐崎迄陸地御巡遊、三井寺御小憩、本県庁御中食ノ上陸地御帰京ノ途中、大津小辛崎町ニテ兇徒ノ為御遭難ニ付、一先ツ県庁へ御引戻ノ上汽車ニテ御帰京ナル、

右事変ニ付、我天皇陛下直チニ御訪問トシテ御來京、十二日午前六時新橋御發輦、午后十時御着京、同伴ニ付親王方并諸大臣及ヒ諸府県知事、諸方議員、市民等ニ至マテ御見舞トシテ來京多シ、皇太子ニハ神戸港ノ御乗船軍艦ニテ御療養、十三日午后京都御發途、汽車ニテ御越ニ付、陛下御送リトシテ御同行、同夜御帰京、皇太子ニハ本國皇帝陛下ノ指揮ニ因リ十九日神戸港御發艦、ウラシオストツクノ方江御廻、御帰國ニ付、我陛下当日御見立トシテ神戸江行幸、同日行在所江還御、廿一日東京江還幸被遊候事、

右ノ兇暴者三重県ノ土族、当時巡查ナル津田三藏ナル者ナリ、同月無期徒刑ニ処ラル、

五月十七日

一、滋賀県知事沖守固氏免職、同警部長齋藤某免職、位記返上、以下略、右ハ事変ノ件ニ依テナリ、

同日

一、右后任渡邊千秋氏長野県人ナリ、行政裁判所評定官、元鹿児島県知事、警部長后任龍岡某氏、右兩名即日赴任、

五月

一、此度都合ニ依リ所有地ノ内山林小字御靈殿山、小字中ノ庄谷、小字桜林ノ林地ノ内第九百九十式両地合三ヶ所橋本権兵衛氏江并小字大林ノ茶園畑、西田順作氏江売渡ス、五月十九日登記ス、

所有地改左之通 但シ役場ニテ取調、

〔以下、上段・下段を便宜的に一段に表記〕

〔上段〕

第三百七十壹番字膳所

三等

一、宅地五畝歩

地価貳拾貳円八拾五錢

第三百六十九番ノ内第一字同所

三等 ホイ口小ヤ

一、宅地拾六歩

地価貳円四拾四錢

第四百三十五番字同所

式等 居宅裏テ

一、藪地貳畝拾壹歩禁伐林

元地価四円廿六錢

〔上段欄外〕「明治廿二年十二月地租条例改正付免租」

第九百九十一番ノ内第一字桜林

三等

一、林五畝廿壹歩禁伐林

元地価壹円五拾錢

〔上段欄外〕「同上」

第九百九十式番ノ内第一字桜林

元地価拾貳錢 小家肥壺地

一、雜種地六歩

地価拾貳錢 小家肥壺地

〔下段〕

第三百六十九番字同所

三等 居宅ノ北

一、畑八畝廿五歩

地価三拾六円九拾貳錢

第四百貳拾六番字同所

三等 居宅ノ西

一、畑九畝八歩

地価三拾八円七拾貳錢

第九百九十一番字桜林

六等

一、畑八畝歩

地価壹円四拾貳錢

第九百九十一番ノ内第二字桜林

明治廿三年地類變換

一、林五畝九歩禁伐林

元畑地価拾三円五拾貳錢

第九百九十三番字桜林

等外

一、畑壹反五畝拾九歩

地価貳円七拾八錢

右地所ノ内字桜林ノ分五筆、明治廿六年三月廿四日細井氏江売渡ス、

登記済、

六月

一、本県知事渡邊千秋氏、北海道長官ニ被任、后任大越^{トオル}亨氏長崎県書記官原籍福岡^島県人ナリ、元相馬家ノ臣ナリ、

一、八月廿七日、鈴木正富東京ヨリ名古屋江出張、一泊ニ付此方ニ面談致度事件有之、出張ヲ依頼越シ候ニ依リ、同朝汽車ニテ出発、途中岐阜町一覽ノ上名護屋市へ午后一時過着、同夜正富着ノ上対談済、翌廿八日早朝出発、大垣ニテ下車、名所養老ノ滝大垣ヨリ、西南四里一覽、同所旅店村上当地広部氏ノ縁類ニテ中食、関ヶ原駅迄歩行三里、同所ヨリ汽車午后五時頃西田氏江着一泊、翌廿九日午前帰膳ス、左之宅地三畝八歩及建家共明治三十三年三月旧藩土占谷竹へ売渡、

九月

一、本村第三百八十一番宅地三畝八歩、地価拾四円九十三銭、此売代金五拾五円ニテ買得ス、尤建家費建具附、

但シ旧藩土野口氏ノ居宅ニシテ、維新后寺元樂五郎氏買得居住、此度売却被致ル、此畝歩外東隣ノ地、饗庭（同氏持地ノ内中ニテ寺元氏譲リ受ニ相成リ有之候旨、本人ヨリ了承ス、）

九月廿二日金三郎江登記済、即今借主瀬崎守次氏ニ貸置ク、堀崎氏ノ親族ナリ、右之地所建物共此度都合ニ依リ明治廿六年三月廿四日登記、自分江附替ル、

一、十月廿八日、午前六時三十分岐阜、愛知兩県下大地震ナリ、殊ニ大垣町、岐阜^{両町}市辺ノ惨状ハ全市中ノ七、八分人家崩壊シ出火所々ヨリ発リ、圧死亦ハ焼死人万余ニ及ヒ、前代未聞ノ状況ナリ、同時間当地中地震アリ、破損所多少アリ、所々石灯笼ノ転倒、殊ニ多シ、当県下ニテハ彦根、長浜^源辺強シ、但シ当日天快晴、尤此前四十日計リ雨ナシ、此地震ノ根原ハ岐阜県下本巢郡ニシテ、其近傍ノ地上凸凹ヲ生シ、所々烈割シ砂水等ヲ噴出スルコト数ヶ所ノ由、

同上ニ付富士山上北方ニ崩壊所出来、為メニ少シク形状ヲ変ス、同上ニテ大坂紡績会社煉瓦構造、崩潰シ圧死人十余名アリ、其他名護屋市辺ニテモ練瓦^煉ノ建造モノ崩壊殊ニ多シ、

一、第式回帝国議會十一月十六日開会相成ル、同十二月廿五日故アリ衆議院中止解散ヲ命ラル、

十二月

一、本県庁彦根江移転ノ議、県会閉会ノ当日ニ於テ決議相成、依之大津其他近郡不穩候処、政府ニ於テ不認可ニ相成ル、但シ此議決ニ於テハ公平ノ論旨ニ非ル由、

〔明治三十五年〕

明治廿五年辰一月

一、帝国議會衆議院議員改撰被仰出、二月十五日改撰アリ、再選人多シ、二月

一、本県會議員解散ヲ被命、但シ昨冬中止ヲ命シ内務大臣へ上伸ノ処、今般解散ノ命令ニ相成ル、

一、九月十三日、当地大風雨、但シ去ル五日駿遠州地方大風雨、

一、十月一日京都下寺町元塩竈町森伊三郎妻死去、但シ鈴木正富ノ妹ニシテ此方ノ姪ナリ、依テ忌服ヲ受ル、通称竹栄ナリ、庄藏ノ長女年二十八才、

十二月十一日

一、真量院三十三回忌相当ニ付、法事執行ス、詳細別帳ニアリ、右明治廿六年一月廿五日、旧曆正当ニ付内仏ニ於テ読経ヲ奉ス、十月

一、旧主本多康穰君ノ御勤功、嘉永六癸丑年以来国事御関係之事件取調御差出可有之様、宮内省ヨリ御達相成候処、御祥記^詳ノ書無之趣ニ而

当地江取調方御依頼越ニ相成、依之猪狩義章諸共、八、九十ノ式ケ月取調百拾余ケ条御手許江差上ル、扣別冊ニアリ、

一、中嶋緑二男鑲事明治廿一年十二月山田故米吉同旧藩士ニシテ中嶋家縁家相続人トナル、本年十二月ヨリ教育勉勵之為メ当方ニ寄宿ス、此時齡十式歳、

〔明治廿六年〕

明治廿六年巳

- 一、勢田川浚濬工事一月初旬ヨリ取掛リ、二月廿五日竣工ス、但シ場所ハ字黒津村ト字南郷村ノ間ニアル道馬ケ嶋ノ西手ニテ、長さ三百間浚へ、此土砂ヲ同所ノ西河岸江揚ル、尤右嶋ノ上ミ手ニテ水ヲ締切り、工事中東手へ水ヲ流ス、此事ニ付京坂ノ局ニ苦情多クシテ本省ノ許可大ニ迂延ス、
- 右前年度ノ工事ハ寛文八年ニ有之事、旧主家ノ御系譜ニ見ヘタリ、
- 一、本年度ノ寒氣ハ余程厳ニシテ、四、五十年來無之寒威ナリ、寒明キ后殊ニ強シ、華氏ノ二十四、五度也、
- 三月廿二日
- 一、此度都合ニ依リ再戸主之届差出ス、仍テ元戸主ノ悴ヲ養子トス、
- 四月二日
- 一、西田順作氏五女栗栄事、大津橋本町桐畑伊三郎氏妻ニ嫁附、伊三郎氏兄源三郎ノ妻ハ当地山崎友親氏ノ娘ナリ、
- 四月十七日
- 一、養子金子三郎儀不熟ニ付、離縁送籍之届取計候事、但シ右ノ件ハ三月十三日ヨリ発ル事ニシテ、四月七日県庁ノ雇被差免、同月十五日、同人ノ所持品悉皆相戻シ、同月十七日離縁送籍届差出ス、

右実家岡本家者当地鈴木瀧見氏方ノ親戚ニシテ、元來廻縁ニ有之、因テ此度離縁トスルモ双方何ノ故障モ無之、只本人ニ異存ヲ生ル而巳ニシテ実父ニオキテモ異存ナシ、

一、石山寺觀世音御開扉、四月十日ヨリ五月廿五日マテ、

一、此度白米小売商業ヲ開始ス、于時四月廿六日、

一、西田順作氏ノ妻房、六月廿一日午前第三時死、齡五十式歳、但此方

妹忌廿日、服九十日受、

一、七月六日、京都森伊三郎后妻結婚ニ付、正富代理旁列席ス、

六月

一、旧主本多康穰君從三位ニ御昇階、

十一月二日

一、鈴木故亀五郎元清儀、東京靖国神社江合祀被仰付候事、

但維新前後殉難者鹿兒島藩士某以下八十名、今般靖国神社江合祀

被仰出候付、本月五日同社ニ於テ招魂式執行、翌六日大祭典執行

ノ際被合祀候事（同藩士之内亀五郎、高嶋善之助外卒四名同〔脱カ〕上

右官報ニ有之、尚改而県知事ヨリ鈴木瀧見江達ラレノ書面取次東京

江送ル、

一、本年梅雨ノ頃岡山県外近県并岐阜県下等大洪水田畑ヲ流ス、其他一

般豊作ナレ共、米価高直、年末ニ至リ新十石八拾五円前後、同古九

拾五円前後ナリ、

一、十二月廿九日衆議院中止、解散ヲ被命、

八月

一、明後廿八年京都遷都千百年ノ紀年祭^念執行付、大極殿新築地所地鎮祭

アリ、京地大ニ賑フ、

〔明治廿七年〕

明治廿七年午

一、三月一日ヲ以衆議院議員総撰挙執行被仰出候事、

三月九日

一、宮中ニ於テ廿五年ノ大婚式（銀婚式トモ云フ）御執行アリ、八十歳以上ノ老人ヘ御祝金ヲ賜、皇国一般人民ヨリ献上物ヲ被為請、世上一般大ニ賑フ、

一、金刀比羅宮本社江社中代参トシテ五月十一日出発、十三日夜帰邑ス、但シ右者字中ノ庄生駒氏ノ金刀比羅社ニ維新前迄代参講結社アリテ毎年抽籤ヲ以代参致来候処、其后中絶シアルニ付、某主唱シテ再興ノ上抽籤ヲ行候処、自分并寺西仲氏当籤シ、外ニ生駒氏一秀、及村松素行氏、川津庄兵衛氏同行ス、

一、五月以来雨ナシ、カラ梅雨ナリ、其后モ旱天諸方雨乞願也、米穀高七月頃百石ニ付百五、六円也、

一、国会衆議院六月二日解散ノ命アリ、但シ硬派ノ上奏案ニ対シテナリ、
一、六月廿日午后二時東京并近国大地震アリ、家屋倒レ死傷多シ、殊ニ各煉化ノ煙突及ヒ煉化石造ノ建物ハ過半崩倒セリ、地震ニハ煉化造リハ甚危険ナリ、蓋シ年来考ウルニ晴天永ク続キ雨少キトキハ何地カ地震アリ、

一、桓武天皇平安遷都、明廿八年千百年御相当ニ付、紀念祭準備盛ナリ、因之、京都川東聖護院野ニ於テ平安神宮官幣大社新築、七月一日建柱式、附タリ京都三問題完成等ノ大祝典アリ、太々賑フ、蓋シ三問題ハ奠都紀念祭及第四回内国勸業博覧会并京鶴鉄道是ナリ、右同断、南方ニ於テ博覧会場新築ナル、

一、朝鮮国ニ東学党ナルモノ蜂起シニ依リ、清国ト干涉ノ事件モ有之、六月初旬我軍隊派遣ナル、清国ノ軍隊モ派出ス、蓋シ朝鮮国独立ノ件ニ付テ八年来清国ノ所致当ヲ失スルコト尠ラス、夫カ為屢葛藤ノ

事有之、今般数回応接、遂ニ条約破壊シ七月廿五日豊嶋沖ニ於テ清国軍艦十余隻、水雷艇数隻ト我軍艦八隻ト開戦、尤彼ヨリ兵端ヲ開ク、已ニシテ敵艦一隻撃沈メ、同一隻焼破、同一隻捕獲ス、我艦無事大勝利、同廿七日清兵屯集スル、朝鮮ノ牙山及ヒ廿九日同成歎ノ根拠等、激戦悉ク我軍大勝利、捕虜及ヒ捕獲品等夥多アリ、敵ノ残兵ハ平壤城ノ方向ヘ潰走セリト、但第二軍司令官山県有朋氏、

一、八月一日宣戦之大詔勅下ル、但シ清廷ニ於テモ同日宣戦ノ詔アリシ由、
右ニ付、双方共居留人民ハ万国公法第八十号ニ依リ米國領事はヲ扱事トナレリ、

一、我全国諸方ニ義勇兵団結シ、或ハ従軍願出ルモアリ、許可ナラズ、軍費或ハ恤兵部、赤十字社等ヘ献金及物品献納等盛ナリ、

一、右ニ付、恤兵部江金員若干献納ス、但村内部落協議団結ス、

一、八月八日、九州辺大地震アリ、

一、八月廿四日、日英^(英)兩國間改新条約御批准^(准)ニ成ル、蓋此主眼ハ内地雜居、尚他ノ件モアリテ御批准^(准)后十二ケ年間有効期限ナリ、御批准^(准)后五ケ年中ニ実行、

但シ本条約者調印ノ日ヨリ四年ヲ経テ後、通知ヲナシテ実施ス、

一、九月十三日御親征大本營ヲ広島ニ進ラル、天皇陛下大元帥之御資格ヲ以広島江行幸、十三日東京御発輦、名古屋御一泊、十四日神戸御一泊、十五日広島着御、十六日大本營開庁式ヲ挙ル、

一、朝鮮平壤城ノ屯集、清軍約二万ヲ九月十五日ヨリ攻激^(擊)、十六日未明全略取大勝利、捕獲品大砲其他夥多、俘虜五百卅九人ナリ、内百人天津營所預リ、十月十五日護送ナル、

一、九月十七日、黄海ノ北部海洋島ノ付近ニテ敵軍艦十四隻、水雷艇六隻、我連合艦隊十二隻ト激戦アリ、清軍艦四隻ヲ撃沈メ、或ハ爆破

沈没数隻、我艦無事大捷利、^(勝)

一、広島ニテ臨時国会開施、十月十八日開院式、蓋シ軍費金一億五千万円募集ノ件、右満場一致三日間ニシテ可決ス、

一、十月廿二日午后五時、山形、秋田両県下劇震アリ、^(激)人畜死傷多シ、震源ハ火山島海山ノ由、

一、同月廿四日、第二軍ハ金州半嶋ニ上陸ス、司令官ハ大山陸軍大将ナリ、

一、同月廿六日第一軍ハ九連城ヲ占領セリ、大砲五十五門、小銃千五百余挺、彈藥大式万発、小式百五十余万発、其他數品ヲ捕獲セリ、司令官ハ山県陸軍大将ナリ、后病ニ因リ帰朝、代リ野津中將后任大将

一、十月三十一日第一軍鳳凰城ヲ占領セリ、其后引続キ蓋平城及海城ヲ占領ス、大砲、小銃其他分取品多シ、以下戦捷毎ニ俘擒及ヒ捕獲品等頗多シ、尤捕虜ハ戦勝毎ニ夥多アリテ、漸次我本國江護送ニ相成ル、清國意外ノ不規律ニシテ稀ニ我國人捕虜トナルトキハ甚シキ惨酷ノ刑ニ処シ野蠻ノ行ナリ、

一、十一月四日清國安東県ニ日本第一軍民政庁ヲ置ル、人民帰順スル者多シ、此地本年ノ租税ヲ免ラル、

一、同六日第二軍ハ金州ヲ陥レ、七日大連灣ヲ占領セリ、^(連)

一、同廿一日第二軍ハ未明ヨリ旅順口ノ後方陸正面ノ諸砲臺ヲ攻撃占領シ、午后ヨリ旅順ニ進入、陸海ヨリ攻撃、翌廿二日未明ニ全占領セリ、戦利品殊ニ多シ、旅順港ハ清國王城北京ノ都、及ヒ天津等ノ接近渤海灣口ノ兩関門ノ一方堅壘ナリ、今一方ハ威海衛港ナリ、

一、清國ヨリ特ニ媾和ノ使節發遣、十一月廿日天津ヲ発来ル、之ヲ納レズ、同卅日帰途ニ就ク、但シ其他是迄各強國ノ中ヲシテ仲裁ヲ試ルモ是ヲ容レズ、

一、十二月廿五日ヨリ東京議院ニ於テ例會開設ナル、

〔明治二八年〕

明治二十八年

一、朝鮮政府モ我全權公使井上伯ノ尽力ニ因リ略整頓ノ由、

一、一月廿日、第二軍ハ清國山東省榮城灣ニ上陸ス、但シ威海衛ノ付近南西十余里ノ地ナリ、

一、清國ヨリ第二講和使一月下旬派遣、二月二日大本營広島県庁ニ於テ談判開設ナル、然ルニ使節ノ資格完備セザル為我全權弁理伊藤總理大臣、同陸奥陸軍大臣ハ談判ヲ拒絶シタリ、

一、一月卅一日、威海衛付近ノ海陸砲台數ヶ所ヲ陥落シ、二月二日午前威海衛ヲ占領セリ、但シ其前面ニアル劉公嶋及ヒ日嶋ハ未タ陥ラズ、

一、二月四、五兩日、威海衛港ニ於テ昼夜ノ激戦敵ノ軍艦三隻、外砲艦數隻撃沈或ハ破壊ス、此役我水雷艇モ多少損傷ス、敵ノ水雷艇數隻捕獲、或ハ撃壞ス、尚其后十日迄ニ軍艦式隻ヲ撃沈ス、清國ノ著名巨大ノ甲鉄艦二隻ノ内定遠号(長サ我九十七間余、巾十一間、二重底)

(長サ我百九十八呎六吋、凡我五十間八寸八分三、巾六十呎、凡我十間四寸八分三)モ此内ナリ、今一隻ハ姉妹艦鎮遠号也、但シ万国戦艦第三等ノ由、

一、同月十二日午前、敵ノ砲艦一艘白旗ヲ揚ケ来リ、丁提督(北洋艦隊水師提督丁汝昌)ノ書面ヲ以今ヤ生靈ヲ保全セン事ヲ冀望スル為軍艦兵器砲台等總テ貴國江獻スヘキニ因リ、陸海軍人及ヒ西洋人(清國ノ雇ナリ)人民ノ生命ヲ助ケ、各故郷ニ歸ルヲ許サレタシ云々ノ旨申来レリ、依テ我軍艦松嶋号ニ於テ日本艦隊司令長官伊東祐亨氏是ヲ承諾セラル、

一、朝鮮國ノ内乱東學党ナルモノハ同政府ノ行政不正ニ紀因シ、年来ノ徒党昨年七月初旬同國忠清道、全羅道、慶尚道ノ所々ニ蜂起ス、仍テ始終我軍主トナリ、韓兵之ニ加リ漸次追討シ、旧臘ノ頃全羅道辺

略二万余ノ逆徒本年二月初旬ニ至リ遂ニ撲滅ス、

一、二月十三日夜、丁汝昌自殺セリ、蓋シ昨日ノ使者ニ対シ我軍ヨリ明十三日中ニ諸引渡致サルヘキ旨回答ノ処、丁ハ兵員ノ都合云々ニ付、来ル十六日迄延期致サレタシト回答書面認メ終リ、我軍畢レリトテ自殺ヲ遂ケシ由、定遠艦長劉モ之ニ殉シ、亦劉公嶋陸軍統領張モ自殺セリト、

一、二月十七日、敵国軍艦鎮遠、平遠、濟遠、広丙ノ四艦、砲艦六隻、水雷艇数隻、及ニ各官衛、各砲台并水雷營所等総テ受取ヲ終ル、但シ鎮遠者定遠ノ姉妹艦ニシテ船体同シ、劉公嶋ノ守備兵及ヒ雇外国人等解放セラレ、英艦ニテ上海ニ至ル、降兵陸海合六千余ナリ、亦丁提督ノ遺骸及ヒ支那將校ハ康濟号一艦ヲ返シ与ヘ武装ヲ解キ、之ニ乗シ芝罘ニ到ル、我軍艦ハ之ニ対シ礼砲ヲ発シ弔意ヲ表セリ、此事タル清人、外国人トモ深感動ス、

右ノ始末ニテ清国ノ北洋艦隊ハ殲滅セリ、

一、昨年七月ヨリ前記ノ外、所々ノ城壘戰鬪連戦連捷、不遑枚挙之ニ因テ西洋各国人民ノ感動ヲ起セル事偉ナリ、

一、三月四日、第一軍ハ牛莊ヲ攻略ス、敵ノ一部ハ營口方面ニ逃レ去リ、大部ハ市街ニ抛リ、頑固ノ抵抗ヲ為セシ為、激烈ナル市街戦トナリ、此攻撃全略手ハ同夜十一時ナリ、此戦敵ノ死者ノミ千三百余人、降伏千余人、分捕品殊ニ夥多、我死傷合式百六人、尚引続同七日營口城ヲ、同九日田莊台ヲ占領セリ、

一、当旧藩士族ノ禄高不当ニ付、引直方昨年ヨリ国会江呈出請願之処、三月十一日衆議院通過可決相成ル、但シ貴族院ハ昨年五月可決ニ相成ル、衆議院者解散ヲ被命ニ付此度ニ相成ル、尤外数藩モ同伴ニ付連合請願ス、

一、三月十五日、平安神宮御遷宮式行ル、

一、后皇陛下広島ヘ行啓、三月十七日御発途、名古屋、神戸等御泊、十九日御着広、同地其他共預備病院江御慰問、夫々御品ヲ賜、

一、三月十七日、参謀総長小松彰仁親王殿下ニ征清大総督ヲ被命戦地江前進被命、四月十三日御進転、翌十四日宇品御出発、同十八日旅順港御着、

一、清国第三講和使頭等全權欽差大臣李鴻章三月十九日来朝ス、三月廿一日ヨリ馬関ニ於テ談判開設、

一、三月廿二日、我混成技隊ハ清ノ属国台湾付近ノ澎湖嶋を占領シ、同廿六日澎湖列島全占領セリ、

一、同月廿四日午后四時四十分、李鴻章講和会見、歸路旅館前ニオキテ遭難在リ、眼下一寸計リノ処射中ス、行凶人ハ群馬県人小山豊太郎ナル者、腕銃ヲ以狙撃ス、狂漢ノ処為ナリ、右行凶人ハ同月三十日山口地方裁判所ニ於テ無期徒刑ニ処ラル、

一、同月三十日、我天皇陛下ハ李大使ノ遭難ヲ傷マセラレ、畏キ 叡慮ヲ以三月卅日ヨリ三週間ノ休戦条約ヲ許サル、

一、李鴻章ノ容体頗爽快之趣、又同人御慰問ノ勅使ヲ下サル、尚官民トモ慰問者多シ、右傷痕四月十日頃ニ至リ全癒ニ付会見談判有、亦同人李経方全權大臣ノ任命清国帝王ヨリ電令アリ、但シ同人ハ初ヨリ李鴻章ニ随従アリ、

一、四月一日、第四回内国勸業博覧会開場式成ル、但シ七月卅一日マテトス、蓋シ此度ハ奠都紀念祭及博覧会ニテ、縦覧区域ハ広ク本県下及大和其他近国ノ各名所旧跡社寺、西ハ讃岐金刀比羅宮ニ至ル、準備相成ル、頗盛況ナリ、

一、平安神宮ニ於テ遷都千百年紀念大祭典執行、都合ニ因リ十一月マテ延期ナル、

一、大谷流本願寺両堂新築工事竣功ニ付、四月十五日御遷仏式、同十九

日御遷座式相成ル、頗賑ヒ雜踏ヲ極ム、

一、日清媾和条約相整四月十七日調印済、同日午后李大使以下乗船ス、

二葉后ノ○印入

一、大本宮ヲ京都江移サレ、天皇陛下四月廿七日広島御登輦、同日御着
京、后皇陛下京都江行啓、右ノ前日則廿六日御着京相成ル、

一、内閣書記官長伊東巳代治氏、全権弁理大使トシテ媾和条約交換ノ為
清国芝罘ヘ出張命ラレ、五月一日京都大本宮出發ス、清国媾和条約
批准五月八日午后十一時三十分芝罘ニ於テ交換相済、

勅令

朕明治二十八年四月十七日下ノ関ニ於テ、朕カ全権弁理大臣ト清国
全権大臣ノ記名調印シタル媾和条約及別約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セ
シム、御名御璽 明治二十八年五月十日

第一条 清国ハ朝鮮国ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認
ス、因テ右独立自主ヲ損害スヘキ朝鮮国ヨリ清国ニ対スル貢獻典
礼等ハ将来全ク之ヲ廢スベシ、

第二条 清国ハ左記ノ土地ノ主権並ニ該地方ニ在ル城壘、兵器製造
所及官有物ヲ永遠日本国ニ割与ス、

一、左ノ境界線内ニ在ル奉天省内部ノ地

鴨綠江口ヨリ該江ヲ遡リ安平河口ニ至リ 中略ス、但シ旅順

口此中ニアリ、

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼

二、台湾全島及其ノ付屬諸島嶼

三、澎湖列島 中略

第三条 中略 但シ境界ノ件、受渡ノ件、

第四条 清国ハ軍費賠償金トシテ庫平銀貳億兩ヲ日本国ニ仕払フベ
キコトヲ約ス、右金額ハ都合八回二分チ、初回及次回ニハ每回

五千萬兩ヲ仕払フベシ、而シテ初回ノ払込ハ本約批准交換後六箇
月以内ニ、 中略

第五条 日本国ヘ割与セラレタル地方ノ住民ニシテ右割与セラレタ
ル地方ノ外ニ住居セント欲スル者ハ、自由ニ其ノ所有不動産ヲ売
却シテ退去スルコトヲ得ヘシ 中略

第六条 日清兩國間ノ一切ノ条約ハ交戦ノ為消滅シタレハ、清国ハ
本約批准交換ノ後速ニ全権委員ヲ任命シ日本国全権委員ト通商航
海条約及陸路交通貿易ニ関スル約定ヲ締結スヘキコトヲ約ス、而
シテ現ニ清国ト欧州各国トノ間ニ存在スル諸条約章程ヲ以テ、該

日清兩國間諸条約ノ基礎トナスヘシ、 中略

第七条 現ニ清国版図内ニ在ル日本国軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後
三箇月内ニ於テスヘシ、但次条ニ載スル所ノ規定ニ從フヘキモノ
トス、

第八条 清国ハ本約ノ規定ヲ誠実ニ施行スヘキ担保トシテ日本国軍
隊ノ一時山東省威海衛ヲ占領スルコトヲ承諾ス、而シテ本約ニ規
定シタル軍費、賠償金ノ初回、次回ノ払込ヲ了リ、通商航海条約
ノ批准交換ヲ了リタル時ニ当リテ、清国政府ニテ右賠償金ノ殘額

ノ元利ニ対シ充分適當ナル取極ヲ立テ、清国海關稅ヲ以テ抵当ト
為スコトヲ承諾スルニ於テハ日本国ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場所ヨリ
撤回スヘシ、 中略

第九条 本約批准交換ノ上ハ直チニ其時現ニ有ル所ノ俘虜ヲ還付ス
ヘシ、而シテ清国ハ日本国ヨリ斯ク還付セラレタル所ノ俘虜ヲ虐
待若ハ処刑セザルヘキコトヲ約ス、 中略

第十条 本約批准交換ノ日ヨリ交戦ヲ止息スヘシ、

第十一条 本約ハ大日本国皇帝陛下、大清国皇帝陛下ニ於テ批准セ
ラルヘク、而シテ右批准ハ芝罘ニ於テ明治二十八年五月八日、即

光緒二十一年四月十四日ニ交換セラルルヘシ、

右証拠トシテ両帝国全権大臣ハ茲ニ記名調印スルモノナリ、

明治二十八年四月十七日、即光緒二十一年三月二十三日下ノ関ニ於テ二通ヲ作ル

大日本帝国全権弁理大臣内閣總理大臣
從二位勲一等伯爵 伊藤博文

大日本帝国全権弁理大臣外務大臣從二位勲一等子爵 陸奥宗光

大清帝国欽差頭等全権大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯 李鴻章

大清帝国欽差全権大臣二品頂戴前出使大臣 李經方

別約

第一条 本日調印シタル媾和條約第八条ノ規定ニ依リテ一時威海衛ヲ占領スヘキ日本国軍隊ハ一旅団ヲ超過セザルヘシ、而シテ該條約批准交換ノ日ヨリ清国ハ毎年右一時占領ニ関スル費用ノ四分ノ一庫平銀五拾万兩ヲ支払フヘシ、

第二条 威海衛ニ於ケル一時占領地ハ劉公島及威海衛灣ノ全沿岸ヨリ日本里数五里ノ地ヲ以テ其ノ区域ト為スヘシ、 中略

第三条 一時占領地ノ行政事務ハ仍等清国官吏ノ管理ニ歸スルモノトス、但清国官吏ハ常ニ日本国占領軍司令官力其ノ軍隊ノ健康安全、紀律ニ関シ、又ハ之力維持配置上ニ付必要ト認メ発スル所ノ命令ニ服従スヘキ義務アルモノトス、 中略

右年月日及記名調印前二同シ

〔欄外〕「二葉前ノ〇印へ入」

勅書

天佑ヲ保有シ万世一系ノ帝祚ヲ踐シタル大日本国皇帝（御名）此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス 朕親シク明治二十八年四月十七日下之関ニ於

テ帝国全権弁理大臣、清帝国全権大臣ノ記名調印シタル媾和條約及別約ノ各条目ヲ閱覽点檢シタルニ、善ク朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ、右條約及別約ヲ嘉納批准ス、

神武天皇即位紀元二千五百五十五年、明治二十八年四月二十日広島行在所ニ於テ親カラ名ヲ署シ、璽ヲ鈴セシム

御名 国璽

詔勅

朕曩ニ清国皇帝ノ請ニ依リ全権弁理大臣ヲ命シ、其簡派スル所ノ使臣ト会商シ、兩國媾和ノ條約ヲ締結セシメタリ、然ルニ露西亞、独逸兩國及法朗西共和国ノ政府ハ、日本帝国ガ遼東半島ノ讓地ヲ永久ノ所領トスルヲ以テ東洋永遠ノ平和ニ利アラスト為シ、交モ朕カ政府ニ懇懇スルニ其地域ノ保有ヲ永遠ニスル莫カラムコトヲ以テシタリ、

惟フニ朕カ常ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ、意ニ清国ト兵ヲ交フルニ至リシモノ、洵ニ東洋ノ平和ヲシテ永遠ニ鞏固ナラシメントスルノ目的ニ外ナラス、而シテ三國政府ノ友誼ヲ以テ切偲スル所、其意亦斯ニ存ス、朕平和ノ為ニ計ル、固ヨリ之ヲ容ル、ニ吝ナラザルノミナラス、更ニ事端ヲ滋シ、時局ヲ艱マシ治平回復ヲ遲滞セシメ、以テ民生ノ疾苦ヲ醸シ、国運ノ進張ヲ沮ムハ真ニ朕カ意ニアラス、且清国ハ媾和條約ノ締結ニ依リ已ニ渝盟ヲ悔ユルノ誠ヲ致シ、我が交戦ノ理由及目的ヲシテ天下ニ炳焉タラシム、今ニ於テ大局ニ顧ミ、寬洪以テ事ヲ処スルモ帝国ノ光荣ト威嚴トニ於テ毀損スル所アルヲ見ズ、

朕乃チ友邦ノ忠言ヲ容レ、朕カ政府ニ命シテ三國政府ニ照覆スルニ、其ノ意ヲ以テセシメタリ、若シ夫レ半島讓地ノ還付ニ関スル一切ノ措置ハ、朕特ニ二政府ヲシテ清国政府ト商定スル所アラシメントス、

今や媾和条約已ニ批准交換ヲ了シ、兩國ノ和親旧ニ復シ局外ノ列國亦斯ニ交誼ノ厚ヲ加フ、百僚臣庶其レ善ク朕力意ヲ体シ、深ク時勢ノ大局ニ視微ヲ慎ミ漸ク戒メ邦家ノ大計ヲ誤ルコト莫キヲ斯^期セヨ、

御名 御璽

明治二十八年五月十日 但シ三葉前ノ勅令ト同日ナリ、

- 一、五月廿九日、大本營ヲ東京江移サル、
- 一、五月廿九日、天皇陛下京都御發輦、東京へ還行、御途中静岡御一泊、翌三十日、皇后陛下 右同斷、
- 一、五月下旬ヨリ追々軍人凱旋ニ相成ル、京坂其他駅々歡迎盛ナリ、
- 一、今般清國ヨリ割与相成タル台湾嶋ノ内、淡水及三貂角、又基隆等賊徒蜂起ニ付、五月下旬近衛師団兵ニテ討伐相成
- 一、台湾請渡ニ付、同嶋總督樺山大將ト清國大使李經方ト六月二日受渡相濟、

但シ台北ノ人民ハ歸順ニシテ我ヲ歡迎セシモ、其他ノ人民ハ多少抵抗為シニ依リ、追々討伐ナル、

- 一、七月初旬、分取軍艦鎮遠号來着ス、我攻撃ノ彈痕四百六十余有之由、尤本年二月十七日受取后、六月ニ至迄旅順港ノドックニテ修繕ナル、
- 一、七月廿四、廿五ノ両日、中國筋及九州ノ東部大風雨、夫ケ為山陽鐵道汽車広嶋県下備後國尾ノ道近傍字福知ニテ、廿五日午前一時五十分進行中暴風雨ノ為ニテ線路破損セル為顛覆ス、機關車并客車十両、緩急車式両海中へ陥落シ、清國ヨリ歸營スル傷病兵八名外係リ員三名即死ス、外ニ負傷者多シ、
- 亦廿四日午后十時、九州鐵道汽車福岡県下ニテ客車三両、貨車一両転覆シ、即死者人、其外倒家及圧死人等諸方ニ多シ、
- 一、本年ハ梅雨ニ雨無ク、土用前ヨリ雨多ク、殊ニ土用入后七、八分ハ連雨ニシテ六十一年前天保六年ノ時候ニ略同シ、七月廿七、八日頃

殊ニ霖雨ニテ、本県下伊香、浅井、坂田ノ三郡洪水、諸川堤防破潰浸水ノ人戸数万戸ニ及フ、岐阜県下ニ於テモ同様ノ趣ナリ、

一、京坂及中國筋西國辺等虎列拉病并赤痢病流行ス、但シ戰爭有之后ハ西洋各國ニオキテモ此病多少有之由、清國北京杯モ此節殊ニ多キ由ナリ、

- 一、八月 伊藤總理大臣、侯爵陞授及大勲位ヲ授ケ給フ、又山県、大山、西郷三大將侯爵陞授、功ニ級ニ叙シ、金鷄勲章ヲ賜フ、尚其后陸海軍中、少將及同等官廿六名軍功、或ハ勲功ニ因リ特ニ伯爵陞授及子男爵ヲ授三級金鷄勲章ヲ賜フ、尚以下同シ、
- 八月

一、台湾ノ南部ノ乱民(党派アリ)尚猖獗ヲ極ム、仍テ征罰トシテ同嶋副總督高嶋中將并各師団ノ後備軍及海軍兵、近衛兵、憲兵隊等四万余人并人足貳万ヨリ人派遣ヲ命ラル

一、十月八日朝鮮國ノ王妃殺害セラル、本邦ニ關係アリテ一時動揺ス

一、台湾嶋ノ匪徒ノ首魁劉永福(清國ノ官員ニシテ元同嶋ノ役人)ナル者十月十二日皇軍ニ降伏ス、但シ劉ノ条件有之ニ付是ヲ容ス、依テ降ラス、

右首魁劉、同月十九日潛カニ船ニテ清國へ逃亡ス、降伏ノ捕虜五千余人アリ、

一、十月三十一日清國ヨリ償金ノ内金額五千万兩(償金貳億兩ノ四分ノ一二テ五千万兩我通貨ニ換算スレハ七千六百八拾九万兩ニ当ル、)英國倫敦ニテ受領相成ル、

一、去ル五月十日ノ詔勅ノ如ク、露独仏三国ノ干涉ニ因リ、清國ノ遼東半島(奉天省)還付ニ関スル商儀北京ニ於テ十一月四日兩全權委員會ニテ終決シ、十一月八日條約記名調印済(十二月三日御批准公布ナル)、十一月十六日約定ノ内償金清國ヨリ庫平銀三千万兩(壹兩

ハ我壹円五拾三錢七厘八毛) (英貨ニテ四百九拾三万五千四百拾七磅一志一斤四分ノ三) 受領相成ル、依之右領収后三ヶ月以内ニ我遼東ノ兵ヲ撤スル約定ナリ、然ルニ十二月末日迄ニ引払相成、右凱旋ノ歡迎諸方共頗ル盛ナリ、但シ威海衛ノ方守兵ハ償金皆納マテ撤セズ、此入費年々五十万兩宛請取定約ナリ、蓋シ右遼東還付相成ニ付テハ、政府ト兩儀院トノ衝突甚シ、

一、十二月十六、七、八日ノ三ヶ日、靖国神社臨時大祭典、但シ日清開戦々死者合祀ノ為也、

右ニ付、天皇陛下十七日行幸、后皇陛下^{ママ}十八日行啓被為在、三日共種々ノ余興等アリテ大盛況ノ由ナリ、

〔明治二十九年〕

明治二十九年 申ノ歲

一、昨年秋頃ヨリ本年春ニ至迄、日清ノ開戦ニテ戦死者及病人等ノ招魂祭、弔慰祭等、神或ハ仏式ニテ諸宮所ハ勿論官民ノ有志者ニテ盛ニ執行アリ、尤諸宗大寺毎ニ大ニ執行、都テ盛ナリ、

一、昨十二月中旬ヨリ台湾ノ匪徒亦々諸方ニ起リ、各民政所等ニ抗敵シ順民ヲ惱ス、依之二月初旬ヨリ討伐トシテ亦出兵アリ、同下旬ニ至リ首魁ハ悉ク誅戮シ略鎮定相成ル、

一、一月以來諸物價次第ニ騰貴シ、米価モ石四斗俵四円上下ニ至ル、但シ往古ヨリ戦争ノ后ハ万国ニ於テモ同様ノ姿ノ由、

一、二月十一日朝鮮国大變アリ、大君主ハ夜ニ紛レ露国公使館へ潛幸ノ上、新政府設立、当朝ニ至リ昨日迄ノ總理大臣金弘集、外大臣壹人ヲ殺害(慘酷ヲ極) 其他暴行甚シ、此件ニ付各国公使會議ニ於テ野蕃無法トノ評儀ノ旨ヲ聞知大ニ狼狽シ、詔勅ノ取消并修正等アリ、然ルニ此事變タル独立国ノ保護ニ係ル我国ニ対シ忘恩ハ勿論、甚不

都合極ル事ナリ、尚同国各所ノ暴民甚シ、

一、本県知事大越亨氏一月病死、同二月后任籠手田安定氏、但シ同氏ハ元本県令ニシテ、島根県又新潟県へ転シ、此度復県ナリ、

一、日清ノ開戦我大勝利ニ付、諸国神社ニ於テ昨今年祝祭盛ナリ、

一、戦鬪最中西洋各国陸海軍人及新聞記者等、陸海ノ戦争実視ノ為我軍艦江許可ヲ経乗込、亦ハ各自国ノ軍艦等ニテ実見夥多有之由、

一、黄海ノ戦大捷ノ日、靈鷹一羽遙空ヨリ下リ、軍艦高千穂ノ檣頭ニ止ル、艦長海軍大佐野貞水氏兵ニ令シテ躋リ之ヲ拏ヘシム、鷹腦ヲ垂レ平然トシテ動カズ、自ラ喜テ捕ヘラル、モノ、如シ、后之ヲ大本營ニ奏聞シ天覽ニ供セリ、乃チ其止ル所ノ艦名ヲ取り、高千穂ト命名シ留メテ營中ニ飼養セラル、是レ往昔 神武天皇、長髓彦ヲ討伐ノ時、神鷄弓弰ノ頂ニ止リ、克捷ノ偉績ヲ奏セシ吉瑞ノ屯ナリ、其他此度人力ノ及サル不思議ノ瑞等数々アリ、

一、此度ノ戦勝ニ鹵獲ノ戦利品ノ内、紀念ノ為皇国一般有格ノ神社仏閣及各高等学校以上へ大砲、小銃、軍旗其他諸品分配ニ相成候ナリ、依之当膳所神社へ小銃壹挺、榴彈丸壹個、清ノ軍服壹枚配置相成ル、

一、六月十五日午后八時三十分太平洋海岸大海嘯^{ツナミ}アリ、宮城、巖手、青森ノ三県下ニ亘リ、海岸延長凡百余里間、家屋ノ流亡数千戸、溺死人数万数千人ニ及フ、実ニ慘状ヲ極ム、亦北海道ニ於テモ日高十勝ノ式ケ国同様ナリ、但シ漸輕シ、

右ノ原因は太平洋中ノ熾火^{噴火}ノ為起リシ事ニテ地震モ是有、右ノ陸地へ四十尺以上ノ大浪打揚ル事、平面地凡一マキル以上ノ所ニ及フ、

一、七月岐阜県下大洪水、其他所々ニ洪水アリ、

一、八月卅日夜大風雨、但シ二十日ノ当日ナリ、午后六時頃北ヨリ起リ、同十時頃東南ニ終ル、琵琶湖追々増水シ、九月八日ニハ沿岸所々往還ニ揚ル、同十一日夜風雨強ク湖水弥高、亦風ノ為浸水ノ家屋当

地大津辺而已ニテモ数百ヲ倒ス、琵琶湖定水点ヨリ高事壹丈壹尺余
ニ及フ、百年以来ニ無キ洪水ノ由、野洲郡以北ハ諸川堤防数ヶ所破
潰ノ為、家屋流亡スルコト千戸以上ニ及ヒ溺死人亦数百アリ、亦岐
阜県及京都府下丹波地方等モ諸川堤防破潰ノ為、家屋流失、溺死人
夥多有之由、去天保七申年洪水ノ六十一年目ニシテ、都テ申年ハ往
古ヨリ水多キ事諸書ニアリ、

但シ八日后ハ降雨而已ニ止ラス伊勢、堺ノ山々崩壊シ噴水ノ為琵琶
湖ノ増水一夜ノ中二三尺計リノ増水アリ、前代未聞ノ事ナリ、

一、米価高直ニシテ、八月以后拾石百式拾円前後、新穀収入后モ同様
外諸品モ高、

一、真量院通名瀬大夫義程三十七回忌、真珠院通名奈尾十三回忌相
当ニ付、十一月八日法事執行ス、委細別帳ニ記之、

〔明治三〇年〕

明治三十年 酉乃とし

一、東京青山御所ニおゐて一月十一日皇太后宮崩御、孝明天皇ノ后皇
九条公ヨリ入内、同十三日御船入及御靈遷ノ御式、同十九日御入棺
御式、都テ四重ノ由、奉称英照皇太后宮、国喪^葬三十日間、二月二日（其
費途金七拾万円）青山御所御発輦、汽車ニテ翌三日京都大宮御所江
着御、同七日御葬送、午后六時御発車、泉山御式場江同十一時御着
同八日午前四時月輪新御陵江御埋棺相成、御行列供奉其他共美盛ナ
リ、宮中喪満一ヶ年間、

一、二月十八日西田岡蔵儀、当地遵義学校私立、則杉浦重文師江入学ノ
為メ当方へ寄留通学ス、但シ六月ニテ中止ス、

一、四月八日滋賀県知事従三位籠手田安定氏非職、后任折田平内氏薩摩
旧藩士、但シ広島県ヨリ転任、

一、天皇、后皇^{ママ}兩陛下四月十八日京都へ行幸啓、但シ英照皇陛下ノ御百ヶ
日御祭典ノ為ナリ、八月廿二日還幸啓、

一、鈴木正富儀重病之処終ニ七月三日午前一時死去、同四日唯傳寺へ葬
ス、依之七日後相続人女子静栄ニ、後見人母寿栄ニ取極届済之上、
一ト先里方糺村西田へ引移リ寄留ス、当村ノ家屋敷畑地等同姓鈴木、
増田、此方三家へ預リ差配ス、

一、皇国一般、本年十月ヨリ金貨制度ニ改革相成ル、但シ往古ヨリ銀貨
制度之処、西洋万国漸次金貨制度ニ相成、即今東洋（日本支部朝鮮
其他）而已銀貨制度ニ有之趣ニテ、万国交際上不都合不尠候由、因
テ此度改正相成ル、依之諸物価ノ変動ヲ来スナリ、

一、諸物価前代未聞之高直ニテ、十一月下旬新穀壹石<sup>田上来拾五円前後地来
上拾四円五拾錢前後</sup>
尤古米尚払底□上、大俵壹円五拾錢前後、当春以来同様也、亦耕地
屋敷地及建物等も兩三年前ノ凡三倍掛ノ直段ニテ、当辺ノ地所モ反
百円以上、其他物品大高直也、今ヨリ六十年前ノ申酉年モ穀物類ハ
粗同様ナレ共、他ノ物品ハ此度程ノ高直ニアラス、

一、皇国鎮台是迄六ヶ所、則東京、仙台、名護屋、大坂、広島、熊本ノ
六鎮台之処、本年度ヨリ拾式鎮台ヲ置ル、事ニ決定相成ル、

一、此度第一等軍艦富士、八嶋ノ姉妹兩艦、英国某二会社ニ於テ竣功
ニテ、十月前后ニ各到着ス、最鋼鉄艦ニシテ各壹万式千四百五十噸、
速力十九ヨ海里也、右八嶋号ノ方ハ艦体海里ニ於テ万国第一等、富
士号ノ方ハ同第三等ニ当ル由ナリ、

一、第十一議會十二月廿四日開院式、翌廿五日衆議院解散被仰出、
但シ右ハ内閣不信認問題提出有之、成立ニ付テ也、貴族院ハ中止
相成ル、

〔明治三二年〕

明治三十一年 戌とし

一、伊勢内宮五月廿四日午前第三時炎上、

一、曩^{サキ}二国会衆議院解散二付、臨時第十式議會六月開設相成候処、尚亦

衆議院解散被仰出、但シ政府提出之増税問題否決二付テノ由、

一、民法發布相成、七月十六日ヨリ実施ニナル、

一、七月初旬、政府内閣大改革、但シ薩長其他是迄之門閥ノ大臣悉皆辞

退ニテ政党内閣ニ相成、

一、諸物価倍々沸騰シ、米価八、九月石拾八円八、九拾錢、其他比之、

一、澁村西田氏ノ嗣子此方ノ甥岡蔵儀、十月廿九日婚姻式相整、但シ縁

女者草津町喜多村九右衛門ノ二女ナリ、

一、十一月、摂河泉三ヶ国ニおゐて四ヶ鎮台之陸海軍大演習有之、天皇

陛下同十四日大坂江行幸同廿日還幸、其前皇太子京都江行啓御対顔

被為在、

一、十一月二至リ政府内閣尚亦改革ニテ門閥政府ニ相成ル、

一、新米穀收穫后、米価頓ニ下落、十二月二至リ凡半直ニ相成ル、本年

ハ米穀大豊作ナリ、

〔明治三三年〕

明治三十二年 亥年

一、六月四日、中嶋弟緑ノ長女光栄十四年七ヶ月養女ニ貫請引移ル、

但シ入籍届之儀者追テ取計之事、尚系函ニ委シ、

一、七月ヨリ外国人雜居免サル、

〔明治三三年〕

同三十三年 子ノとし

一、妻号聞名院釈種仲光禪尼仲事、四月十七日午前十時十分病歿ス、同

十九日午后二時、唯傳寺ニ葬ス、本堂後口南端西向キニ埋葬、

一、四月下旬、海軍大演習肥前国佐賀ヲ中真トシテ三ヶ国ニ涉リ執行ア

リ、同月二十七日、大元帥陛下汽車ニテ舞子行在所江御着輦、同所

ヨリ軍艦ニ召レラレ、同廿九日、和歌浦ニテ終結ヲ天覽、翌三十日、

神戸湾ニテ大観艦式ニ臨マセラル、

一、五月十日、皇太子殿下大婚式、九条公姫君御入内、御名節子、

一、五月、清国動乱ニ付、万国軍艦派遣有之、尤公使館江モ抵抗有之ニ

付、皇国ヨリモ軍艦數隻陸海軍兵派遣、然ルニ同国ニ党派有之、各

国軍ニ対シ抵抗スルニ付、連合攻撃シ、天津初メ所々占領シ、終ニ

八月十四日北京城陥落ス、

△印入

一、此度暹羅^{シヤムロ}國ニテ釈尊ノ遺骨出現ス、依テ同國王ニ其一分ヲ請受シ

正使諸宗管長撰挙ノ上、東本願寺門主大谷光演師當撰シ、其他各宗

僧出張奉迎シ、七月十六日京都江御安着、当分妙法院宮内へ仮御鎮

座相成ル、

右釈尊ノ出世年代ハ、異説紛々トシテ確定スルヲ得サルモ、我邦

普通ノ伝説タル、周ノ穆王五十三申^{壬申年}ノ入滅トスレハ、今明

治三十三年ヲ距ルコト二千九百廿九年前、即チ神武天皇即位前

三百六十九年前也、其八十年前ニ藍毘尼園^{ラムビニ}ニ於テ降誕シ給ヒ、八十

歳ノ寿ヲ以テ寂ヲ示シ給ヘリ、大衆荼毘ニ付シ、御遺形ハ八ヶ国ノ

王領ヲ受テ、各供養セラル、奉迎記事ニ委シ、

但シ釈尊入滅后 神武天皇即位紀元マテ式三百九十六拾九年ヲ隔ツ、

△印へ

此度大聖釈迦牟尼仏ノ御遺形忽然出現ス、其土地ハ印度中、今英

領ピツプラーワと称スル地方ニシテ、ペツペなる人ノ所有地、發

掘セシヨリ御遺形及宝玉類出現、依テ是ヲ悉皆英国政府江寄贈ス、
同国ヨリ目下唯一ノ仏教国ト云ヘキ暹羅（シヤムロ）王室ヘ御遺
形悉皆贈進セラル、然ルニ外ニ、三ノ政府ヨリ懇請ニ依リ、同王
室ヨリ一部頒与アリ、依之、本邦公使稲垣氏一個人ヲ以本邦三千
余万人之信徒ヘ一部ヲ頒与ノ請求ニ因リ、国王聞届ラレ、則（正
使ヘツ、ク）

〔明治三十四年〕

明治三十四年 辛丑年

- 一、四月廿九日午后十時、於東京 皇孫殿下御生誕、五月五日御命名式
奉称^{ヒロヒト}裕仁親王、御母妃殿下節子、九条道孝公御三女、
- 一、七月廿日、当膳所村ノ儀、此度願ニ依リ町制聞届ニナル、

〔明治三十五年〕

明治三十五年壬寅年

- 一、一月下旬、青森県ノ兵隊演習ノ為山中ニ於テ凍死、凡式百名、但シ
積雪ノ為、^英
- 一、二月日、^英 央国同盟協約成ル、
- 一、三月廿五日ヨリ五十日間、京都天満宮千年忌ニ付万灯献備アリ、
- 一、此度当藩士千葉精三郎二男胤之助養子熟談ニ付、結納送ル、胤之助
明治十五年一月九日生、媒鈴木嘉光、但シ千葉氏ハ神谷保太郎従弟
ナリ、此時四月六日ナリ、但シ昨明治廿四年五月相談相成ル、
- 一、十月、美津栄養子届差出ス、
- 一、養子千葉胤之助、十一月廿二日夜引移ル、但シ当分内分ナリ、

〔明治三十六年〕

明治三十六卯年

- 三月、当地安昌寺ニ於テ授戒^{カキ}ヲ受、同授男女百余人、
- 三月ヨリ七月ニ至、大坂ニ於テ第五回内国勸業博覧会執行、右ニ付
六月六、七ノ両日式泊カケニテ遊覧、胤之助同伴ニテ下坂ス、
- 一、七月十日、養子縁組届差出ス、
- 一、同日、婚姻届差出ス、
- 第三十四年ノ書洩、同年ハ釈尊滅后式千八百五拾年大遠忌、嵯峨清
涼寺ニ於テ修行ナル、我紀元式千五百六拾壹年ナリ、釈尊滅後我紀
元マテ式百八拾九年ヲ隔ツ、式百九拾年目我紀元ト成ル、
- 一、十一月、崇靈社祭典、生駒宅ニ於テ波多之仲刀自ノ神祭祀之、但シ
本年五年目ナリ、

〔明治三十七年〕

同三十七辰年

- 一、二月八日ヨリ魯西亜国ト清国ノ満州沖ニ於テ戦争、但シ同十一日宣
戦ノ 詔勅發布、右同国ハ從來欺謾ニシテ、殊ニ即今条約ヲ履行セ
サルニ依ル、即今海戦大勝利、十三日記ス、
 - 右ノ后、追々遼東半島地ニ於テ戦争ト成、所々勝利、
 - 一、九月八日午前十時、胤之助嫡男出生、同十三日午后三時歿ス、
 - 一、同十四日午后五時葬、唯傳寺堂後南、但シ聞名院墓ノ南隣リ、右釈
智英童子、
- 〔明治三十八年〕
明治三十八年 巳
- 一、七月、露国バルチック艦隊壹岐對馬沖ヲ回ル際大戦争、三拾余隻略全
滅ス、依之、艦隊長官ヘ勅書ヲ賜ル、

- 一、八月、日露戦争、米国大統領之ヲ仲裁ス、同月七日、両全権公使ハ米国ノ談判地ボーツマウスに向赴キタリ、米国ノ大統領ヲ訪問ノ席上ニヨキテ、露国ノ両全権ニ向ヒ、露国ハ戦敗国タルヲ記憶セザルベカラズ、從テ其覚悟ヲ以万事行動スベシトノコトヲ勸告シタリ、
- 一、九月上旬、講和談判決定ス、但シアメリカ之大統領ノ仲裁、
- 一、講和談判終結後、諸国共動揺甚シ、談判ノ決定至当ナラザラザルニヨルカ、
- 一、十一月十日午前一時、但シ子ノ刻ナリ、右胤之助長女出産ス、命名貞子、
- 一、九月廿七日カ小便不通病ニ罹リ、大津松本医病院へ入院、十一月三日略快方ニ付退院ス、

〔明治三九年〕

同卅九年 午

- 二月、此度英国ガーター大勲章（最高位大勲章）ニシテ再同盟協約御結ヒ相成候付、御贈進相成、同国皇太子アーザー親王殿下御使トシテ二月十八日我国江御到来有之、
- 右勲章ハ拾余ヶ条有之、拾ヶ年功力有之、内一ツハ異国ト若シ戦争有之節、互ニ尽力シテ戦、一ツハ東洋ニ於テ異変有之節尽力、

大津市歴史博物館調査報告書4
膳所藩土羽太家諸事控

編集・発行

大津市歴史博物館

〒五二〇—〇〇三七

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七—五二二—二二〇〇

発行日

令和五年（二〇二三）三月三十一日

印刷

有限会社竹田膳写堂

大津古文書研究会

秋山恭伸

石黒園子

櫻井迪朗

高野隆一

藤井佑子

（故）谷口利正